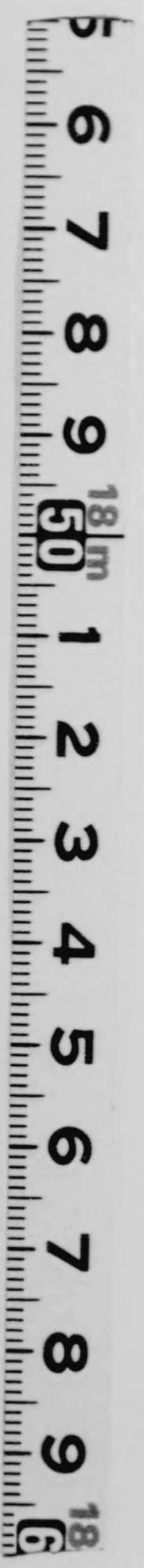
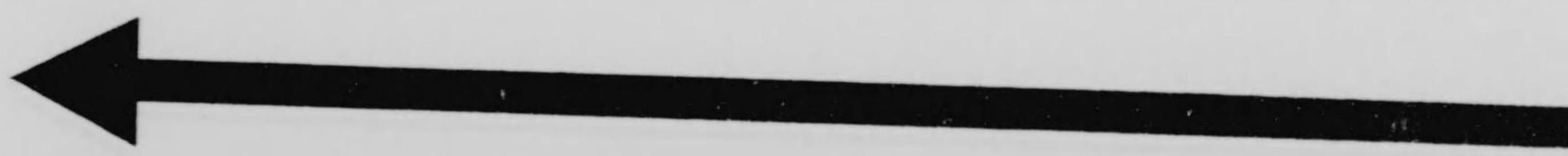


375
35



始



29.10.29

375-35
編五第庫文養修



世俗訓

慶應義塾大學教授文學士有馬祐政
學習院教授 鳥野幸次 編修

東京

修養文庫刊行會

大正
9. 1. 28
内交

例言

一本編は世俗訓と題し、「齊家論」外十種の心學に關する著作を收めたり。
一齊家論は石田梅巖の著にして、心學開講の主意より、主として奢侈を戒め
儉約を旨とし、私欲を離れ、正直を守るべき事を述べたり。梅巖は心學の
始祖にして、名は勘平、丹波桑田郡の人、貞享二年に生る。二十三歳の時
京都に上り、一商家に奉公せしが、初め神道を慕ひ、商用にて出歩く時に
も、書を懷中して之を讀みたりといふ。爾來修學工夫を積みしかども、三
十五六歳までは師といふものも無かりしに、一日僧了雲に謁して性の論に
及び、悦服する所あり、後四十歳ばかりの時、母の看病に際し、堯舜の道
は孝弟のみと悟り、四十二三歳の時、主家を退きてはじめて講釋を開けり。
著す所の書二部、一を「都鄙問答」といひ、一は即ち此の「齊家論」なり。延

享元年九月病みて家に歿す、享年六十。抑も心學の淵源する所は、宋の陸象山にあり。其の説に曰く、理は宇宙に遍滿し、唯一無二、心は即ち理にして、人各本心あり、之を明かにすれば皆聖人たるべしと。明の王陽明此の學をつぎて知行合一を説き、夫れ聖人の學は心學なりといへり。是れ心學の語の出所なり。而して此の學統を襲へるもの、本朝には中江藤樹、三輪執齋等あり、石田一派の學もこれに基づきたりと雖も、又別に神佛の教理を加味し、三教の一致を説き、是等の學問が士流以上の専有する所なりしに反し、その對象を町人以下に置き、其のいふ所通俗卑近を旨とし、入り易くして實行に益あらん事を主とせしを以て、忽ち四方に傳播するに至れり。「北窓瑣談」に曰く、「近き年心學といふ事は行はれて、其の講釋には聴衆甚だ多く、三百人五百人に及べり。最初を石田勘平といふ。此の人の時は、未だ甚だしからず。其の弟子を堵庵といふ、俗稱を手島嘉右衛門といふ。

ふ。此の堵庵の時に大に行はれ、門人も甚だ多く、諸所に出て講説す。堵庵の弟子を道二というて、此の人またその師にまざりて大に行はる。三郡ともに其の學館を開きて、常に心法を學ぶ。其の學館を某舎と名づく。京にも四五個所もあり」と。以て其の盛況を知るに足るべし。

鳩翁道話、同續編、同續々編は、柴田鳩翁の講説せる所を、男武修の筆記せるものにして、所説剗切、比喻巧妙、此の種の著作中最も出色あるものたるは、世の已に定論ある所なり。鳩翁は京都の人、通稱を謙藏といひ、剃髮して鳩翁と號す。父は醫を業とせしが、火災にあひて家道衰へ、鳩翁も十一歳の時、一商家に奉公に出てたり。後儒によりて家を起さんと欲し、江戸に出て、苦學數年にして京に歸り、三十九歳の時、はじめて薩埵與右衛門に心學を學び、爾來石門の學に潛心するに至れり。かくて四十五歳の時に失明せしかども、聊か屈する事なく、益諸方の巡講につとめ、天保十

年五月病みて其の家に歿せり。時に年五十六。

一民の繁榮は、己を知り、分に安んじ、欲を慎み、心を一にして事に勵むべき理を面白き話に託して説きたるを以て、心學書中最も興味を以て讀むべきものにして、脇坂義堂の著なり。義堂は京都の人、堵庵の門人にして、此の外に『御代の恩澤』をはじめ數種の著作あれども、傳記は詳ならず。

一孝行になるの傳授は、或不孝者を諭さんとして説きたるものにして、主として奈良孝女おともの傳とも見るべきもの。此の孝女の實際にありし人なるか、或は假託なるかは今明かならざれども、その行跡の人心を感發せしむる事の大なるは勿論にして、文章も亦頗る見るべし。作者は同じく脇坂義堂なり。

一賣卜先生糠俵は、賣卜先生が、願望又は煩悶等を齎して判斷を乞に來る諸人に對し、それ〴〵説諭教示する體に作りたるものにして、安永六年の刊

行に係り、虚白齋の著なり。同後編は、翌年の刊行にして、賣卜先生の夢中に、蛙蟹などの諸蟲あらはれて問答辯難し、結局心學の主意に合致せしむるやうに説きたるものなり。著者虚白齋の傳記も亦詳ならず。唯兩編ともに手島堵庵の跋あるを以て、同時代の人たるを知るべく、又太田南畝の『一話一言』に、「又鎌田一學といふ者あり、賣卜先生糠俵『同後編』ありべかへり」を著すとあるに據りて、其の姓名を知るべきのみ。

一雨やどりも亦虚白齋の著にして、蛤と鮑、足と手、乳母と丁稚との如き相以よりたる者が、自我の主張を問答するに託し、各身の程を知り、正直を臺として、身最良をやむべき事を、面白き喩話によりて説きたるものなり。

一心學初入手引草は、其の題號の如く、心學入門者の爲に、此の學の主意を説きたるものにして、多く道歌を挿入し、又例話を交へなり。文政四年の刊行に係り、大島有隣の作なり。

一 新實語教は、空海作と傳へらるゝ「實語教」にみらひ、人間の旨と心得べき事を、六言對句に叙したるものにして手島塔庵の作なり。塔庵は通稱を近江屋源右衛門と稱し、京都四條富小路の商人なりしが、家をその子に傳へて老し、名を嘉右衛門と改む。塔庵が石門の高弟として門徒の多かりし事は、前にいへる所の如く、教説感化の功亦極めて多かりき。天明六年、六十九歳を以て歿す。遠近傳へ聞き、來りて葬を送る者數千人に及びきといふ。

世俗訓

目次

一	齊家論……………	石田梅巖述……………	一
二	鳩翁道話……………	柴田鳩翁述……………	三七
三	續鳩翁道話……………	同……………	三五
四	續々鳩翁道話……………	同……………	三七
五	民の繁榮……………	脇坂義堂述……………	三九
六	孝行になるの傳授……………	同……………	六一
七	賣卜先生糠俵……………	虛白齋述……………	五五

目次

目次

八 同後篇……………同 上……………三二

九 雨やごり……………同 上……………四一

十 心學初入手引草……………大嶋有隣述……………五五

十一 新實語教……………手島塔庵述……………五三

世俗訓

目次

一 齊家論

石田梅巖著

上……………一

自序——心學の開講——友人の忠告——武藏の孝子長五郎——越後の孝婦——
 儉約が本——争ふことを教ふるは如何——教ふる所は聖賢の口まね——儉
 約は常のことなり——今の世間の奢——愚痴變じて奢となる——物に相應あ
 り——楚の子西——人を賤しむるは如何——貴賤の分を知らしむべし——治
 世と亂世——大阪の大火の慘狀——戰國時代の有様——報恩の道

下.....三

聽講に袴を著せぬは如何 禮のもと 性善の徳 近世の學問の失
儉約示し合せの序文 吝は不仁のもと 奉公人をいたはるべし 身を
修むる主は唯心のみ 放心 名聞と利欲 色欲 人は小天地 士
農工商 私欲をはなれよ 關東洪水の時の話 正直を守る 赤
裸になり借金をすませ ながらざりせばすなはちの神 赤裸になつても
正直を用ゐる心にや 實情 聖人の心は明鏡止水の如し

二 鳩翁道話

柴田鳩翁述
男 武修聞書

壹の上.....三七

仁の解 はくらんの藥 仁は無理のないこと あるべきやう 仁は
萬人のわけて持つ所 本心を師とす 義は無理をせぬこと それぞれ
道のあること 中澤道二の咄 豪家の娘と諸藝 按摩のけいこも御し

こみか 蟻歌一つも勤善の縁 琴三味線とどだつた子 京の蛙と大阪
の蛙 目のつけ所がちがふよりの誤 ちれがちれが 仁政のありがた
さ ちかよ見ずの胸算用 ささきのたとへ 放心 身にかへりて吟
味が肝要

壹の下.....三三

放心を戒む 學問は心のことなり わがまゝ育ちの子 身に立かへれ
ばをさするに 不孝者の心 子を思ふ親の心 母親の決心 兩親の
慈愛 子の尻から乞食して付き歩く 子の悔悟 不孝息子孝行となる
母親の末期の喜び 我身に立かへるべし

貳の上.....三七

指の人に若かざるを惡む 惡を差づる心 妻の恥心の恥 惡む事の類
を知らぬもの 大をすて小をとる 形の世話を喜ぶ 心の世話を怒る

長吉のつまみ食ひ——人の心はかくされぬ——心が顔に顯はる——兩替屋のはなし——本心を見覺えるが肝要——鹿の音を聞きに行きし咄——不孝の子——店のものゝ不都合——親類縁者の無心——家内と母との不和合——晝夜の愁嘆——なかぬ用心

貳の 下……………六一

日蓮上人の歌——神國の教も正直を本とす——家は旦那の心一つ——眞すぐな力——ゆがむについての咄——脱落——無分別——若いは能いがしどがな——一足あとへたちもどる事が出来ぬ——身をよする所が大事——山中の古寺——居さうらう——親の慈悲を思出す——腹切らうか首縊らうか——心の有所が肝要——おそろしいものは金銀——心は身を害ふ事をも思付く——からずを隙におくはおほきな毒——腹の中から石川五衛門——昔は物を思はざりけり——脇の下から冷汗——歌のこゝろ——天の網はのがれぬ——歌の徳——手習讀書に精を出せ——昔のさんげ咄——立かへり——我が身が可愛

いよりの無分別——あとへんがこひしうなる——樂は心の生れつき——或獨り者の咄——隣が火事じゃ——開がりの心もち

参の 上……………六七

孟子桐梓の章——我が身を養ふ事を知らず——得手勝手な事ばかり——身心一雙——身につかはるゝ心——婦人花見の咄——かし雲隠——身最眞身勝手の強欲者の咄——茶かたの雪隠一度八文のかし雪隠——八兵衛の雪隠にはひりさり——はらわたの開帳——萬物と我一體——腹の中のむさいきたない店おろし——恐ろしい話——後妻——娘へ婿をもらはう——繼母娘を殺す——亭主の一言にて恐ろしい心になる——おのが身より火を出す——一念化生の鬼女

参の 下……………七三

危きうき世の橋——娘蘇生す——惡の報い——どういふ譯で——こはい夢——

― 押づよい母親 ― 孝心な娘 ― 平生の志、所作の上にあらはるゝ ― 黒龍
 はめいめいの腹の中 ― 隠れたるより顯るゝはなし ― 村中の評判 ― 人し
 れずこそ思ひそめしか ― 九年甫のはなし ― 此の八年甫を御目にかけます
 ― 繼母の白狀 ― 娘が誠よりいつはりの答 ― ありがたい孝心 ― 金剛不
 壞の心 ― 御上の御仁政 ― 身最肩身勝手は役にたゝぬ ― 一の了簡ちがひ
 より ― 我なしになる傳授 ― 前川常營の跋文

三 續鳩翁道話

柴田鳩翁述
男 武修聞書

壺の上……………三五

源寵天の序文 ― 中山美石の序文 ― 明德を明にするしやう ― 本心に目を
 付くること ― 霧にぞいたく袖ぬらす ― 寝小便をする小者の咄 ― 小者、
 馬部屋の二階より落つ ― 馬が二階へあがりました ― 立反つて腹の吟味 ―
 何とも仕方のないくされもの ― 談義僧 ― 駕籠の底がぬける ― 此の方

に其の妻があればこそ人はいふ ― よしあしは人に見えすく ― はじめの覺
 悟にあり ― 娘が覺悟の手紙 ― あづかりの此身 ― 一生嫁入口をさがしま
 はる ― 竹の堪忍 ― 萬行一心 ― 唐黍も辛抱 ― 或娘の話 ― 娘の二心 ―
 結除をしよふせた人のはなし ― 老人夫婦の呉服屋 ― 望んで来た養子 ―
 一むつかしい両親の氣質 ― ありがたい目のつけ所 ― 己れの無分別を削り
 て先方に合せよ

壺の下……………一四

身をすてゝこそ浮む瀬もあれ ― おれがを捨てれば浮み上る ― 救荒一助 ―
 土粥の制法 ― 江戸屋某の咄 ― 非常の困窮 ― 女房の病死 ― 主人の逃亡
 ― 乳母の義信 ― 百里の道をはだし参り ― 三ツの願だて ― 志ある者は
 成る ― 人の志 ― 志は氣の帥なり人は氣によつて動く ― 志がたてば氣は
 ひきたつ ― 鏡を知らぬ國の人のなし ― わが顔を親父と思ふ ― 廿五六
 の女 ― 倍氣喧嘩の花が咲く ― 二階の女中が尼になられました ― 我が身

をかへりみるが學問——乳母が推量に違はぬ——家名相續の願——乳母の艱難辛苦——乳母の實子をも取寄す——百里の外へうみの子を追ひやる——木曾殿と齋藤別當實盛——養はれた恩は重し——妄念のかたまり——手代の咄——十年の年季を勤めたい——忠孝は天下の大本——橋彌の心掛——物をあはれむ心——實子文五郎の初登り——本心をみがくが肝要

貳の上

般の湯王が盤の銘——固有の本心——己が本心を明かにす——或茶人の咄——掃除の吟味——珍らしい掃除道具——こまかいほこりをとる分別——心の掃除せぬよりの事——亭主の短氣女房の氣長——いろいろの氣質で家がをさまる——音樂のたとへ——目くら雙壁のたとへ——親大切といふ調子——心の洗濯が大事——堯舜と湯武——子は育方が大事——心學——教は時をしるが第一——金米糖をつかんだ咄——人みなつかじもの——目くらのたとへ——目くら提燈——本心を見失はぬやう

貳の下

心の關守もがな——明德をあきらかにする手段——八識——六塵——心は大切な關所——關所のたとへ——心の番——おそろしい咄——大根賣——親のいふ事を聞かなんだ報い——釜の中に蜘蛛の巣——君子の困窮——小人の困窮天命の貧乏——天竺の獵人の猿をとる咄——とかく辛抱が大事——貧のぬすみ——垢を洗へ——はじめて夢がさめて來た——本心の發見——習性となる——清水寺の繪馬——八百屋舊恩を謝す——俄目くら——目の玉の洗濯

參の上

正善に止るの工夫——本心——長吉の返辭のたとへ——赤子の生れおちた時——赤子と大人——我なし——額々覺ゆる時は頭痛あり——楊弓のたとへ——道——今の世は近道を好む——勤辨者の咄——やくにたぬ近道——暫く待てば時節が到來するものを——ならぬ事はならぬと知る——本心をしる——

—極樂見物の咄— 耳の佛— 舌の干物— 止るべき所にとどまるとは—
所詮は心の事なり— 面づくりの咄— 心が顔にあらはる

参の 下……………三二

道は忘れず— 至善は我なしのきつする— 我なしを勤めた人の咄— 次郎
右衛門父子— 次左衛門の孝心— 次左衛門我なしの行状— 親どものいは
れる様にすれば寒氣も身に入らず— 忠孝はからだの養生— 口ごたへをせ
ぬ— 親にむかへば親ばかり— 耳を驚かす行状— 孝子の心— 領主より
の褒美— 次左衛門年を申されぬ仔細— 不孝な息子の咄— 鶏金をはこぶ
— 鶏のべつかこう

四 續々鳩翁道話

柴田 鳩翁述
男 武修 聞書

壹の 上……………三七

性と道と教— 天の命— 天の四徳— 春夏秋冬— 性は本心— 人の性は

善— 道の解— 形につれての氣質— 教の必要— 中庸の解— 中の極意
— 孔門傳授の心法— 一生安樂になる法— 煙管のたとへ人の道— 人
欲のよごれ— 腹の中の掃除— さらに煙管といふ異名— 繁華の地にすむ人
— 片田舎に育つ人— 教のたとへ— 學問が疵— 師を撰む— くせづき
— 煙草好の道づれ— 煙草責め— 道成寺の話— 焼頬火にこりず

壹の 下……………三九

天人一致— 誠も一つ— 本心のさし圖— 精一の工夫— 此の心、直に天
— 松茸のたとへ— 生れつきにかんふやうに爲す— 人の氣質の清濁—
卯右衛門の咄— 御勸化によりて開發— 宿善即ち佛性— 三教一致— 法
華と淨土との宗論— 法華は算盤にかゝらぬ— 酒のたとへ— 改心後の卯
右衛門— 嫁の邪見— 不孝ものゆゑ追ひださぬ— 嫁の短氣— 嫁、孝行
となる— 難産についての咄— 本心をだます— 馬士のわるさの咄— 今
夜の雪がありがたい— 馬かた改悟して同行となる

貳の上……………二五

道は離るべからず——人と道——性の徳——道を知ると知らぬと——目くら
のたとへ——或隠居の咄——小人と君子——人の見る所と人の見ぬ所——獨
を慎むの例——敬畏の心——農業にすぐれし人の咄——忠孝貞節おのづから
勤まる——仕來りの家業——身分だけの限り——本尊の取替へ——怠りも穂
にあらはれて見ゆ——道具屋のはなし——家をよみつぶして來た道具

貳の下……………二六〇

省察の工夫——微しきより顯なるはなし——天狗の咄——腹の中の用心——
悪手代の咄——本心が合點せぬ——迷ひ犬のたとへ——畜生も恩を知らぬと
いはれては恥づ——伊兵衛佐兵衛の敵討——本心の發見——實體な息子を芝
居にさそふ——芝居のうさみ——柳下惠と盜跖——良知の鏡に照して辨へよ
——かの手代が何氣ない體でもどつて來た——手代の悔悟

參の上……………二九五

中と和——性と情——性の解——天下の達道——知れた通りに行ふこと——
明德の玉を磨く——面向不背の玉——まが玉——碎けてしまへばたゞ世界は
かり——無造作な味——心學の徳——性にしたがふ道——農夫關藏のはなし
弟伊八——嫁お石——女は夫次第——お石の孝義——伊八の不身持——出來
のわるい内儀の咄——女はちひさう物をいふもの——嫁を歸といふこと——
發して節にあたる——本心の圖通り——安樂と苦勞——伊八の逐電

參の下……………三〇〇

天人一致萬物一體——獨をつゝしむ工夫の出來不出來——お石の義節——お
石の行狀——關藏腰ぬけとなる——姑も亦腰ぬく——お石の孝行——お石お
そく家に歸る——是を己にもとむ——舅姑を負ひて法談に詣づ——見る人驚
歎せぬはなし——奇妙な人——國主より褒賞せらる——伊八の行衛をたづぬ

孝行の徳——伊八の後悔——性にしたがふの道——本心の明り

五 民の繁榮

脇坂義堂述

一の巻.....三三七

虚白齋の序文——我が過ちは見えぬもの——臭き物は其元の鼻のさきであり
——欲はほしいまゝにすべからず——唐の博識者と仙人——少しの米を給へ
——次には土藏——次には家——次には金銀の藏——次には衣服の倉——君
の指を與へよ——限りなき欲望につかはる——虎と蟻との問答——和合の徳
——身を慎む

二の巻.....三三九

遊女の諫言——實體の息子——放蕩の息子——金銀ほど大切なるものはなし
——富豪の息子——堪忍箱と名づけたる錢箱——二割づゝのかんにん——精

出して遊女通ひ——物は聞き方——狐の怪——大儒

三の巻.....三四九

飢饉年——己をすてゝ人を恵む——富家の人は貧窮人の腹知らず——天満宮
の信者と諸神諸佛の信者——心多くては一事をも成就せず——言葉は大事——
——物事を仰山にいふ能忽者——言語の出入——百軒家持の類焼——氣病の療
治——萬病は氣の滞りより——養生は唯はたらくにしくはなし——おのおの
の心得が苦をも樂をもさす

四の巻.....三六一

程を知る——一事になづむ——愛子を失ひし悲——追善——迷を止むべし——
——世話をする事の傳受第一——同第二——同第三——同第四——同第五——
先方の事に取りあふな——大火の時妻子に別れし話——結構過ぐるより不足
は起る

五の巻.....三七一

見越入道の話——足もとの見ゆるがまし——足もとの見えぬ人——道は近きにあり——一助と十介百介——人の噂はいはぬに如かず——二百年同じ借屋に住居の鍛冶屋——貧乏といふ家督——土のねがひ瓦となる——貧乏の心得——第一名聞利欲の心を去れ——第二金持に似るな——第三正直を元とせよ——金銀がたまる程人に施す

六 孝行になるの傳授

脇坂義堂述……三六一

繼母がむつかしくては破談——ならぬかんにんを強くせよ——奈良の孝女おとも——繼母熱湯に浴せしめんとす——繼母の大病を猿澤の觀世音に祈る——おとも月夜の述懐——おとも二首を遺して投身せんとす——弟妹二人姉おともを救ふ——繼母の改心——禍福は自ら招くところ——よしあしは我にあり

七 賣卜先生糠俵

虚白齋述……三九五

自序——縁組——小糠商賣——人間萬事塞翁が馬——定命の判断——夢見——楽しみと苦しみ——奉公人の使ひこみ——わんぱく小僧の手筋——孝行——佐平治孝行——失物——人を疑ふべからず——百病の藥——落し物——假の匂ひに心ときめく——耆は小よりはじまる——金子のなる木——酒の害——口は災の門——孝行——孝子の話——渡世——短氣——嫁と姑——力みを抜くべし——安産と難産——金の出入——弟の世話——化物の有無——化物の昔話——塔庵の跋

八 同 後 篇

同 上

上.....四二

自序——賣卜先生の夢——蟲の會合——蛙——蟹——田螺——守宮——蚯蚓——蚊——水蟲——翁の夢さむ——不如意の商人——旅行——槌に生れた子は短

命——倅に別る——孝の爲の盗み——物忘れ——渡世の爲の宗旨——海鼠問
答——錢相場——乞食——乞食になる傳授——普請

下.....四五六

堪忍——奉公——妙惠上人——親の心を忘るゝが失錯のもと——降者——奢
には馴れ易し——翁再び一ねむり——蝸牛——蛞蝓——蠶——蜜蜂——漆樹
——最も恐るべきは色なり——翁夢覺む——堵庵の跋

九 雨 や ご り

同

上.....四一

自序——蛤と鮑——唯天命を樂むべし——大なる殺生——鍵持と金持——金
持かねをつかはず——金が敵——歌——お乳の人と丁稚——乳母の苦勞——
みのほどをしれ——朝夕に主と親とを拜め——友を撰ぶべし——足と手との
喧嘩——蛇の頭尾争ひし話——桶屋の弟子と醫師の弟子——正直を臺にする
仕事——身最負からゆがめる——曲らざりせば即ちの神——鷲と鳥——吉凶

は人によりて鳥の聲にはあらず——性を知る事肝要なり

十 心學初入手引草

大島 有 隣 述... 五〇五

神明と佛心と明德——物、人それぞれの天業を勤む——家業は天の役——天
遊の君子——大徳と小徳——人心と道心——堯舜の萬世の法となるも性に隨
ふのみ——心學の傳播と其の効——自性の發見——格物致知——仁者は萬物
を以て我とす——宗祖の一心は天照大神より受け傳ふ——私欲を拂ひて吉至
る——神社は心の内にあり——神通の淵源と吉川惟足の答解——無病の人に
藥はいらず——梅巖と堵庵との和歌——凡情に一生を誤る——人、物天に生
じて天を心とす——錦にまさる麻のさ衣——自性即ち天通——身につかはる
心——佛と鬼とは一つなり——心は彌陀、身は菩薩——天下の大本發して
節に中るを和といふ——忠恕の一心萬物に貫通す——敬の至極——父の慈愛
と不孝者の改心——燒野の雉子、子を思ふ——萬法心より生ず——心學の徳
——短氣者——腹立をこらふ——三教互に争ふ——天則のまゝ——樹尾の明



家論

目次

二〇

惠上人——天下を治むるは無欲にあり——天道は満つるを缺く——貞淑なる
奥方、妾を感ぜしむ——青砥藤綱、時頼を諷諫す——限り知られぬものは心
なり——氏より育ち——佐藤繼信の歌——賢君人の過を咎めず——物、人と
もに疵をつくのひ用ふべし——心は一身の主なり——浩然の氣——心學の大
意——色空の二見を立つる——心學の門に入りて我なき道を自得せよ

十一 新實語教

手島堵庵述……五三



家

論

齊家論序

子曰予欲無言、天何言哉、四時行、百物生、天何言哉、聖人さへかくの玉ふ。況や余ごとき、娑婆ふさげ、言句を吐こそをかしけれ。不肖のものは四十にたれて死なむこそめやすかるべけれど、徒然草に讖れしが、死なぬ命は是非もなし。門弟より養ひを受、腹ふくらしねてもゐられず。腹すかしのため、同志の人の齊家、便りともならんかと、いやしき儉約ことを書散すは、すきに赤えぼしといふものか。延享甲子のとし、五月上旬。石田勘平自序。

齊家論序

齊家論上

石田梅巖著

心學の開講

十五年前
享保十一年
に當る

實に年月の過る早き事は、たけき川水の流るゝが如く止る事なし。予講釋を初んと志し、何月何日より開講、無縁のかたぐゝにても遠慮なくきかるべしと書付を出せしも、はや十五年に成ぬ。其頃書付を見て、殊勝なりといふ人もあり、又あの不學にて何を説やと譏るもあり。或は面向は譽れども、影にて笑ふ人もあり。其外評判まら／＼なりと聞。予晩學の事なれば、何を覺えし事もなく、行跡も好人に似ることあらばしかるべきに、それもいよく及びがたし。然るに何を教ふと思ふべきか、吾をしへを立る志は、數年心をつくし、賢聖の意味彷彿と得る者に似たる所あり。此心を知らしむる時は、生死は言に及ばず、名聞利慾もはなれやすき事あり。是を導かん爲なり。尤文學に拙き講釋なれば、聽衆もすくなからん。若聞人なくば、たとひ辻立して成とも、我志を述んと思へり。ねがふ所は、一人成とも五倫の交りを知り、君

に事る者ならば、己を忘れ身をゆだね、苦勞をかへりみず、勤むべき事を先とし、得る事を後にするの忠をつくす人出、又父母に事るに親しく愛しまるらせ、常々よろこべる顔色あつて、身のとりまはしは柳の風になびくごとく、睦しくつかふるの孝をつくす人出来らば、これ生涯の樂也。たとひ千萬人に笑れ、恥をうくとも、いとふことなき志なり。其比官儀あつてへつらひなき朋友の有しが、某にいはるゝは、汝は我に比すれば學者なり。然れども推出し儒者とはいはれまじ。又世間に沙汰なき人にも、出會て見れば、經書はいふに及ばず、詩作文章達者なる能學者あり。又儒者ならねども、少し心がけある人には、汝ぐらゐの學者は町並にも有べし。其中にて、無縁の講釋するべし、口廣き事はいはれまじ。夫をもかまはず、書付を出されなば、聽者もあるべけれど、一度聞ては素讀同前の講釋なりといひ、又口の悪き者は、あの學問にて講釋するは、笑ふにたらずと譏るべし。たとひ十日廿日入かはり聽衆ありとも、つゞくまじ。其時に至りしまはんよりは、今七八年も學問し出られなば、本望もとげ、恥を受る事も少からんと、いはれし人も過去り、むか

友人の忠告

武藏の孝子
長五郎

しがたりになりぬ。或人のいへる如く、予不學なれば、四書五經にさへ假名して讀來れり。しかるに幸なるかな、今日まで入替り聽衆もたえず、其中に親しき門弟もあり。今々の門弟には文學を好める人もあれど、したしき門弟は文質彬彬は所詮及びがたしと思ふより、某言所に同心し、且他をも誘ひ集る事こそ殊勝なれ。

寛保元年秋の比、門弟の中來て云、武藏國に薪木賣長五郎といふ孝心なる者あり。江戸表はこれ沙汰にて、則其趣き板行にあらはれしとて見せられけり。曰、武藏國多摩郡府中領、押立村に長五郎といふ小百姓あり。其身貧しく、妻にもはなれ、八十八歳になる母を養ひ、其外子供にもせがまれながら、母を大切にやしなひ孝をつくせしゆゑ、公の御惠にもあづかりしとなり。此長五郎貧き百姓薪賣の事なれば、學問の徳にて孝行したりとも見えざれども、天下萬民聞知程にはなれり。門弟中にも、是までは文學なくては學問の甲斐なきなど、おもひし者も、長五郎が事を聞、いよく吾言とて同心するこそ有がたき、又去る年、門弟一書を持來り見せられけり。題號は越後孝婦

越後の孝婦

傳とあり。曰、越後國三島郡、出雲崎尼瀬の大作太夫が女房は、姑に孝行なるもの也。夫作太夫も孝心なるものなれど、世のいとなみのやるせなくて他國かせぎに出るゆゑ、女房ひとり七十にあまる姑を介抱し、孝行をなし、是も御惠にあづかりしよし、板行にあらはれ、普く天下にひろまるは、有がたきにあらずや。元來假名ものなれば、講釋するに及ばざれども、京大阪大河内にて講釋の上にて讀聞せり。其意はかく孝行すれば、天下に知られ好事と思ひ、名聞に成とも孝行がさせたく思ふ所なり。天子より已下、庶人に至るまで、孝終始なきときは、患ひ及ばざる者はいまだこれあらじ。又地の利に因、身を謹み、用を節にして以て父母をやしなふは、諸人の孝と、孝經に説たまへり。それゆゑ常に儉約の事を説きかせ、門弟へは月並の會に、折々儉約の題を出し、得心あるやとこゝろみれども、是までは志も立ざりしが、五六年より十四五年も従へるしるしにや、去秋町家の門弟志を起し、來ていはく、我々年來教をうくるといへども、家を治るうへに心得たがひあり。今般家を治るは、儉約が本となる事を得心せり。其本立ときは奢りもやみ、家

儉約

も齊ふべし。家齊ふれば、おのづから親の心を養ふ孝行となり、其外出入の者も心安く惠まるべき理あり。他の奢り筋にて、當分親の心をなぐさむる事も有べけれど、約を守らざれば、段々内證に不足立、諸事のみはりあしくなりて借金せば、つひには親の心をくるしむるに至るべし。尤是までも内證の事は、約を守る志あれば、つとめ來りし事もあれど、衣類などは表向の物にて、世間なみの事なれば、心付なくうか／＼とくらせし所、能々考れば、分に過たる衣裳を是非に着よと言ものはなき事なり。其外儉約筋諸事、親しき門弟示し合せ、急度あらため、家内にて行ふべしといはれけり。般の村王始象の箸を爲る時、箕子慨歎して、彼象の箸を爲り給はゞ、必玉の杯を爲るべし。玉の杯を爲らば、必遠方珍怪の物を思つてこれを用ひ、輿馬宮室の漸自レ此始、不可振といへり。君子の眼遠はずして、遂に不振して亡びたり。天下の主として象の箸はわづかなれど、高山も微塵よりなるごとく、終には民を暴虐し、般の天下を亡ぼすに至る。高下ありといへども、家を興し家を亡す理は一なり。奢りは日に長じやすし。恐れ慎むべき事なり。子曰、禮は其

奢らんよりは寧儉せよと。又約を以て是を失するものはすくなしと。聖人の意味は深長にして格別の事なり。しかれども先儉約に思ひ付るゝことこそ殊勝なれ。

争ふことを
教ふるは如
何

教ふる所は
聖賢の口ま
れ

或學者、某門弟専ら儉約を用ゐる事を聞、或時來りて物語のうへ問ていはく聖人の道はあらそふ事なきを善とする。然るに近比汝はあらそふことを教ふと聞り。いかなる事ぞや。
答、某教ふるは聖賢の口眞似なり。争ことを教ふるとは何を以ていはれ候や。曰、汝が門弟の中俄に儉約を用ゐらるゝにより、もして身上のもつれにてもあらんやと、心もとなくいかなる事ぞと問しかば、師が好む所なりといへり。學者の上にて約を守るは常の事なり。しかるを人にかはりあはたゞしく行ふゆゑ争ひおこる。予が思ふは、世間一同にするが善かるべし。既に聖人は民の心を以て心とし、民の好む所をこのみ、民の惡む所をにくみ、民と心を一にしたまふゆゑ、民の父母共いふ。今民のこのむ所は、衣裳に美をつくし、緞子縮緬綾錦、鹿子縫薄類着かざることをよろこべり。其外普請等をきれい

に作り、諸道具には蒔繪鉛梨子地を用ゐたり。又喰物は常々魚類鳥類おほくつかひ、振舞等には珍味珍物を取あつめ、販にくらすことをよろこぶ。尤これらを法にかなふと言にはあらず。然れども如斯なり來りし世上なれば、急々にあらたむることあたはず。聖人の民ををさめ給ふは、親の子を養育如く、漸々を以て治め給ふべし。一軒の家にていはゞ、妻子より小者に至るまで、吾民なり。其民を次第にやすく治るが主人の職分なり。先人間の樂には衣食住の三ツなり。衣類等を拵るは、着てたのしむが爲なり。しかるに自身着ざるのみならず、妻子小者に至るまで、あさへとめて着せざるよし、女童の身にしてはさぞ迷惑にあもふべし。是不便の事にあらずや。又振舞もこれまては一汁三菜、二汁五菜の料理にて客もてなししたるをば、儉約をいひたて、不馳走なれば、興なくてにがしく思ふべし。妻子家内の者どもは、不興なる體を見て心をいため、さぞ氣の毒に思ふべし。門弟中、人にそむき、俄に儉約をなすゆゑ、したしむべき親類、又家内のものまで、争ひに至るはかな

儉約は常のことなり

しきにあらずや。是皆欲心よりなす所なり。前に言ごとく、儉約はつねのごとく心得るが學者にあらずや。

答曰、汝の言ごとく、儉約は學者においてつねのことなり。某嘗て著す都鄙問答、或人主人行狀の是非を問の段にいひ置しは、始終儉約を行ふ事なれど、それと題號なきゆゑ、門弟も心付なかりしに、儉約が常なる事を得心し、此度改め行へり。それゆゑ家内のものも、珍しき事と思へるなり。向後身分相應を知れば、儉約がつねとなる也。又汝人間のたのしみは、衣食住の三ツといへり。尤衣食住の三ツを樂めども、今日のごとくおごりたかぶるを以て樂みとするにあらざらん。此三ツ人の身にやむ事を得ずしていとなむことなり。只不飢さむからずして心やすらかに過すを樂みとす。周禮に曰、室は高きにあらずれども、漏ざれば便よし。衣服は綾羅にあらずれども、和暖なれば便よし。飲食は珍しき饌にあらずれども、一度飽ば便よしといふ。又論語にも、君子は食飽ことを求むることなく、居安からんことを求むることなしとのたまへり。此味を知るべし。扱妻子や家内の者にあらそひ思ふやうにさせざるを不

今の世間の奢

便の事なりといふ。これ大にあやまてり。汝いふごとく、家内の者は我民なり。我民ゆゑ眞實に愛する也。愛する故に争ふことを喻ていはく、吾子に灸するが如し。逃まはるをだましとらへて灸すれば、跳つはねつ反かへり、あゝあつや、最早悪事しますまい。父様母様堪忍して下さりませと泣さけぶ。親は涙を流し齒をくひしはつても灸する也。是もあらそひに似たれども、其子の病を治め、無事に養育んが爲なり。妻子兄弟に押へ留めてもきさせざるも又如斯。國天下も不_レ治時は、あらそひなくんば有_レべからず。既に殷の紂王、不仁を以て萬民を苦しめ天下を亂す。周の武王これをなげき、天下を治めん爲に、仁徳を以てあらそひ給ふ。あらそふは仁と不仁の二ツなれど、遂には不仁を誅し給ふ。こゝにおいて天下一統仁に歸す。今世間の奢り者を見るに自美服を着るのみか、召つれる女まで、紗綾綸子に縫薄して着するなり。田舎者は是を見て、御所方か武家方か、侍のつかねは不審なりとうたがへり。賤き町家の者として、かやう成奢りをなし、道理にそむく罪人となる。女や子供は智の味きものなれば、結構成ものさへ着れば、善こといふもひ、見る

を見まねに我しらずして奢に長じ、貴賤尊卑の禮をみだる。是をとゞめん其爲に、止事を得ず争ふなり。凡て世の有様を見來るに、町家ほど衰へ安きものもなし。其根源を尋れば、愚痴といふ病なり。其愚痴が忽變じて奢となる。愚痴と奢と二なれど、分がたきことを語るべし。或富家の町人姑嫁を同道にて參宮す。上下三十人斗ありとかや。小畑の宿にて休み、支配手代は先達て太夫殿へ案内す。彼思ふは、恐らく此太夫にて金持の一旦那は我親方にて有べしと、慢心顔にて居たりしが、太夫殿出られければ、彼手代のいはく、此度後室奥方兩人共に參宮いたし候、萬事宜く御世話頼存ずると、しさいらしく口上述べれば、太夫のいはく、其許は當地不案内と見ゆ。京大阪には町家にて、姑や嫁を後室の奥のと稱へられ候や。左様成る上を犯し奢がましき事は、皇太神宮の邊にては大なる非禮なり。神は非禮を受給はず。此度參宮せらるゝも、神のめぐみを受ん爲なるに、はるゝ參宮せられても、神慮に叶はぬは笑止成事也。大切成旦那のことゆゑ、如斯いふ也。忝くも茅ぶきの宮作り三杵米の御供物を受させ給ふ。其神慮にかなふ禮法を以て、參宮案内致すべし。

し。かやうの事をしらずして、今の世には奢りに長じ、分をしらず仕合よく、十軒口か二十軒口の家を持、三十人か五十人も暮せば大きな事と思ふより、嫁を御新造の奥のと稱さす。都て農工商は下賤也。其賤者として、歴々の武家方と同じやうに思はるゝこそ愚なれ。その奢たかぶり上を犯す心にて參宮せば、神罰を受らるべし。是まで知らざるは是非なし。向後は急度慎まるべきことなり。又旦那名よせ帳をみれば、三四十年前迄京大阪にて大金持といはれたるかくれなき町人も、往方しれぬ者もあり。又身上衰へ自炊して暮すもあり。十軒に七八軒は如斯。其時に奥あしらひ誰にしてもらはんや。遠慮なきときは必ず近きうれひありとは、かやうの類なるべし。夫を笑止に思はれて物語するぞかし。凡て貴は貴く、賤は賤く、町家ならば町家相應の名を呼るべし。相應の名を呼が則正直なるゆゑ、皇太神宮もうけさせ給ふ所なりと、竹わるやうにいはいれば、文盲至極の手代なれど、御師の辭に恥入て、ほこる勢ひ失はて、これを實に寶勅ならんと感心せりと聞おけり。其手代忽に善に化せられ、愚は變じて智にかへり、奢りは變じて儉と成。有り

物に相應あり

楚の子西

人を賤しむるは如何

がたき御師の徳ならずや。身は正直の神明に捧げ、旦那には心を盡す所より露塵も諂ひ曲る欲心なく、離切たる誓は、大丈夫とも云つべし。總て物に相應あり。長刀をよらせ、黒縁の乗物にて内を關より出入ある歴々ならば、御新造の奥のともいふべし。夫より以下には似合ぬことなり。況や下賤の者に於てをや。古へも名の奢りにて聖人に罪を受し者あり。楚國の子西これなり。子西は政を糺す賢大夫なり。楚は一國の君なれば、昭侯と稱べきを王號を潜し、昭王と稱へさす。是を以て他によき事あれど、孔子彼をや彼をやと、子西が事は論ずるに不足とのたまふ。世上に名に奢り有ことをしらざるもの多し都て分に過るは皆奢り也。何ほど奢りかざるとも、農人は農人、町人は町人にて、等の躍らるゝものにあらず。夫をしらざるは愚痴なり。鸚鵡能く言へども飛鳥を離れず。狸能く言ども禽獸をはなれず。可恐可慎。或人又曰、今の世の人、聖賢には比がたし。然ども汝が口より禽獸と同じく賤むるはいかなる事ぞや。

答、我不肖の身にて儒を業とす。心あらん人には賤めらるゝ事多かるべしと、

貴賤の分を知らしむべし
治世と亂世
大阪の大火の慘狀

常々恥恐ることなり。然ども聖賢の道を説く上よりは、自昧とて用捨のならざる所なり。蓋人々己に貴きものあり。教へ導くときはおのづから聖賢の道にも入、禮儀をもわきまふべし。辨へざるときは禽獸と同じ。是を教へんと思はゞ、先貴賤の分ちと、天下泰平の御高恩を知らしむべし。此有がたき事を告んとならば、亂世のかなしき事を説て治世の安樂成る事を知らすべし。亂世のかなしみに比すれば、百分の一にも足まじけれど、ちかく世に知る所なれば、大阪大火の事を語るべし。予先年大和めぐりし、それより大阪へ出は、三月二十一日午の刻ばかり也。千日寺の茶店に休みしに、堀江邊より出火すといふ。焼出しとは見えながら、すまじき火なり。折節未申の風はげしく、いきほひつよく丑寅へ吹付、黒けぶりの中より愛かしかに火煙みゆ。其勢たとふべきにあらず。此風にてはたまるまじとて、備後町油や何某といふ常宿へ行みれば、うるたゆる體也。馴染の事なれば見捨がたく、連のうち兩人は跡に残る。某は荷物を持せ、八軒屋にて待べしといひ、別れぬ。八軒やの濱へ往て見れば、もはや西本願寺御堂に火かゝり、大風ゆゑ、外のけぶり

はさかまく波のごとくなれど、御堂の煙は二三十間ばかりも立のぼり、すさまじき勢也。火におはれ我先にとにげ走るは、蜘蛛の子ちらすごとくにて、老人や子供は、負たり懐たり、手をひいたり、跡を見かへり泣もてにぐるものもあり。分て笑止に見えけるは、二十歳あまりのいやしからぬ女、走つかれて目をまはし、舟の乗場へつれ行、水のをませて居るもあり。又三十計の女、紫の小袖着て、男のやうに帯刀し、長刀を持、赤足に草鞋にて、足より血をながし、下女は風呂敷づゝみを負、中間と見えしものは、葛籠をかたげたれば、助くることもならずと見ゆ。其外難義さうなるもの數をしらず。七ツ時迄に天満も一面の火と成、難波橋も焼、天神橋へも火かゝれりと見る所へ、連の者も來れり。二人ともに何成とも食はねばゆかれぬといへり。さりながら、食と金とつりがへにても、賣人なければ是非なくて、ゆかれ次第往べしと、京橋を渡り、片町にて漸しんこを見あたる。かゝる折ともいはずして、二文のしんこは二文に賣。げに天下泰平一統に治る御代の徳なれや。そのしんこにたすけられて足軽く、守口の宿につき、一夜を明すも有がたき。その

七ツ時
の午後四時

時分には、大阪に親き者もなかりしゆゑ、未明に立て歸京せり。後に聞ば、西の御堂にても數十人焼死す。船場の中も、爰かしてへ飛火して、一面に火がまはり、焼たてられ、逃る者は風に木葉を散すがごとし。財寶は取次第、落せし物は拾ひ次第、只命を惜むばかりにて、我先へとにげゆく。京橋は人つどひして、夥しき人死あり。其外四方八方へにぐるもの、橋の落たる所は舟にてわたらんとすれど、舟には諸道具を積置たり。其うへ船頭なれば、渡すべき自由もならず。渡らんとすれば、流れて死する者もありと。數の知れざる死人なれば、子が死し親は残り、親が死し子は残り、夫が死し妻は残り、妻が死し夫は残り、主人は死し家來は残るも有べし。又其中には、知音ちかづきなれば、貸借もならず、せんかたなく古郷などへ立のき、さぞ難義なる者も有べし。如斯物語すといへども、我見聞く所ばかりなれば、十分の一にもあるまじ。又戦國の昔物語を聞ば、押入強盜徘徊し、己が住居も成がたく、他國へにげんとすれば、道にてはぎとり、財寶所持して逃る事もならず。着のまゝ逃ても、所々に弓鐵砲をかまへ辭をかけ、裸に成てゆけといふ。着

戦國時代の
有様

のまゝ也免といへば、聞入ず。裸になればよし。否といはゞ打はなすといへり。命に代る衣類はなしとて、裸に成て往し者數しらずと聞置り。戦國の時食物や着物が撰み分てゐらるべきや。虱だらけの物ならて、着ることは成まじ。其時木綿布子は重いなど、理窟がいうてゐられうか。おしいたゞいて着るべきぞ。又食物に乏く、おほくはつかれるべし。其時に麥飯や白粥は嫌なりといふべきや。食ひくるゝ者あらば、神佛のやうにおもふべし。忝くも今の御代、天下一統に養るゝはありがたき事にあらずや。孟子曰、牛羊を野飼する地を牧地といふ。人に頼れ、牛や羊を牧ふ者あらんに、必ず野飼の地と草とを求めん。其地と草とを求め得れば、牛羊は自づから養はるゝ也。又民を養ふ君を人牧といふ。今天下治る時なれば、己々が職分さへ勤れば、自養はるゝは、牛羊を野飼の地に放ち置ば、おのづから養はるゝがごとし。此味を知らず、安樂にくらせば、己が力と思へるは、愚なること甚し。暖に着、飽まで喰ひ、逸居をして人の道を知らざるは、禽獸に近きぞと、孟子も戒給ふなり。今治る御代の廣大なる御高恩、報じ奉る事を思ふべし。下賤の者いかに

して、廣大の御高恩報じ奉るべき。報じ奉る事はならずとも、家内一統和合して一人のごとく治むるならば、其程の御恩を報じ奉るともいふべきか。世の人これを思はるべし。

齊家論 下

聽講に袴を著せぬは如何

禮のもと

或人又問、汝儒書の講釋に袴を着せざるも、儉約の含あるゆゑ、前方よりゆるし置れしと見えたり。然ども某思ふは、袴は禮服なり。それを許すは禮をすつると言ものなり。禮をすて聖人の道は説れまじ。天下の事、一物として禮にあらざることなし。曲禮に曰、道德仁義禮にあらざればならず。教訓て俗を正するも、禮にあらざれば備はらず。争ひを分ち、訟へを辨ふることも、禮にあらざれば決せず。君臣、上下、父子、兄弟も、禮にあらざれば定まらずと見えたり。其辨へを教ふるに、禮を捨て何を教へられ候や。

答。曲禮を引るゝは面白きことなり。さりながら汝のいへるは表一通りにて、袴さへ着れば禮は調ふと思はるゝと聞ゆ。我言所は左にならず。聖人の教を有難く思ふ實あつて、袴を着るは禮なり。實なくして袴を着るばかりは禮にあらず。子曰、繪の事は素より後にす。子夏曰、禮は後乎。言は禮は必忠信を以て質と爲す。是を以て見れば、實は本也。禮は末也。我許せしは、信心有て

も、袴着ては講釋に出がたき人の爲なり。豈儉約にかゝはるべき。隙暇は有ながら、農工商の身として、毎日袴着て徘徊すれば、隣近所の人々がしさいらしく思ふゆゑ、遠慮せねばならぬ也。遠慮のいらぬ旁に、袴無用といふべきや。兎角一人なりとも多く聞せたきが、我願ひなり。固人は性善なれば、皆君子の筈なり。然れども聖賢より以下は私欲あり。私欲ある者は常人なり。其中に甚おぼるゝ者は悪人ともなる。此故に教へなくんば有べからず。能く教ふる時は、善人と成、又甚おぼるゝ者も、刑罰をのがるゝ常人までには成やすき所なり。是皆性善の徳ならずや。故に孝經小學などを説き其意味を知らせ、心を和らげ、上を貴び下をあはれみ、家業の事に怠りなきやうに教へたき志ゆゑ、和らげ説候まゝ、老若男女共に望あらば、無縁のかたぐゝにても聞るべしと、又書付を出せり。或學者これを見て、儒書が女の耳へ入ものか。めづらしき書付かなと、譏られしと告る人あり。其時某答に、古の紫式部、清少納言、赤染衛門などを、其學者は男と思はれ候やといひければ、告し人、我言所に同心して、をかしがられき。此様の事をいはるゝも、近世の學問多

性善の徳

近世の學問
の失

くは詩作文章に流れ、聖學の本を失せるゆゑなり。論語學而篇に、行餘力あるときは文を學べと、孔子既にのたまへり。文學は末なり。身の行ひは本なり。凡て學問は本末を知るを肝要とす。又國を治るには、用を節にして民を愛すとのたまふ。財寶を用る事、儉約にする中に、人を愛するの理備はれり。人を愛せんと欲すとも、財用たらざれば不能。しかれば家國を治るには、儉約は本なる事明なり。これまで物語すといへども、汝いまだ不得心と見ゆ。幸今般門弟儉約示し合の書付を認め、其序を手に請れけれど、先何もの存より述らよといへば、如斯とて書付見せられけり。趣意予が心に合ふ。これ約にして見やすかるべし。此序を見て儉約の意味を考へ知らるべし。

儉約序

儉約示合せ
の序文

伏て惟に御代の泰平目出度治る事、上は貴く下は賤く、尊卑の位ましく、有がたくも孝を鬼神に致、飲食衣服宮室の類は薄くなし、儉を用ひたまひ、恵みを萬邦に垂んと、御力を盡し給ふ。至徳光輝普くあらはれ、すゑが末まで安穩に、照し給はぬ里もなし。實に徒然草にも、世を治る道は、儉約を本

とすといへり。蓋儉約と言事、世に多く誤り、吝き事と心得たる人あり。左にはあらず。儉約は財寶を節く用ゐ、我分限に應じ、過不及なく物の費捨る事をいとひ、時にあたり法にかなふやうに用ゆる事成べし。それ天下安穩に治り、有がなく忝事をあげていは、財寶は數千里のあなたより、數千里のこなたへ取通し、舟路陸路海賊山賊の患ひも知らず。近くは閭巷の區々まで我家に安居して、士農工商おのれが業に心をいれるれば、何の不自由なきやうにとの 御仁政 上は申も恐れあり。それ所々に司位にましくて、日々夜々に怠らず、是を治めたまはり、又家業の際ある折くは、月花のたのしみも心にまかせ、且志あれば聖人の道を學び、貧福ともに天命なれば、此身このまゝにて足ることの教をきく。此國恩の大なる事、天地のごとくにして、中々筆にも盡すまじ。下として無道放逸をなし、上を犯し、我分限を知らず身をおごり、人のいたみをしらざるは、悲き事かな。さある人は天罰のかるゝ事有まじ。今誠に目覺る心地して、國恩をあふぎ奉り、先非を悔ぬ。これ教を受る益ならんか。扱此 國恩いかにして報じ奉るべきや

明には知らねども。我身ををさめ上を犯すなきやうに慎み、父子夫婦親類縁者、家の小者に至るまで、たがひに睦しく打和らぎ、吝きことなく儉約を守り、一人の小者、又は出入従ふ者をあはれみ助けたき志なり。これまでも、一家親み又人を恵むこと、元來はきらふにあらねども、第一自身のおごりつよく、費おほきゆる、人を恵む仁愛の心も外に成行ぬ。親き親類の疎に成も、かの吝ゆる、一家の出會も物毎造作に、料理などもおもくなり、度々の出會もなく、遠々敷成ぬ。これを以てみれば、吝は不仁の本となる、恐れつゝしむべし。今より後、常の出會は茶漬飯ひたし物などにて、木綿衣類なれば、おのづから心やすく度々出會、親き上にもしたしくなり、且親類は言に及ばず、宿持手代、出入の人々迄、若身上不如意なる者あらば、其譯を聞届不實ならざることならば、何分力を合せ救ふべし。又家内を恵むにも、先木綿衣類なれば、あたらしく仕かへるにも心やすく、古き物は仕着の外に見合てつかはし、仕着の新しき物は貯おかさやうに仕なし、又半季一季の者は、纒の給銀を取、布子一重を拵ゆれば、残りすくなになり、鼻紙代も不自由に

奉公人ない
たはるべし

て、甚不便の事也。たとへ盆正月に百貳百の錢、又履などつかはしても、これらにて足るべしとも思はれず。尤家により、奉公人により、高下次第も有べけれども、すべて是に准ずべし。夫故たまかにつとむる者には、折々の心付致べき事也。扱又世間に人をつかふに、定りの仕着や給銀さへ渡しぬれば事すむやうにおもひ、其外に心を付る人まれなり。奉公に出る人、親もと不自由ならざる人もあれど、多くは親里まづしきゆゑ、奉公にも出す。親もと豊なれば、乳母をも添養ひ育る事也。然れども貧きゆゑ親の手をはなし、遙々奉公に出すものなれば、さぞかなしく不便に思ふべけれど、是は助たきとていかすすべき。又たすくれば、助らるゝ事はたすけたき事也。總て田舎出奉公人は、布子一かたびら一重あれば、事足りぬと思へり。然れども半季か一季過れば、傍輩の衣類多く有を見て羨敷もひ、不自由成親本へいひやれば、親は聞より不便に思ひ、借金して成とも、一つづゝもこしらへのばせ、最早能きかと思へば、又たらぬものをいひやれば、拵る事は成がたく、のぼさねば子供が不便なり、いかゞして成ともものぼしたく思ひ、なやみ煩ふ者多く

いたましき事なり。かやうの類は心を付、助くればなる事也。夫故貧しき親兄弟に、其苦勞をさせざるやうにいたしたき志なり。元來今般の儉約は、上を恐れ、己が賤きことを知り、約を守り、萬分の一なりとも禮義を守らば、あのづから親類はいよいよ睦く、家内の者には親兄弟の勞をのがれさせ、出入の人々には恵みの端とも成、子としては先祖父母への孝となり、あのづから上を恐るる恭順の道ともならんか。或人曰、門人方儉約の序文をみれば、町家相應にては面白し。しかれども町家ばかりの儉約にて、大道の用にたらず。同じくは世間一同に用るやうに教へらるゝがよかるべしと思へり。汝の門人にも武士方もありと聞り。此等の教はいかん。

答。汝は町家のことは瑣細にて、大道に用られずと云。某思ふは左にあらず上より下に至り、職分は異なれども理は一なり。儉約の事を得心し行ふときは、家とのひ國治り、天下平なり。これ大道にあらずや。儉約をいふは畢竟身を修め家をととのへん爲也。大學に所謂、天子より以て庶人に至るまで壹に是皆身を修るを以て本とすと。身を修るに何んぞ士農工商のかはりあら

身を修むる
主は唯心の
み

放心

名聞と色欲

ん。身を修る主となるは如何。これ心なり。此身の微なるを喻ていはゞ、大倉に稗米一粒あるがごとし。しかれども天地人の三才となるは唯心のみ。古今たれか此心なからん。然ども是を知る者まれなり。知といへども、其通を行ふ者甚かたし。惟君子は誠を存し、克思ひ克敬し、天君泰然にして百體令に従ふ。不學者は見聞所の欲にひかれ、固有せし仁心を見失ひ、これを求る事をしらず。知らざれば、ことごとく不仁となる。不仁となるものを放心といふ。尤色心は愛より來るといへども、過れば忽ち不仁となる。まづ放心の一二を擧ていはゞ、名聞と利欲と色欲なり。衆人はたとひ少々の善事をなせども、己を他より譽られたく思ふ心よりする善事なれば、誠の善事にあらず。其外身上の事、氏系圖の事、或は藝能、智慧に至るまで、己相應より宜しく思はれたき心有は、皆名聞也。又利欲といふは、道なくして金銀財寶をふやす事を好むより、心が聞く成て、金銀有がうへにも溜たく思ひ、種々の謀をなし、世の苦みをかへりみず、剩親子兄弟親類まで不和に成、たがひに恨みをよくむに至る。又色欲といふは、若き時は前後のわきまへもなく、しなか

たちにのみめて、爰かと思へばかしてにわたり、流の女にさへ心を見すかさるれど夫をもしらず、親のゆるさぬ金銀をつかふ。又老たる人も夫婦諸とも道にも入べき時、腰本や下女に手をかけ、又はわかき女を抱へ寵愛し、親むべき女房には疎く成、頭には白髪をいたゞく事をしらず、榮耀榮花のおごりのためにこゝろを悩ますことはなはだし。其外萬事不義無道をなし、心を煩すは皆放心を以てなり。此味を知らず、仁に心を盡さざるはかなしき事かな。聖賢これを歎き給ひ、學問の道他なし、その放心を求むるのみと、孟子も既に説たまへり。予教ふる所もこれによれり。孟子開示す所、至て重きことなれば、容易ことにあらず。しかれども執行の功により、放心を求め得ことあり。求むるときは、心の一致なることを知る。故に士農工商の職分異なれども、一理を會得するゆゑ、士の道をいへば、農工商に通ひ、農工商の道にいへば、士に通ふ。なんぞ四民の儉約を別々に説べきや。儉約をいふは他の儀にあらず。生れながらの正直にかへし度爲なり。天より生民を降すなれば萬民はことごとく天の子なり。故に人は一個の小天地なり。小天地ゆゑ本私

人は小天地

士農工商

私欲をばなれよ

關東洪水の
ときの話

欲なきもの也。このゆゑに我物は我物、人の物は人の物、貸たる物はうけとり、借たる物は返し、毛すぢほども私なく、ありべかりにするは正直なる所也。此正直行はるれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟のごとし。我願ふ所は、人々こゝに至らしめんため也。分て士は政のたすけをなし、農工商の頭なれば、清潔にして正直なるべし。もし私欲あらば、其所は常闇なり又農工商も家の主は家内の頭なり。もし私欲あらば、家内が常闇となる。すべて物の頭となるものは可慎事也。然るに欲心に蔽れ、此正直を行はずしてあさましき交りになり行はかなしき事也。故に十五年以來、其私欲を離る、事を説來れり。私欲ほど世に害をなすものはあらず。此味を知らずしてなす儉約は、皆害に至り、害をなすこと甚し。我いふ所は正直よりなす儉約なれば、人を助るに至る。子曰、人の生るは直也。罔て生るは幸にして免たりとのたまへり。これを以てみれば、不直にして生るといへども死人に同じ。可_レ恐事なり。それにつき去春或人關東洪水の事によつて問れし事あり。予返答せし趣物語すべし。或人の問にいはいく、何も方は際の拂も例年の通首尾よく

正直を守る

仕舞、正月を祝はる。某も人に遇ば、先もつて御慶といへば、先方よりも御無事に重年目出度といふ。しかれども我心苦しければ、一切目出度なし。所以は去年關東の洪水に、我藏のごとくに思ひし三軒の得意は、家財より田畠まで流され、身がらほうく命を助からしばかりなり。依て當分の見舞に金三十兩あまりつかはしければ、やうくと飢は助かりゐらるゝ也。然ども賣場もことごとく流れたれば、中々商ひの段にてはなく、これまでの賣掛を取あつめのぼさるゝは、今年共來年とも其限りはしりがたし。此仕合ゆゑに際拂もならず、借金を濟さんとすれば、家財まで賣拂ひ赤裸に成なれば、是も又成がたき事也。日比汝の物語を聞に、難儀の所にて心を憐さぬが學問のちからなりといへり。かゝる時いかんして心をなやまさず、御慶目出度祝はるべきや。答。某いふ通りをむかず用ゐらるゝならば、いと心やすき事なり。望のとほり萬々歳をいはふべし。祝ふといふは他の義にあらず。正直を守ることなり。正直を守らんと思はゞ、先名聞利欲を離るべし。然れども柔弱にてははなれがたく、名利のこゝろは發るべし。發るとも一生行はざれば、扱も正

赤裸になり
借金をすま
せ

まがらざり
せばすなは
ちの神

直者なりと、天下の人よろこぶべし。天下の人に悦ばるゝほど目出たきこと
はあるまじと思へり。いかん。或人曰、正直者といはるゝは、誰も望む所也。
しかれども借方を濟す事はいかゞすべき。答。汝世間の者によろこばるゝは
誰も望む所といふ。喜ばるゝが望みならば、家財残らず賣拂ひ、赤裸になり
借金を濟さるべし。ことごとく濟されなば、今の世にたぐひ稀なる正直もの
と、世舉てよろこぶべし。其正直と又神の正直と、正直に二品あるべきや。
其正直が通るならば、汝も直に大神宮の末社同前也、既に比咩大明神の御詫宣
に、「天にならひ地にうけたりし人心まがらざりせばすなはちの神」とあり。
此意味を得心せば、身上有切賣拂、借金皆濟せらるべし。其とき負せ方の心
を推ていはい、誰もかくさつぱりと裸には成がたきことなるに、扱正直成仕
かた哉と、汝が心を感じずべし。たとへていはい、人の生れし時は裸なり。し
かれども裸で凍えし赤子もなし。無智無欲成ものなれど、先産着とて着せる
也。親が着するのみならず、親類まで持寄せる也。人の心は自然に慈悲正
直成る所あれば、汝の裸になられし其日より、感心せし負方が寄集りて着すべ

し。左はいへど、何程の財寶が集るべしとは知りがたし。正直よりあつまる
財寶なれば、神に捧る散錢のごとし。しかるに世間に此貴まるゝ事を嫌ひ、
私欲をもつて邪知者を頼み相談せば、何程の借金有とも、二三步通よりあつ
かひかけ、辯舌を以ていひまはさば、四五歩どほりにては濟べし。少成とも
おほく残すを手がらとし、其殘金銀を我物と思ひ人をだます事を所作とする
は、俗にいふ餽盜人といふ者なり。「謀計は眼前の利潤たりといへども、必神
明の罰に當る。正直は一旦の依怙にあらずといへども、終に日月の憐を蒙る」
とは、皇太神宮の寶勅なり。神の罪人とならば、居所はあるまじ。廣き世界
に住せずして、狭き住居するはかなしき事なり。ひろき世界に住得ずして、せ
ばき住居するといふは、土地のことにてはなし。廣大なる心を微塵のごとく
なしてくるしむことを云。又正直を行ひ、心に恥ることなければ、限りなき
天下の廣居に居て、深長なるたのしみあることなり。我教ふる所は、其餽盜
人の難を遁れさせ、正直者といはせ、鏡のごとき神明の御心にかなふやうに
ならるゝは、目出度祝ひにあらずやと云。

赤裸になつても正直な用ゐる心に

或人又曰、汝いふ所の儉約は、正直が本なる事をいひ、且常にも正直を第一に教へらるゝにつき、或人へ答られし物語一通り聞えたり。汝所存の通、赤裸と成ても正直を用ゐる志に候や。しかれば論語に、葉公孔子に謂て曰、吾黨に躬を直する者あり。其父羊を掠む。然るを子これを證すとあり。父が悪事にも隠さずあらはすは、ありべかかりの正直なり。又前にひかる、御神託に、「天にならひ地にうけたりし人心まがらざりせばすなはちの神」とあり。天地は見えし通り明らかにして隠す所なし。汝がいふ所も、かくす事なくありべかかりの正直なれば、御神託に同うして眞直也。然れば汝がいふ所は、神道の上の事なるべし。某思ふは左にあらず。總て世間の事、汝がいふごとくさつぱりと裸には成がたき所あり。故に孔子も葉公にこたへて曰、斥黨の直き者はこれに異なり。父は子の爲に隠し、子は父の爲に隠す。直き事其中にありとのたまへり。汝も同じく儒書を學び、かやうに相違あるはいかん。答。此御歌は、人々天地に受たる心を直に用るときは、即神なることをしらせ給ふ所也。汝は父が悪事を證す悪人を、反て正直者と思ひ、御神託と同じ

實情

やうに見なすは、理に聞きゆゑ是非わかれず。彼が不善を知らんと思はゞ、實情を知るべし。實情の發る處をいはゞ、こゝに人あらんに、その父、人を殺さば、ばつと驚くは子の常なり。又父が羊を掠しと聞ときも、ばつと驚く情發るは、鏡に物の移り、形に影のそふがごとく、間に髪を入れず。此所にて豈直不直を論ぜんや。これ惻隱の情にて實情なり。常人は勝手にひかれ思慮おほく、其意に思ふは、此事人が知るべきか。定て知るべし。隠し諱ることなるまじ。逆も隠されぬことならば、人はいはれぬ前に、我よりいふが罪もかろくて然るべしと思ひ、父の悪事をあらはすは、己を思ふ所より、父を捨るに至る。不孝ものにて大悪人なり。汝博學なれども理に聞きゆゑ、思慮と實情分がたく、固論語が解ぬ所より、神道儒道に高下を見なすは、笑止なることなり。既に孟子に云。上世嘗て其親を葬らざることあり。其親死する時、擧てこれを糞に委。他の日これを過る時、狐狸これを喰ひ、蠅蚋姑これを喰ふ。子が額より泚流、睨に見て不視。それ泚すること人の爲に泚するにあらず。中心より面目に達すと。是則ち惻隱の心なり。予は此惻隱の心發所

聖人の心は
明鏡止水の
如し

を直に行ふを正直といふ。舜の大聖人といへども、瞽瞍人を殺さば、善惡をえ
らまず負てのがれて隠れ給ふべしと、孟子ものたまふ所也、聖賢の説たまふ
惻隱の情は、直に真心なり。思うて得にあらず、勉て中にあらず。天理の自
然なり。程子の所謂、聖人の心は明鏡止水のごとく、四方八方を照し給ふ。
又神道にて八咫鏡と申奉るは、直に天照大神宮の御心にて、天が下あらんか
ざりを照させたまふ。神聖の御心如斯。一塵もとゞめぬ御心にて、乾坤を貫
きたまはん。これ明なりといはんや。直なりといはんや。又正きといはんや。
年月を重ね黙して誦べき所也。予云ふ儉約は、只衣服財器の事のみにあらず。
總て私曲なく、心を正するやうに教たき志なり。退て工夫有べし。尤も言ふ
所は質朴にして野鄙ならん。しかれども文質相かぬることは大賢以上のこと
にて、天に楷て昇るがごとし。いふも中々愚なり。

鳩翁道話

鳩翁道話壹の上

男武修聞書

孟子曰、仁人心也。義人路也。舍其路而弗由、放其心而不知求、哀哉。是は孟子告子上に見えまする本文でござります。扱此仁と申すは、諸先生いろく御註をなされたれ共、むづかしう申ては女中方や子供衆の耳へ入にくい。それをたとへをもつて御はなし申ませう。むかし京に今大路何某といふ名醫がござつて、名高い御人じや。或時鞍馬口といふ所の人、鶴亂の薬を製して賣弘めまするにつき、看板を今大路先生に御願ひ申て、書てもらはれました。其看板にはくらんの薬と假名で御書なされた。ソコデ頼だ人がとがめました。先生はくらくらの薬ではござりませぬか。何故はくらんとはなされましたぞ。先生笑うて、くらま口は京へ出入の在口、往來は木こり山賤百姓ばかり、くらくらんと書てはわからぬ。はくらんと書てこそ通用はするなれ。眞實の事でもわからぬときは役にたゝぬ。たとひはくらんと書て

仁の解

はくらんの薬

も、薬さへ機能があれば、能いてはない歟と仰られました。いかさま是は面白い事でござります。聖人の道もチンブンカンでは、女中や子ども衆の耳に通せぬ。心學道話は識者のためにまうけました事ではござりませぬ。たゞ家業におはれて隙のない、御百姓や町人衆へ、聖人の道ある事をおしらせ申たいと、先師の志でござりまするゆゑ、随分詞をひらたうして譬をとり、あるひはおとし話をいたして、理に近い事は神道でも佛道でも、何でもかでも取こんでおはなし申す。かならず輕口ばなしのやうなと、御笑ひ下されな。これは本意ではござらねども、たゞ通じ易いやうに申すのでござります。時に仁と申事は、畢竟トント無理のないと申す事でござります。此無理のないのが、即ち人の心じやと、孟子は仰られました。此無理のない心をもつて、親につかへますと孝行になり、主につかへますと忠になり、夫婦兄弟朋友の間も又々此通りて、五倫の道はやすらかに調ひます。其無理のない仕様は、親は親のあるべきやう、子は子のあるべきやう、夫はをつとのあるべきやう、女房は女房のあるべきやう、此あるべきやうが無理のないところて、

仁は無理のないこと

あるべきやう

即ち仁なり。又人の心でござります。たとへて申さば、此扇は誰が見ても扇ぢや。扇としつて、これで鼻汁かむ人も、尻ぬぐふ人もない。これは是扇のあるべきやう、禮儀に御もちゐなされるか、開いて風をもとめる歟、この外に仕様はない。此見臺もその通りて、棚のかはりにもならず、又枕の代りにもなりませぬ。やはり見臺は見臺のあるべき様に御つかひなさる。しかれば親御さまを親御さまと御らうじたらば、御孝行になされるが、子たるものゝ有べきやう、是が仁なり。人の心でござります。かやうに申てゐると、餘所のはなしのやうなれども、則ち御銘々さまの御心が、トント無理のない仁の丸無垢、いまあなた方の御心の店あるしをいたして居ますのぢや。よそ事のやうに御聞なされては、迷惑にぞんじます。もしあなた方が親御へ口ごたへをなされたり、また親を泣せたり、主人に心配させたり、難儀をかけたたり、夫に腹を立させたり、女房に心づかひをかけたたり、弟をにくんだり、兄を侮たり、世間へ難儀をかけちらすは、皆扇で尻をぬぐひ、見臺を枕にしてござるといふものぢや。御當所には左様の人柄はござるまいけれども、天竺の横

本心

町には、此連中がたんとある。御用心なさりませ。つくづく思ふて見れば、意地のわるい生つきでも、いたし方がござりませぬに、幸に御たがひに無理のない心を持って生まれましたは、千萬金にも替られぬ、有がたい事ではござりませぬ歟。この無理のない心を、我乃て本心と申ます。尤も仁と本心と、となへ所によつてすこしの差別はあれども、そんな事の吟味すると長うなる。唯本心は無理のないものとおぼしめして、間ちがひはござりませぬ。今日各々様に御一人く御目にかゝらいても、おのくさま方のお心にすこし無理はござりませぬと知れます。其證據はいふまじき事をいふ歟、すまじき事をする、忽ち腹の中が何とやら心わるう覺える。是無理のない心をもつて、無理をするゆゑ、心がねぢれて心わるいのでござります。是はこれ千人萬人みな同じ事でござります。古歌に

鳴瀧のよるの嵐にくだかれてちる玉ごととにやどる月かげ

仁は萬人の
所わけて持つ

これ月は一ツなれども、ちる玉ごととに各そのかけをやどす天理の妙用、仁はひとつの仁なれども、萬人みな是を分て持て居ます。ソコデ世界中の人の

本心を師とす

こゝろに、無理のないといふ事が、チャント勘定が出来ます。さるに依つて、此無理のない心にしたがうて物ごとをすれば、皆あるべきやうに成て、孝行忠義もおのづから出来ます。ナントはやい學問ではござりませぬか。タッタ一ツ合點すると、百年學問した人と、行ひにおいて何もかはつた事はござりませぬ、ドウゾ本心に御したがひなされ、是を先生として、御稽古をなさるがよろしうござります。我本心を師匠にすれば、御祝儀もいらす、暑寒の見廻にもおよばず、心やすう忠孝はつとまる。ありがたいをしへてござります。しかしあまりやすいと、得て御うたがひの起るものぢや。決してやすものでも、御買かぶりの氣づかひのあるのではござりませぬ。押切て本心におしたがひなされるが、宜しうござります。中庸には率性之謂道と、急度御證文の請合がござります。御氣づかひなしに、御つとめなされませ。扱義人路也とは、義といふは無理をせぬ事なり。無理をせねば人交りは申におよばず、萬物と交てよろし。がるがゆるゑに古人義者宜也と仰られました。家來としては奉公に精を出すはよろしい。嫁としては舅姑に孝行にし、夫を大

義は無理を
せぬこと

それ／＼道
のあること

中澤道二の
嘯

切にするが宜しいぢやござりませぬ歟。其外何事でも、宜しいのが義でござりまする。其宜しいのが人の道ぢや。道とは古人曰道猶大路也。江戸へ行も長崎へゆくも、表へ出るもうらへ出るも、となりへゆくも、雪隠へはいるも、皆それ／＼に道がある。もし道をゆかぬと、屋根こしをしたり、溝へはまつたり、野ごし山ごしとつけもない所へうろたへまする。是と同じ事て人の上でも宜しうない事をする、道ではござりませぬ。子は親に孝、妻は夫に貞、朋友は互に信、一々はいてもしれてある。其通りさへすると道じやによつて、互によろしけれど、親をなかせたり、夫に腹たてさせたり、人を恨んだり恨まれたり、是みな宜しうない事じや。是が道でない故に、川へはまつたり、荊の中へかけ込だり、どぶへ飛こんだりすると同じ事て、扱も難儀千萬なものでござりまする。尤も道はどこらにあるやら、とくと考へねば成ませぬ。幸ひ中澤道二先生の御はなしを承り傳へました事がござりまする。序に御はなし申ませう。

中澤先生、ひと、せ攝州池田へ道話に參られました。ある豪家に逗留いたし

豪家の娘と
諸藝

按摩のけい
こも御しこ
みか

た所が、その家の主人もとより心學執心ゆゑ、先生をもてなしのあまり、十四五になる娘を呼出し、道二先生を饗應させられました。此娘御容儀もすぐれ、行儀もよく、花をいけ、茶をたて、琴をひき、また先生をなぐさめ、歌などをよまれました。ソコデ先生その親たちへ挨拶に、是ほどにおそだてなされるは、なみ／＼の事ではござるまいと申されたれば、親達が圖にのり、嫁入して先方で耻をかきませぬやうにと、只今いたした外に、松明、花むすび、晝も少しは習はせましたと、段々と娘自慢、ソコデ先生が、それは中々大ていの事ではござりますまい。夫なればさだめて、肩こしを揉む按摩の稽古も、御仕こみなされたであらうといはれた。主人むつとしたる顔つきで、貧乏はいたしてゐれども、娘に按摩のけいこはまだ習はせませぬといはれた道二先生笑ひながら、それは近ごろ御心得ちがひでござりませう。貧乏金持によらず、女は夫の家にかしづけば、先方の親たちを我親としてつかへるが道ぢや。其大切な舅姑御が御病氣のときに、ゑかき花むすび、茶や花では御かいほうは出来ませぬ。出入の按摩やをなご衆の手をからず、嫁御が眞實に

親たちの肩こしをなてさすりして、御介抱をなさるゝが、嫁御の道でござります。其道の修行に、按摩の御稽古はまだ歎と申たのでござります。とかく役にたつ御稽古が肝要じゃといはれました。流石の主人も大きに我を折り赤面して、御託を申されたと承はりました。なる程琴三味線もよろしいが、撫さすりの介抱を心がけるが、子たるものゝ道ぢや。是て道はどこにあるやら、とくと御考へなされませ。遊所ぢかいところでは、得ては娘の子に琴、三味せんを稽古させて、藝者の風俗を見習はず。じゃに依て娘らしう育つがすくなうござりまして、親の目をぬすんで、逃たり走たりが多うござります。これは娘御のわるいのぢやない。親御のそだてのわるいのぢや。尤も琴三味線端うた淨るり、やくにたゝぬと申すのはござりませぬ。心をつけて見ますれば、端うた一ツでも、皆善をすゝめ悪をこらすのをしへてござります。アノ四ツの袖と申すはうたに、

「うき中のならひとしらはかくばかり、花のゆふべのちぎりとなるも」此唱歌で御考なされて御らうじませ。是はこれ若い男と女と、親のゆるさぬ縁む

端歌一つも
勸善の縁

ずび、面白からうと思ひのほか、おもふやうにならぬ。ういつらい世の中じやと知つたら、かうはせまいものと、後悔した文句でござります。こんなことは世間にはまゝあること、嫁を貰たら面白からうの、世帯を持たらうれしからうのと、鍋尻こがさぬ畑水練の、ムチャクチャじゃあん、思ひの外に世帯持て見ると、面白うもなんともない。唯今日に追廻され、髪もかたちもかまはゝこそ、まき髪に前垂帯、ふところへ子をねぢこんで、みそこしさげて歩行て見たがよい。どのやうなものであらうぞ。是みな親の教訓をきかず、時節到来をまたずして、はやまつて俄所帯、これは誰がしつた事じゃ。皆おのれゝがいたづらから、夫を何の分別もなう、三味線さへひくと面白い事を思ひ、五ツや六ツの勘辨のない、女の子に大きな三味せんをだかへさせ、仕かたがない故、つき棹にのぼりついて、キイナ聲出して唱ふてゐるを、よろこんでござる親達は、御氣の毒千萬なものでござります。御油断をなされまするな。うろたへると琴三味せんて育つた子は、親をすてゝ走つたり、脱落したりする事があるものじゃ。すべてうはさらしい花やかな事には、かなら

琴三味線で
そだつた子

京の蛙と大
阪の蛙

世 俗 訓

四六

ずひよんな事が出来まする。此四ツの袖も、作者のこゝろは、いたづらに
ましむるをしへの道じや。芝居淨瑠璃はやりうた、とかく目のつけ様が違ひ
ますると、大間違になるものでござります。琴三味せんを教へて、嫁入先
間に合さうと思ふたが、思の外に間に合ひて、嫁入せぬさきに忍び男をこし
らへて走るのは、皆目の付やうのちがふに依てぢや。是て面白い話がござり
ます。むかし京にすむ蛙が、兼て大阪を見物せんと望て居ましたが、此春お
もひ立て、難波名所見物と出かけ、のさく〜と這まはり、西の岡向ふの明神
から、西街道を山崎へ出、天王山へのぼりかゝりました。又大阪にも都見物
せんとおもひ立たかへるが有て、是も西街道瀬川あくた川高槻山崎と出かけ、
天王山へのぼりかゝり、山の巔で兩方が出合ました。ナニガ互に仲間同志な
れば、めん〜の志をはなし、扱兩方がいふ様は、此やうにくるしい目をし
て、漸とまた中程じや。是から互に京大阪へゆきなば、足も腰もたまるまい。
爰が名におふ天王山の巔、京も大阪も一面に見わたす所ぢや。ナント互に足
つまだて、春のびして見物したら、足のいたさを助からふと、相互に相談さ

目のつけ所
がちがふよ
りの誤

おれが

はめて、兩方がたちあがり、足つまだたて、きつと見わたして、京の蛙が申
まするは、音にきこえた難波名所も、見れば京にかはりはない。術ない目を
してゆかうより、是からすぐに歸らうといふ。大阪の蛙も目をばち〜して
嘲笑うていふやう、花の都とおとにはきけど、大阪にすこしもちはぬ。さ
らば我等もかへるべしと、双方互に色代して、又のさく〜と這ふて歸りまし
た。これが是、おもしろいたとへてござりますれど、つひに御合點がまゐり
にくからう。蛙はむかふを見わたした心なれど、目の玉が脊中についてある
ゆゑ、ヤツパリもとの古さとを見たのぢや。何んぼほどにらんで居ても、目
の付所のちがうてあるには氣が付かぬ。うろたへたかへるの話し、よう聞て
下さりませ。或人の發句に「手はつけど目は上につく蛙かな」おもしろい發
句てござります。ハイ〜〜〜畏りました。左様々々御尤てござりますと、口に
はいへども、目は上につく蛙かなで、おれが〜の向ふみず、是を放其心
而不_レ知_レ求と申ます。なんぼおれが〜で物をやり付うとしても、中々おれ
がの細工では出来ませぬ。斯様に申せば、おれがからだておれが働き、おれが

錢をまうけて、おれが口におれが物をくふのじや、人さまの御世話にはなるまいし、おれがてなうてどうして世間がわたられるものぢやと、滅多におれがをいふ人があるものじや。是はきつい了簡ちがひ、御上様の御政道がなかつらたら、一日も己がてはゐられぬ。昔一の谷のいくさの時、源義経公が、丹波の三草から攝津國へおしよせらるゝとき、山中に日を暮して、案内はしらず、武藏坊辨慶をめて、例の大松明をともせと御意なされた。辨慶畏つて諸軍勢に下知をつたへ、走りちつて谷々にある家々に火をかけますれば、一チ面にもえ上る。此火のひかりを便として、一谷へ出られたと承ります。爰を能うかんがへて御らうじませ。是はおれが藏じやの、是はおれが家じやの、これはおれが田地じやの、是はおれが娘じやの、是はおれが女房じやのと、どの様におれがおれがかつぎあるいても、天下のみだれてあるときは、スツポンの間にも合ませぬ。有がたい事には四海太平にをさまり、御仁政のいたらぬ隈もなく、それくの御役人さまが、夜のまもり晝のまもりと、御まもりなされてござればこそ、屋根の下に寝てはゐられる。どうしておれが細

仁政のありがたさ

むかふ見すの胸算用

工で、手足のばしてねてゐるゝものではない。雨戸をしめた歟、表の戸を締たかと、吟味しまはつて、まづこれで用心よしと落付て、御やすみなさるその用心はどんな用心じや。四分板壹まい、しかも裏表からけづりて貳分板壹まい、何ほどの用心じやぞ。大きなおならしても、ひびきわれる位じや。それを盗賊がこはがつて這入るまいか、チト思案して御らうじませ。皆これ御上様の御仁徳、けつかうな御代にうまれ合した、冥加のほどと思はずに、おれがくと氣随氣まゝをいひつので、こちらの身代は千貫目、仰向けにねてゐても、五百年や七百年はあそんでくうてゐられる。藏が五とまへ、家屋敷が二十五ヶ所、かしのけの證文が三百貫目、これほどあると、土佐をどりして奢ても、五十年や百年は貧乏する氣づかひはないと、脊中に目のある蛙了簡、むかふ見すの胸算用、大丈夫な御要害じや。何んにも頼みにはなりませぬ。寝てゐるうちに彼の大松明にならふやら、大地震があこらふやら、知れぬが浮世のありさまでござります。此頼まれぬといふについて、今一ツ話がある。眠さましに能う聞て下さりませ

さいえのた
とへ

世俗訓

五〇

せ。アノ榮螺と申貝は、手丈夫な手厚い貝で、しかも丈夫な蓋がある。ソコ
デあの榮螺が、何ぞといふとうちからふたをびつしやりべて、丈夫な事じや
と思つて居ます。鯛や鱸がうらやましがり、コレさゞえや、おまへの要害
は大丈夫なものじや。うちから蓋をしめたがさいご、外からは手がさせぬ。
さりとは結構な身のうへじやといへど、榮螺が髭をなて、おまへ方が其
様にいうてくれるけれど、あまり丈夫な事もない。しかしながらマアかうし
てゐれば、まんざら難儀なこともないと、卑下自慢をしてゐるとき、さつぷ
りと音がする。榮螺がうちから急に蓋をしめて、じつと考へてゐながら、今
のは何であつたしらぬ。網であらふ歟、釣針であらふ歟、是じやによつて要
害が常にしてないかどうか。鯛やすゝきは取られたかしらぬ。さても
心もとなない事ではある。シタガまづおれは助かつたと、兎角するうち時刻も
うつり、モウよからふとそつと蓋をあけ、あたまをぬつとさし出して、そこ
らを見まはせば何となう勝手が違ふやうな。よくくみれば、魚屋町の肴や
の店に、此さいえ十六文と、正札付に成てゐました。ナントおもしろいはな

放心

身にかへり
て吟味が肝
要

してござりませうが。おれがくを引さらへて、家も藏も知恵も分別も、臺
も後光も丸でとられてしまつた事はしらず、氣のどくな榮螺、この様な連中
がからや天竺には得であるものでござります。とかくおれがくはたのみに
はなりませぬ。ある人の道歌に、「はしなうて雲のそらへはのぼるともおれが
くはたのまればせず。」是を放其心而不求知と仰られたのでござります
何事もわが身へ立かへつて、手まへの吟味には氣もつかず、たい向ふへく
と目のつくが放心でござります。放心じやというて、心が飛でしまふのでは
ござりませぬ。身に立かへる事の出来ぬのじや。すべて是まで申ところは、
金銀財寶の事ばかりではない、器量をたのみ、奉公をたのみ、知恵をたのみ、
分別をたのみ、力をたのみ、格式をたのみ、これさへあれば、大丈夫じやと
おもつてござる人は、みな榮螺の御連中じや。とかく何事も、身にたち反て
御吟味が御肝要でござります。休息。

—終—

鳩翁道話壹の下

放心を戒む

人有^ト雞犬放^レ知^レ求^レ之、有^ニ放心^ニ而不知^レ求、學問之道無^レ他、求^ニ其放心^ニ而已矣。是は孟子たとへを以て御しめしなされたのでござります。鶏犬とは犬にはとり、すべて飼猫あるひは鶏など、いつも家へ歸る時分にかへらぬと、其飼主がうろろとたづねます。犬にとられはせなんだ歎、蛇にとられはせぬ歎、もしや人がぬすんだかと、向三軒兩隣、まよひ子を尋るやうに、モシこちの三毛はこなたには居ませぬか、雞はまわりませぬかと、たづねあるくは人情でござります。こゝが入用のところじや。犬鶏は紛失しても、格別害には成ませぬ。心は身のあるじと申て、一身の旦那様じや。その心が物のために奪はれると、親のいけんも耳へいらす、主人の教訓も空ふく風、蛙のつらに水かけた様に、目ばかりばら／＼して、口にはハイ／＼というておれど、心こゝにあらざれば、見れどもみえず、聞けども聞えぬ。うまれもつかぬ片輪もの、仲間入、これは是みな心の紛失してあるに依てじや。此こゝろ

學問は心のことなり

を尋ねやうとも、さがさうともおもはず。親がわるい、主がわるい、夫がわるい、兄がわるい、八兵衛はわるい奴じや、おまつはいけぬ女じやと、むかふへばかり目を付て、我身にたちかへつて心を探る事はせぬ。ナントむごい事じやござりませぬか。犬鶏は尋ねても、肝心の心はたづねぬ。よくうろたへたものでござります。是じやに依て、聖人はこれを御歎きなされて、人の道ある事を御しめしなされて下さる。此御示しを承はるを學問といふ。其學問の趣意は、此心をたづねさがすのでござります。故に學問之道無^レ他、求^ニ其放心^ニ而已矣と仰られました。而已とは盡さ／＼て餘りなきの辭、心を求むるの外、別に學問らしいものはないと、屹度御うけ合なされた御證文でござります。強ち唐やまとの古事來歴を知り、文字の穿鑿ばかりするを學問とは申ませぬ。兎角心のことじや。八千餘卷の經論も、諸史百家の書物も、皆心のゆく衛をしるした所書でござります。此心を求るとは、前以て申す我身に立かへる事でござります。立かへる事をしらぬと、恐ろしいものじや。どこまで往ふやら知れませぬ。又立かへると有がたいものじや。孝子にも忠臣に

も立どころに成られます。善惡二つは、身に立かへるとかへらぬとの二ツの境、道二仁と不仁と仰られたも、御尤でござります。

是に付ておそろしい又有がたい話がござります。御ねむからうが聞ておくれなされませ。去る田舎に、相應にくらす百姓がござりましたが、夫婦の中の男の子壹人、ナニが可愛さのあまりに、牛が子をねぶる様に、愛だてなうそだて上られました。ソコでその子が次第に横着ものに成り、馬の尾を抜たり牛の鼻をくすべたり、近所の子たちを、假初にもたゝいたり泣せたり、わやくの中に成人して、とう／＼手にあまる不孝者、小力はある、大酒はのむ、小博奕はうち覺える。いつしか神事相撲を取覺え、かりそめにも喧嘩口論、女郎買やら妾ぐるひやら、たま／＼親達が異見すると、大聲をあげてはりこみをくはせ、こなた衆が放蕩者ぢやの、不孝ものじやのと、其不孝ものを誰がたのんで生んだのぢや。おれはうんでもらうて迷惑してゐる。夫ほど放蕩ものがさらひなら、元の所へをさめて貰はふ。そうするとおれもたすかるなとと、滅法な口ごたへ、親たちも詮方なう、其身はめい／＼年は寄る、息子

わがまゝ育ちの子

は次第にいさりをる、可愛いと、仕様がないとて、勘當も得せず、氣隨氣まゝをさせておくと、いよ／＼圖にのり、かしては投たの、こゝては腕をねぢ折たのと、あら／＼しい大喧嘩、其たびごとに親達はいふに及ばず、親類縁者の胸板に釘うつ様な、恐ろしい惡黨ものがござりました。是はこれ腹のうちから此やうなわんぱく者ではなけれども、おれが／＼が増長して、心を取失うたばかりで、此やうな難作もの、ナント放心は恐ろしい事じやござりませぬ歟。勿論親類縁者から親達へ勘當せいと、たび／＼催促はするけれども、何分一人子の事なり、けふは勘當、あすは義絶と、口ではいへども勘當もせず、徒にとし月が立て、かの横着ものが二十六歳に成ました。次第に悪行はつもの、後々は親類縁者へどのやうな難儀をかけやうやら、怖氣が立たもの故、一同に評定して親たちへいうてやるには、急に勘當をさつしやれぬと、親類中各方と義絶をいたさねば成ませぬ。アノ息子をあのまゝにしておかれると、親類は申に及ばず、村中へもどんな難儀がかゝらうやらしれぬ。御夫婦には恨はなけれども、面々家が大事でござるによつて、義絶を願ひませぬ。

身に立ちか
へればな
まるに

せう歎、勘當をさつしやるか、有無の返事が聞きたいというてよこした。ソコで親達もせんかたつき、子ゆゑに親類義絶になつては先祖へもすまぬ事、さらば今夜みな寄合をして下され、相談の上願書をしたゝめませう。勿論親類中何れ御連印下されねばならぬ。御苦勞ながら印形御持参にて、暮早々より御寄下されいと返答しられた。古語に老牛犢をねぶり、牝虎子をふくひと。畜類でも鳥類でも、身にかへて子を可愛がる。ましてや人のうへて、其子を勘當せにやならぬ様に成たら、さぞかなしい事でござりませう。これみな其子の放心から起る事じゃ。身に立かへりさへすれば、波風もなうをさまるのに、さり逆は身に立かへる人がない。親は勘當しとむなうて成らぬけれども、子の方から勘當してくれと突付るには、こまつたものじゃ。近世徳本上人の歌に、「これほどによれつもつれつする彌陀をあへて頼まぬ人どはかなき」是はこれ佛の大慈大悲をいふのじゃ。我方では本心がそれはわるい、これが能ないと、明てもくれても御世話をなされるれど、身最眞身勝手の私心私欲がそうはまるるまいと、兎角本心にそむきをる。親の子をおもふも、不孝もの、親

不孝者の心

を思はぬも、能う似たものじゃ。あへてたのまぬ人どはかなき。銘々本心に立かへつて、御助かりなされませ。さてかの野良息子は、この日近村で博奕をうつてをりました。折から村の友達が来て、今夜貴様を勘當すると、親類が參會するげな。何んぼ貴さまのやうなものでも、勘當したら定めて難儀をするであらふと、半分きかずに大聲あげて、何じゃ今夜おれがうちで勘當の評定歎、こいつ面白いことが出来てきた。全體親父や母者のほえづらが此とし頃見とうなうて、氣色がわるうてこたへられたものじゃやない。勘當うけたら一本だち、唐へ飛ばふが、天竺へ宿がへせうが、誰歎點のうち人がない。このやうなありがたい事はないぞ。さらば今夜評定の席へ乗こんで、何ておれを勘當するのじゃと、一番團十郎をふんでゆすりかけたら、五十兩や七十兩の退代は巾着へ入れたやうなものじゃ。其金持て京歎大阪へ出て見せ付や始めたら、おもしろい事であらう。ドウゾ今夜首尾よう山のあたるやうに、前いはひに一盃せうと、同じ仲間の悪鬼たちと、茶わん酒の大酒もり、日のくれまへに泥のやうに酔たところて、さらば此勢ひに内へいんで、一ト

勝負はつて来ようと、大脇ざしをぼつこみ、我が居村へ歸つた時分は、丁度初夜まへ、大かた今時分は親類どもがより集り、ない知恵の底ふるうて、評定をして居るであらう。その所へをどり込んで、大たいけにたゞけたらば、百兩ぐらゐはつかめるであらうと、既に我が家へ歸らうとしたが、きつと思案し、親類よつてゐる中へ、おれが顔を見せたらば、皆俯いて居るであらう。其中で大聲あげるも、何とやら拍子がない。おれが事をあしざまにいうて居る其圖にのり、踊りこまぬと座つきがわるい。コイツは一ばん思案を仕かへて、うらの藪から座敷の椽さきへまはり、一家のやつらが評定を立聞したら、さだめておれがあくそもくそを店おろしするであらう。其拍子に戸障子蹴破、大がみなりと出かけたら、拍子があつてもしろいと、ひとり思案し、雪踏をぬいて腰にはさみ、尻引からげて裏の藪から切戸をこえ、椽さきへ廻つて見れば、果して内にはひそくと評定の最中、兩戸のすきから覗て見れば、親類縁者が車座に直り、めんく願書に判をおしてゐる。その願書が兩親の前へくると、かの息子がこれを見て、サアこゝが勝負じゃ。親父が

判を仕やるを相圖に、この戸を蹴やぶつて飛込ふと、居合ごしに成て息をづめてのぞいてゐる。ナント人もおそろしい心になれば成ものではござりませぬか。孟子の人の性は善なりと仰られたるに、微塵も違ひござりませぬども、其習性となるときは、此やうなおそろしい悪黨ものが出来ます。此とき孔子孟子が千日道を御ときなされたとして、立かへりさうな勢ひじゃない。かう堅まつた悪人は、むけん地ごくの釜こげといふものじゃ。たとへ釋迦如來が元服して土佐をどりをめされても、中々性根のつきさうな事ではないが、不思議に此のらむすが、悪心をひるがへして、大孝行の人になるといふ、是れから成佛の段でござります。「人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまよひぬるかな」かの親たち夫婦のまへに、勘當の願書がまはつてくると、母親は大聲をあげてなき出す。爺親は齒もなきはぐきをくひしはつて、さし俯いてゐる。やがてくもつた聲で、おば、印形を取つてござれ。母親は返事も出かね、なくく、簞筒のひき出しから、革財布に入つた印形を爺親のまへにおくと、彼のら息子は、兩戸のそとから息をつめて伺うてゐる。

母親の決心

其うちにござと財布の紐をとぎ、印形をとり出し、肉をつけて既に判を
 おさふとするとき、母親がその手にすがつて、先づ待て下されといふ。て、
 親は此期におよんで、親類中が見てゐらるゝ、未練な事をいはしやるなど、
 いへども聞かず。マア私がいふことを聞いて下され。尤もあの不孝ものに此家を
 譲たら、三年たぬうちに草をはやすてござらう。それがかなしいというて
 天にも地にもタット一人の子を勘當したら、跡へかはりをもらはねばならぬ
 其貫うた養子が實體で、こちら夫婦に孝行をし、家も相續してくれればよけ
 れども、どうもたしかに養子は孝行など、定まつた事もござるまい。モシそ
 の養子が不心得で、家を野原にしやうやら、此方等のやうな肩のわるい夫婦
 なれば、そのほども知れぬてはござらぬ歟。おなじ子ゆゑにつぶす身代なら
 悴のために家をうしなひ、なじんだ村をたち退て、夫婦袖乞になるとも、我
 子の尻からついて歩行たら、わしは本望におもひます。五十年このかた、一
 生に一度のねがひ、ドウゾ聞入れて勘當をやめて下され。子ゆゑに乞食をす
 ると思へば、恨にもおもひませぬと、聲をあげて泣々いはるゝ。親類もこれ

両親の慈愛

子の尻から
 乞食して付
 き歩く

を聞いて、一同に顔を見合せ、親父が何といはるゝぞと、まもりつめて見てゐ
 れば、爺親は何ももうた歟、印形を財布へいれ、手ばやに財布のひもをしめ
 て、かの願書を親類のまへにさしもどし、さて〜一家中へ對して、面目な
 い事てござれども、いまばいがいふところ尤におもひまするゆゑ、向後悴は
 勘當はいたしますまい。かういへば其あまい心でそだてた物ゆゑ、あの様な
 不孝ものが出来たと、定めて御まへがたが笑はつしやらうが、笑はれてもく
 るしうござらぬ。勿論アノ悴を勘當せねば、この家がつぶれる事は、物三年
 まちはすまい。わが子ゆゑに先祖代々の家を野原にするのは、先祖へ對して
 すまぬといふ事も、能う合點して居ります。又勘當せねば、おまへがたと
 不付合になり、親類義絶も合點てござる。必定こちらが村を立のくとき、無
 心合力でもないはふかと、その用心の義絶であらうが、かならず案じて下さる
 な。世間の義理も先祖への不孝も、親類の義絶もかへりみぬのは、子が可愛
 ばかり、その子の尻から乞食して付てあるく事なれば、此方等夫婦が本望と
 いふもの、決して御まへがたへ無心合力はいひませぬ。ハテ何て死ぬるも一

生じや。可愛い子のために大道にのたれ死、並木のこやしになるのも、この
 んてすれば恨とはぞんぜぬほどに、早々おまへがたも内へ引取て下され、翌
 日から物もいひませぬぞ。子ゆゑなら何といはれてもかまひはござらぬと、
 同じく大聲をあげて男なきに泣るゝと、は、おやも勘當せぬと聞て、これも
 うれし泣になく。親類縁者はあまりの事にあきれ果て、返答もせず、たゞ夫
 婦の顔をうちながめて居るばかり、ナント親の子にまよふあはれなこゝろを
 御推察なさりませ。猫が子をくはへあるくやうに、蔭になり日向になり、人
 のそしりも先祖への義理も、わが身のつまらぬ行末も、かまはゞこそ、子の
 可愛いにとられ切て、迷ひにまよつた親の心、實にあはれに氣のどくなもの
 てござります。是がこれ此親たちばかりじやない。世間に子を持た親のこゝ
 ろは、みなこの通り、先師石田先生のうたに、「子にまよふ親の心を見るにつ
 け我かぞいろもかくやありなん」人の親の子にまよふを見て、我父母もかく
 ぞおぼしめさんとおもひやりて、御よみなされた歌じや。實に此通りに違ひ
 はござりませぬ。此親の大慈大悲の光明がかの不孝ものゝ腸へしみわたると

かぞいろ
父母

圓位上人
西行のこと
伊勢大廟に
詣しての詠
といひ傳ふ

有がたいものじや。さしもおそろしい鬼のやうな横着ものも、五體を木で
 しめらるゝやうに覺え、何といふ事はしらねども、胸さきへ涙が突かけ、聲
 をあげてなかれはせず、かます袖を口にくはへて、大地にたふれてしめ泣に
 ないてゐる。圓位上人のうたに、「何事のおはしますかはしらね共かたじけな
 さになみだこぼるゝ」能うよんだ歌でござります。此ときかののら息子が、
 親をかたじけないとおもうたでもなく、又有がたいとおもふのでもない。何
 かはしらず、親の慈悲心がはらわたへこたへると、能うしたものじや、立て
 も居てもゐられぬ。これが是人々固有の本心というて、あきらかな徳を生れ
 付てはゐれども、おのれが氣随氣まゝの身勝手、しばらくその光りをかく
 してゐたのじや。されども親の不慈大悲の光明で、はらわたを貫かれ、自然
 と息子のもちまへの光明が、さそはれて輝き出すと、氣随氣まゝのむら雲は
 いづくへやらさきえうせて、眞實そこから親の慈悲がありがたう成て来る。と
 くさかるそのはら山の木の間よりみがくれいづる月のさやけさ」格別の惡黨
 ものが本心にたちかへると、一際すぐれてみがくれ出る月のさやけさ。ナン

子の悔悟

トありがたいものではござりませぬ歟。さて彼息子は、すぐさま座敷へかけこみ、親たちへ詫言せんとはおもうたが、まてしげし、此まゝ駈込たらば、親類縁者もおどろき、いかなる事を仕出すぞと、親達も御こゝろづかひてあらう。何知らぬ顔にて表口から座鋪へ出、親類について詫言せんと一決してしのび足に裏よりおもてへまはり、わざと雪踏の音たかく、咳ばらひとともに座敷へ通れば、親類は大におどろき、親達はにくい我子の顔を見て、夫婦とも泣てござると、かの息子も何もいはずにさしうつぶいてないてゐる。良ありて親類中へ、さて是までは勘當くと度々聞きましたれども、さのみつらいとも存ぜんのだが、今夜の寄合とうけたまはり、どうした事やらしきりに心ぼそく覺えまする。何分これまでは重々の無調法、此うへは屹度あらためまするによつて、今夜の勘當しばらく御用捨を下されい。永うとは申すまい。わづか三十日の日のべ、其うちに性根があらたまらずば、其時勘當しられても、一言も申分はござらぬ。ドウゾ御まへがたの御取なして、親達が三十日日延をいたしてくれらるゝやう、御詫をなされて下されいと、いつにな

不孝息子孝行となる

母親の末期の喜び

い頭を疊へすりつけて頼む。此とき親類中は、親達が手づよい返答に、その座しらけて立にもたゝれず、拍子のない折から、此息子が一言に、これ幸ひと一同に口をそろへ、今夜の所は待てやつて下されと詫言する。親たちは本心に立かへらいてさへ、勘當はせぬ心、まして今の一言を聞て、たゞうれし泣にないてゐらるゝ。親類もこれをしほに随分孝行にさつしやれと云捨て、其夜の評定はやみました。これから彼息子どのが手のうらを返す様に孝行人になり、二親につかへるありさま、實に小兒の父母を慕ふがごとく、これまでの悪行はあとかたもなく消失せました。此事世間に取沙汰がたかうなり半年たゝぬうちに御地頭様の御耳に入り、つひに御目がねを以て、大庄屋役をかの息子に仰付られました。是てかの息子の孝行のしわざ、御推察なされませ。さて其のち三年ばかり立て、母親が大病、末期にかの息子どのをよんていはるゝには、いつぞや勘當の評定の節より、何とおもうたか志があらたまり、此うへもなう孝行にしてくれる。モシ其時にそなたの心が改まらず、其うちにあれが死たらば、地獄へゆかうより外はない。今は其方が孝行にし

てくれる。何もおもふことがないゆゑ、今死たら極樂へゆくにちがひはない。スリヤおれを佛にしてくれるは、皆其方が孝行のゆゑじやと、手をあはせて拜みながら臨終をしられたと申事じや。なるほど當來の果を以て未來をしる。この世で心くるしければ、未來もまた心苦しい。今日の手あくれは、あすへ付てまはる。心の苦しいは地獄、心のらくなは極樂、親の苦樂は子たるもの、所作にある。子善なれば親は佛、子悪なれば親は鬼になりますぞへ。一旦若氣のあやまりて、何の分別もなう、親に心づかひ懸たり、親をなかせたりの不孝も、此道理をわきまへて、今日たゞ今、こゝろさしをたて直し、我身に立かへつて孝行すれば、親御様は今日から極樂ぐらし、又立かへるこゝとがならいて、是までの不行狀のやみませぬと、親御は其まゝ地獄ぐらし、地獄極樂は、たゞ身にたちかへるとかへらぬとてござります。このちか返るを放心をもとむるといふ。是すなはち學問の事じや。猶またあととは明曉御はなし申ませう。下座。

我身にたちかへるべし

鳩翁道話 貳の上

指の人に若むかざるを惡

孟子曰、今有無名之指屈而不信、非疾痛害事也。如有能信之者、則不遠晉楚之路、爲三指之不若人也。指不若人、則知惡之。心不若人、則不知惡。此之謂不知類也。さてこれは前晚辯じました、仁人心也の次の章でござります。則學問之道無他、求其放心而已矣といふ言によつて、孟子またたとへを引て、人の心の大切なる事を御しめしなされたのでござります。今とは今こゝにと申す事じや。無名の指とは小指の隣の指でござります。其外の指は親ゆびを大指といひ、人さしゆびを頭指といひ、高々指を中指といひ、小指を小指と申す。たゞ小指の隣のゆびに名が無い。尤も紅さし指とは申すれど、是は御婦人がた計の事で、天下通用ではござりませぬ。ソコデ名のないが名と成まして、無名指と申す。何ゆゑまた名がないぞといふに、トント用のない指じや。物を握るは親指小ゆびの力、つひりをかくは人さし指、酒のかんを試るは小指の役、皆それらに用があればども、無名

指ばかりは無用のゆび、あつて邪魔にならず、なくて事はかけませぬ。一身のうちにて尤も軽いものじや。其指が屈てのびぬ。勿論いたみもかゆみもない。故に疾痛事に害あらずと申てある。畢竟なくても苦しからぬ指なれば、まがつて有ても、いたみさへなくば、捨て置いて能い筈なれども、もしこれをよく信じてくれる醫者どのがあると聞たら、道の遠いもいとはず、さだめて療治をうけにゆくてあらう。それは何ゆゑ、指が世間の人と少し違つてあるゆゑ、耻かしようおぼえて療治をうけまするのじや。晋楚の路とは、晋の國と楚の國とは道法が千里、これは遠いところをいとはずといふたとへじや。是其指の人なみにないをいやがるから參ります。ソコデ指の人にしかざるが爲なりと申てござります。成ほど能う人は恥を知つたものじや。其筈でござります。羞惡之心義之端と申て、恥をしるが人の生れつき、しかしながら其耻をしるに二様ござりまして、妾の恥を知つて、心の恥をしらぬ人がござります。是はきついで御了簡ちがひじや。心ほど大切なものはござりませぬ。心は身の主と申て、一軒の内では旦那どのと同じ事じや。其旦那どの、心が、

羞を蓋つる
心の恥
妾の恥
心の恥

惡む事の類
を知らぬもの

頬ひくるしんでゐるを捨て置いて、家來のからだばかり可愛がり、膝がしらすりむいた、ほくちを付い。灸がいぼふた、膏藥はれ。風ひいた、葛根湯根ぶか難炊、生姜さけと、かりそめにも身體の御世話はなされますれど、心の事は一切御かまひなしじや。人にうまれて人のやうなこゝろもたず。鬼のやうな心を持たり、狐のやうな心をもつたり、蛇のやうな心を持たり、鳥のやうな心を持て、恥かしいとも思はず。からだばかり吟味してござるは、どういふ所から間違つてきたやら、此間違はふるうある事と見えて、指不若人知惡之、心不若人則不知惡、此之謂不知類と、孟子もおはせられた。是は重いとかるいと分らぬのじや。大を捨て小をとると申ものでござります。人情は一般、小はさらひ大はすき、軽いはさらひ重いはすきじや。ソコデ親類縁者へまねかれて、御馳走にあづかるとき、本膳が出る、あとから焼物を引てまはると、はや目の玉がきよろつき出し、向三軒兩どなりをにらみまはし、わが焼ものと見くらべて、隣のやき物が五六歩ほど大きいと、肝癪がむねにつしぱり、これの亭主は何と心得てゐるぞ、太郎兵衛も御客、おれもお客じ

大をすて小
をとる

や。なんておれにはちひさい焼ものをつけたのじゃ。何ぞこれには意趣(いそ)も恨(うらみ)でもある事歟と、腹(はら)の中(なか)がねぢれ出す。能うおもうて御(ご)らうじませ。焼ものに何の遺恨(いこん)があるものか。是ほどの僅(わづ)な事でも、小(こ)をさらひ大をとる。夫(つま)に何ぞや指(ゆび)のまがつたのを恥(はづ)かしう覺(おぼ)て、心のまがり(まが)りは苦(くる)に成(な)らぬといふは、大をすて、小をとると申(ま)ものじゃ。さるによつて孟子(まつし)も此(こ)之(こ)謂(い)不(し)知(し)類(るい)と御(ご)しかりなされた。ナント人は能(よ)うろたへたものじゃござりませぬ歟。古(いにし)歌(うた)に「かたちこそ深山(みやま)がくれの朽木(くも)なれ心(こゝろ)は花(はな)になさばなりなん」指(ゆび)や足(あし)にかゝはつた事(こと)じゃござりませぬ。皆(みな)心のことじゃ。心がまがつて有(あ)ては、色(いろ)は白(しろ)からうが、鼻(はな)すぢが通(と)つてあらうが、はえ際(ぎは)がうつくしからうが、夫(つま)は見(み)せかけばかりて、何(なに)のやくにたゝぬ事(こと)、蒔繪(まきゑ)の重箱(じゆうげう)に馬(うま)の糞(くそ)入(い)たやうなものじゃ。これをほんの見(み)かけ倒(た)しと申(ま)す。飯(い)たきのあさんどのが、ながしもとて鍋(なべ)の尻(し)をあらうてゐる。丁稚(ていぢ)の長吉(ながきち)が側(わき)へ來(き)て、あさんどん、御(ご)まへの鼻(はな)のさきに墨(すみ)がついてある。見(み)とひないと教(おし)へてくれる。あさんどんは嬉(うれ)しがつて、さうかへ、どこに付(つ)てあると、指(ゆび)のさきに手拭(てぬぐひ)をまいて、額(ひま)口(ぐち)で

形の世話を
喜ぶ

あのが鼻(はな)の先(さき)をながめ、後藤(ごとう)が目貫(めく貫)をほるやうに、そこから中(なか)ひねくりまはして、長吉(ながきち)どん、モウとれたかへ。イヤ〜ほうべたの方(かた)へ餘計(よけい)になつた。ドレ〜どこにと、水鏡(みづかがみ)に顔(かほ)をうつして掃除(そうじ)してござる。あさんどんの心(こゝろ)には、アノ長吉(ながきち)どんは可愛(かわい)らしい子ども衆(もろ)じゃ。晩(ばん)の御(ご)菜(さい)を、杓子(しやくし)あたりて御(ご)禮(れい)申(ま)さにやなるまいと、滅多(めった)にうれしがつて禮(れい)をいふ。もし此(こ)長吉(ながきち)どのが、コレ〜あさんどん、御(ご)まへの根性(こんじやう)はしぶとい根性(こんじやう)じゃ。チットふくれづらやめなされといふたら、あさんどんが何(なに)といふてあらうぞ。チト考(かん)へて御(ご)らうじませ。あたなめくさつた小丁稚(こていぢ)づら、わしが心がゆがんであらうが、三角(さんかく)に成(な)てあらうが、あのが世話(せわ)になるもの歟。あのおれ覺(おぼ)えてけつかれ、小便(せうべん)たれても、ふとんの洗濯(せんたく)はしてやりませぬと、角(かく)のはえぬ鬼(おに)の様に成(な)ます。これはあさんどんの事(こと)ばかりじゃない。イヤナニ軍(ぐん)本(ほん)兵衛(べいゑ)どの、御(ご)上(じやう)下(げ)の御(ご)紋(もん)が、すこしかたよつて見(み)えまする。軍(ぐん)本(ほん)兵衛(べいゑ)しかつべらしう肩衣(かたぎぬ)を正(ただ)してコレハ〜御(ご)氣(き)を付(つ)られ千萬(かたじけ)なうぞんずる。何(なに)也(なり)とも相(あ)應(おう)の御(ご)用(よう)もござらば承(うけたま)うてござらうと、嬉(うれ)しさうな顔(かほ)して挨拶(あいさつ)せらる。こいつが間違(まちが)うて、時

心の世話を
怒る

に軍太兵衛どの、足下の御心術甚以て其意得ませぬ。チト心を正直に御持なされ。心のゆがみが見えて甚だ見苦しうござるといふたら、どうするであらうぞ。刀にそり打て、鑄うちならし、忽ち刃傷におよぶであらう。ナント人はからだのこと、世話してやると滅多にうれしがつてなはず。心のせわをする人があると、真黒になつて腹をたて、その心を直さうとせぬは、どういふ拍子の間ちがひて、是ほどまで迷ふたものでござりませうぞ。是はよその事ではない。御たがひに大歎小歎。色かへ品かへこんな間ちがひは得てありたがるものでござります。よう御吟味をなさりませ。是がこれ形は人の目にかゝれども、心は人の目にかゝらぬゆゑ、ゆがんで有てもまがつて有てもくろしうないと、此無分別からおこる事じゃ。是じゃによつて、少しも油断はなりませぬ。

ある所の旦那どのが、臺所に居眠てゐる長吉をよび起して、コレ長吉、御客さまがもう御歸りなされた。奥にある酒やさかなを臺所へはこんだがよい。長吉、目をこすり、ふせうくに返事しながら、奥へ往てそこらを見れ

長吉のつま
み食ひ

人の心はか
くさられぬ
心が顔に顯
はる

ば、硯蓋やら小鉢やら、うまいものゝ勢ぞろへ、こはいものじや。誰が催促もせぬに、目の玉がきよろつき出し、なんじやこいつは味さうなものがたんとある。硯ぶたは鶏卵の巻焼、タツタート切はかのこつてない。よう喰客じや。こいつは何じや。ハ、ア蒲ぼこじやさうなと、ひと切つまんで口へほうばり、側をみれば、飯蛸が七ツ八ツ、南京のどんぶりの中に車座に座禪してゐる。こいつはえらいとつまむところへ、旦那のあし音、これではならぬと袂へおしこみ、銚子盃を俯伏てとる拍子に、飯蛸がたもとからころ／＼と、旦那目ばやく、それは何じや。長吉ぬからぬかほて、疊をたゝいて、おとつひこい／＼と申ました。何んぼ蜘蛛あしらひにしても、飯蛸は蜘蛛には見えぬ。隠たるより顯はるゝはなしじや。これじゃによつて、人の心は隠されませぬ。心に怒があると、額に青すがちがたちます。心になしみがあると、目になみだがうかみ、心にうれしみがあると、ほうべたにゑくぼが入り、心にをかしみがあると、笑ひ顔に成ます。是みな心よりして顔へ出ます。目に涙が出て、心がかなしうなるのはござりませぬ。額に筋が立て、あと

からはらの立のではござりませぬ。何事も心がさきじや。その心におもふ所は、皆かたちへあらはれます。これを誠_{マコト}於中_{ナカ}形_{かたち}於外_{ソト}と申ます。ナント是でも心のゆがみがかくされるものでござりませう歟。口答も心の煩ひ、鼻うたも心のわづらひ、早う養生をいたしませぬと、立煩ひは本腹がむづかしい。もし大病に成ましては、耆婆扁鵲が配劑でも、どうもいたし方はござりませぬ。さるによつて、其大病にならぬうち、心學を御す、め申ます。一度本心を御えとくなされますると、奇妙なものじや。ちよつとした身最負身勝手でも、直に胸へこたへます。之について、ある人前かた物がたりのついでに、さる兩替屋の主人の、得意のはなしなりとて申されたるは、兩替渡世は、金銀のよしあしを見分るが肝要じや。其見わけ様を小者にをしふるに其家々にて違あれども、この兩替屋の主人のをしへかたは、始より少しも悪銀を見せず、たゞ宜しき銀を日々に見せ置、しかとよき銀を見覺えたるころ、ソト悪銀を見すれば、忽にあしき銀とする事、鏡をてらして物を見るがごとし。これ一目下に悪銀と見極る事は、最上の銀を見覺えたるゆゑなり。かく

兩替屋のはなし

本心を見覺えるが肝要

のごとくをしふる時は、この小者生涯悪銀を見損ずる事なしと、申されたるよし承はりました。此はなしの眞偽はぞんじませぬども、道理においては、成ほど尤なをしへかた、實にあぶな氣のない稽古でござります。しかしながら最上の銀を見覺えても、半季一年外商賣をして、金銀を取あつかはぬと、又もとの素人方同様になりて、よしあしを見分る事が出来ませぬと申されしました。是てよう御合點をなされませ。一たび本心を見覺えますると、其あそからすこし計の身最負身勝手が出来ても、直に知れる。なぜなれば、本心のあきらかなる、無理のない事を見覺た故、ちよつとでも無理らしい事は、中々うけつける物ではござりませぬ。しかし又本心に遠ざかり、本心を見わすれると、以前の通り眞黒に成て、悪銀が見えにくうなります。御用心をなされませ。わるうすると、本心じややら悪心じややら、我とわが手に合點がゆかず。そのくらい心から、おもひつくほどの事が、思ふやうにゆかぬと、ハアスウ〜と肩て息をせにやならぬ。難儀なものじや。せめてだまつてなとのれば能けれど、かり初にもくるしいせつないと、腹の中のゆがみを人に

あうては白状をいたします。さり逆はこまつたものじゃ。是じゃに依て、何とぞ一度本心の正銀を見覚え、人欲の悪銀を見損ぜぬやう、どうぞ御互に一生道にはなれぬ様に、いたしたうござります。

鹿の音を聞きに行きし

これに付ておもしろい咄しがある。序に聞て下さりませ。秋も夜さむになりました頃、相應にくらす町人衆が五六人云合て、鹿の音をききにゆかうと、何が辨當小竹筒を用意をし、ある山寺に心やすい和尚がある、これを心あてに尋ねゆき、客殿をかりうけ、とまりがけの遊山、鹿の音をまちわびて、歌をよむ人もあり、あちらでは詩を作り、こちらでは發句、さいつ押へつ、入相のころになつても、トント鹿がなきませぬ。初夜になつても四ツになつても、鹿の音は一切聞えず。これはどうじゃ、モウ鹿がなきさうなものじゃと、まてどもなかず、そろく眠氣はさいて来る、詩も歌もいやになり、あくびにうき世咄もとぎれ、みな黙然としてゐる中に、五十ばかりの男、盃を前にひかへて、さて今晚はいづれもさまの御かけて、宵からゆるりと御物がたりをいたして、能いたのしみをいたしました。しかしながら私は箇様に楽しんで

不孝の子

店の者の不都合

て居ますれど、さだめて家内のものが、心づかひをいたして居ませうと、不圖ぞんじ出しましたれば、どうやら酒が理に入るやうに覺えますといふ。座中の人が、夫はどういたした譯でござりますぞ。サア御聞下さりませ。御ぞんじの通り、壹人の倅、當年廿二歳に成ますが、去とてはこまつた奴で、私が宿に居ますれば、しぶらこぶらと店の用を手傳ひますれど、私のかげが見えぬと、尻に帆かけて遊所がよひ、勿論親類縁者ども、いろくと教訓をいたしてくれすれど、一向馬の耳に風同様、アノやうなやつに身代をまかさにならぬかとぞんじますれば、心細いものでござります。おかけて何一ツ不足のない私の身分なれども、子ゆゑに毎日毎夜血のなみだ、さりとてはこまつたものじやと、吐息をついて咄されると、傍から四十五六ナ男が、イヤ〜あなたのは御難儀とは申もの、畢竟御子息に金つかはる〜といふ迄の事で、強て御心配にもござりますまい。私などは中々左様な事ではござりませぬ。兎角近年店のものどもが、假初にも引負をいたして、五十兩はまゝよ、七拾兩はまゝよと、年々の帳面の明き、能うおぼしめして御らうじま

親類縁者の
無心

せ、鼻たれの時分から世話をいたして、どうやらかうやら少しばかり店の用
にたつ時分、引負をこしらへてくれば、主人は何に成まするものじゃ。そ
れから見れば、あなたのは我子に金をつかはれるばかりの事といへば、また
かたはらから、イヤ／＼店の衆に金をつかはれるはまだしもじゃ。此方ども
は近頃都合がわるうござつて、得意さきがかたはしから倒れまする。あちら
では三貫目、こちらでは五貫目、實に氣の減るやうにござりますといふ下か
ら、向ふの席にすわつてゐる老人が、扇ばち／＼ならしながら、何れもの御
愁歎御尤でござれども、又親類縁者どもから、金の無心をいはれたり、印形
をしてくれといはれたり、家内づれのかゝり人、これもまたこまつたもので
ござりますると、半分いはさず、隣の人が、イエ／＼いづれも様のはみな榮
耀じゃ。私のつらい事を御さ／＼なされて下さりませ。どうした事やら、家内
のものと、母との中がわるうござつて、日がな一日牛の角づき合、内中がく
すぼりますゆゑ、イツソ里へ歸しましよと意へば、幼少のものは貳人も有
挨拶すれば女房の最員をすると、母親の機嫌がそこねまする。女房を叱れば

家内と母と
の不和合

晝夜の愁嘆

他人じやと意うて、ひとりむごうつらうさつしやると恨み、イヤモウ中にた
つた柱で、つらいの苦しいのと、申やうな事ではござりませぬと、拍子にか
／＼つて身のうへの難儀ばなし、其内に壹人氣か付て、ほんにモウ鹿が鳴さう
なものじゃ。あまり咄にしこりが来て、鹿の音を聞はづした歎しらぬと、縁
の障子を引あけてみれば、大きな鹿が庭さきに默然としてゐる。是はどうじ
や。そこにゐるなら、なぜさつきにから鳴ぬぞといへば、鹿がぬからぬ顔で
イエ／＼わしはおまへ方のなくのを聞に來たのでござるといふた。ナントも
もしろい咄でござりませうが。老たるも、若きも、男も女も、金の有も金
のないも、おしならして、晝夜愁歎のこゑはやみませぬ。これが苦心の煩ひ
じゃ。畢竟すこしばかりの身びいき、身勝手のために、ならぬ事を無理やり
にやり付うとする無分別から、さまざまの苦をうけるのでござります。一た
び本心を會得すれば、ならぬ事はならぬと知り、難儀な事はなんぎと合點し
て、強て身を通れうとはいはたしませぬ。是を中庸には富貴、貧賤、夷狄、忠
難、君子、入として自得せずといふ事なしというてござります。此味がしれ

なかの用心

ませぬと、苦樂は體にあるやうに覺えて、心はわきへ捨て置いて、ひたすらに形の樂をもとむるところから、奢せこりにうつり吝嗇りんしやくになり、却てこゝろに苦をうけて、泣てばかりゐる様に成ます。兎角何事も心の事じゃ。ドウゾ皆さま御なきなされぬ様の御用心を御たのみ申ます。休息。

—終—

鳩翁道話 貳の下

日蓮上人の歌

「心こころからよこしまにふる雨はあらじ風こそよるの窓まどはうつらめ。」此のうたは高祖日蓮上人、身延山御隠居ごいんきよの節の御詠歌でござります。人の心は眞直まっすぐなうまれつき、其心のゆがむのは、是みな見たり聞たりするに取らるゝによつてじゃ。たとへば雨は眞直まっすぐにふるもの、なぜなれば空より下たへおちるもの故、ゆがんで落る筈はないのじゃ。夫に窓へ横しぶきにあたるは、畢竟ひんぎやうかぜの爲にゆがむのじゃと、御よみなされた歌でござります。論語に子曰、人之生也直、罔しひていけるや之生也幸而免ると申て、なるほど人は正直しやうぢきにないと、天地の間には起たつてゐられぬ筈の事なれども、こゝろをゆがめて、まごくと生いきてゐるのはほんの是がこぼれさいはひとふものじゃ。生てゐるとはいふものゝ、世間で人のやうには申ませぬ。その筈はずでござります。人の心がないによつて、生ながら鳥類畜類の仲間なかまいりをせにやなりませぬ。わが神國しんこくのをしへも、正直を本もととすとあれば、何分なにぶんにも人はすぐてなければならぬ。旅をして見ますれ

神國のをしへも正直な本とす

家は旦那の
心一つ

眞すぐな力

ば、おもい兩掛を、竹杖壹本で軽々と肩やすめする。能うかんがへて御らう
 じませ。あのほそい竹杖で、貳十貫目の重荷が、杖のさきにかゝつてあらう
 筈はない。これ全く竹杖を眞すぐになて、置によつて、貳十貫目の重荷が
 かつてもあれぬのじゃ。ある人の道歌に「すぐなればおもにかけてもれぬ
 なり世わたるわざの息杖ぞかし」三間間口でも八間間口でも、息杖は大黒ば
 しら壹本、五人ぐらしも十人ぐらしも、旦那どのの心ひとつで、家内中の重
 荷が持てあるのじゃ。もし旦那の心がゆがむと、家内の重荷がひつくりかへ
 り、大こく柱に蟲がいると、八けん間口がへたばつて仕まふ。兎にもかくに
 も、眞すぐな力は有がたいものでござります。大黒柱に蟲が入たのを、大工
 どのに見せると、建なほさうより仕様がなまいといふ。旦那どのの心に蟲が入
 ると、これも同じことで、焼直さうより仕かたがない。どうぞ蟲の入らぬ間
 に、ゆがみを直すことがかんえうでござります。筒様には申すものゝ、誰じ
 やというても、我こゝろをゆがめうと意ふ人はなけれども、難儀なことは、
 見るにとられ、聞に取られて、思ひの外にゆがみます。

ゆがむにつ
いての咄

欠落

無分別

若いは能い
がしどがな

このゆがむについておそろしい咄がござります。ある御國に三百石どりの次
 男、としごろは甘ばかりの人、色情の事について若氣のあやまりより、俄に
 出奔をする事あり。其節夏のころにて、ことさら夜分なれば、浴衣に大小の
 み、袴もきず、懐中ものもなく、城下へしのびて遊びに出たるまゝにて、其
 場よりの缺落なれば、もとより何の用意もなく、無貳の朋友一人に此事をあ
 かし、いかゞはせんと相談をいたされました。其朋友も無分別なわかき人な
 れば、何の思慮もなく、手紙一通したゝめ、其ところより七八里ばかり隔て
 たる、さる山寺の和尚にする人のあれば、此寺へ行き此書状を出しなば、か
 くまひくれるであらう。國元の様子はおとより追々しらすべき間、まづかの
 山寺にかけを隠されよと、をしへました。こなたも無分別な若さかり、何の
 用心もなく、心得たりとかの書面を懐中して、ゆかたのまゝにて城下をたち
 のきました。さりとは若い衆は、無分別なものでござります。諺に若いは
 能がしどがないと、親の案じる事も、ゆくさきのつまらぬ事も、道で難儀す
 る事も、辨へのないは、夢のやうなものでござります。或人の道歌に「わる

一足あとへ
たちもどる
事が出来ぬ

身をよする
所が大事

山中の古寺

いとほしりつゝわたるまゝの川流れて淵に身をしづめけり。まんざら若い衆
じやとて、氣のつかぬのではなけれども、一度おもひつくと、能うてもわる
うても、一足あとへたちもどる事が出来ぬ。ソコデ忽ち行あたり、鼻打てか
ら後悔して、どんな事をした、これはつまらぬといふ内に、又つまらぬ事を
思ひついて、我とわがてに淵に身をしづめけりじや。此咄の事ばかりじやご
ざりませぬ。兎角わかい御衆は、平生のより所が大事じや。猫はなまぐさき
をこのめど、寺にかはれると據なう精進する。蛇はのらくらとゆがむが持合
せなれど、竹の筒に入れらるゝと、據なう真直に成てゐる。とかく身をよす
る處が大事じや。わかい衆はこのはなしを聞いて、能う腹の中へたち反つて、
吟味して御らうじませ。どんな所へ入込て遊んでゐるぞ。中宿か料理や歟。
女藝者のふるびた所へ這入りこんでゐやせぬ歟。能う御せんさくをなされま
せ。扱かの御侍は、つひに生れてから親の懐を一日もはなれた事のないのに
心からとて夜通しに知らぬ道を彼山寺へ尋ねてゆく。是ほどのはたらきを主
人歟親のためにしたら、大なる顔をなさるであらうに。どうやらかうやら、尋ね

居さふらふ

親の慈悲を
思ひ出す

あたつてゆきつゝいた所が山中の古寺、親のまへてさへかゝめぬこしを滅多
に御じぎし、彼手紙を出されると、和尚がうけとり開いて見て、此手紙の様
子では、まづ此方にしばらくござらばなるまい。しかしながら小僧とても
なし、下男もつかはぬ貧僧でござれば、どうて水も汲んでもらはにやなら
ぬ。其外ふきさうぢやら、又寺役のあるときは、穴も掘てもらはにやならぬ。
マアそう心得て、そこらで足を洗うて、上つて茶粥でもくはつしやれと、目
見にきた門番へいひつけるやうに、舌長にいはるゝ。かなしい事は三百石取
りても、國を立のきてみれば、つぶ三文まうける術はしらず、路用とても壺
文もなし。さし詰め居さふらうのあたりまへなれば、口をしながらハイ〜
というて、庭のすみて足をあらひ、和尚のくひ残された、水くさい茶がゆを
一ばいすゝつて、夜通しのつかれもやすまる事歟。猿つかふやうに追まはさ
れ、仕なれもつけぬはき掃除、ナント氣の毒なものじやござりませぬ歟。此
とき親の慈悲をおもひ出し、百まんだら後悔しても、あとへはかへらぬ。是
じやによつて、足もとのあかいうちに、用心をせにや成ませぬ。かう成てか

らは、竊桶へ足をふみこんだやうなもので、國へもいかれず、寺にもおられず、外に仕おぼえた事はなく、是はつまらぬ〜と思ふうちに、秋もはや夜さむに成て来る。ある日和尙が朝から托鉢に出られたあとは、そこらはきしまひ、夫からはしよさいはなし、時は八月の中旬、國から着て来たゆかた一まい、汗づいたのとよごれたので、どろ〜としてあるを、曠着にも常着にもタツタ一まい、ソロ〜寒さには向うて来る。せんかたなさに客殿の椽にねころんで、猫のやうに丸う成て日向ぼこりしてゐながら、つくづくと思へばおもふほど、とんとつまらぬ。國からは便もなし、和尙の顔つきも、此ごろはめつきりわるし、寒そらには向うてくる、どうしたら能からう。イツン腹切う歟、首縊らう歟と、腹の中はかき亂したやうに成て、見るともみぬともなしに、麓のかたを見やれば、庄屋殿のうちが、目の下に見える。此寺は山の尾さきに建た寺で、客殿の椽から見れば、一村は目の下、庄屋どのの椽から、人の見てゐるもしらず、村方のあつめ銀を數をあらため、包み直して金戸棚の引出しへ入らるゝを、彼息子は吃と見とめると、ぞつとする程

腹切うか首
縊らうか

心の有所が
肝要

おそろしい
ものは金銀

ほしう成た。こゝが人の一大事の所じや。室鳩巢先生の歌に「朝夕にたもつわが身はからごろもたちゐにうつせ道のすがたを」心がこゝろの有所にないと、何時無分別がおこらうやら、こはいものでござります。是じやによつて金銀の取あつかひは、みだりに人に見せる物ではない。金銀は人の身にいたつて大切なものなれども、能く又人の身を害する媒となるものじや。何の心もない人でも、是を見ると何となう心が出来る。心なければ何ともない等てござります。兎角おそろしいものは金銀、人に罪をつくらすのも金銀。されどもなければならず、あれば煩はし。さておもふやうにならぬは、浮世のありさまでござります。何分程ようせねばならぬ事じや。時にかの息子どのが、庄屋の金を一ト目見るより、身にしみ〜と欲しう成て、どうしたら能からうと、椽ばなにねころびながら胸算用、つく〜と足場を見るに、忍びこひには究竟の家だち、家内はわづかに五人ばかり、もし見とがむる者が有たら、夫こそ百ねんめ、蹶ちらかしてあの金をこしにつけ、幸ひ八月十五日、月は有あけ、立のくには至極の勝手じや。首尾よういたら

心は身を害
ふるをも思
ひ付く

からだを隙
におくはお
ほきな毒

ば、人しらず盗取て、京歟江戸か大阪か、三ヶ津の間へ出て、どう成とも身のかた付は出来るであらう。所詮この山寺に、いつまでゐたとて國へ歸られるわけでもなし。和尚のつらくせはわるし、身のまはりはうすし、イツソ今夜たち退が上分別じやと、無分別のてつべいをかながへ出した。ナント恐ろしいは人のこゝろでござります。心は身のため計をおもふもの歟と思へば、又身をそこなふ事をおもひつく。尤本心は善ばかりなれども、かやうなとき、うごくこゝろは意識というて、得て悪を思ひ付やつじや。禪家の語に、莫信爾之心、心爾身之仇也というてござります。成ほど油断のならぬ心じや。ある人の道歌に「こゝろこそ心まよはずこゝろなれこゝろに心こゝろゆるすな。」又大學の傳には、小人間居爲三不善、無所不至と、兎角からだを隙におくは大きな毒じや。どうてのらららとしてゐると、ろくな事は思ひつかぬ。此息子殿も目くら歟、イツソいそがしうて走りあるいたら、こんな無分別はおこりはせぬ。大それた人のかねを盗んで、また人をこゝろして立退ふといふ分別が、どういふ所から出ましたぞ。チト考て御らうじませ。むかし

腹の中から
石川五右衛
門

昔は物を思
はざりけり
脇の下から
冷汗

から家業を精出したものが、盗をしたためしはない。盗をするものは、皆家業がきらひじや。御たがひに身のうへに立かへつて、商賣がすきかきらいか、折々せんさくして見ぬと、腹の中から何時石川五右衛門や、熊坂長範が出まゐるものではござりませぬ。心にこゝろゆるすな。折角吟味が肝要でござります。ソコデかの息子が、いよく今夜と一決して、足場をとくと考へおき、首尾がよろてもわるうても、今夜のうちに十里の道ははしらにやならぬ。今のうちにとつくりと寝ておいて、晩につかれぬ用心せうと目をふさいで見ても、胸がもやつき寝入られぬ。どうぞ一と寝入ねたいものじやと、今度は客殿の方へむかうて、こゝろりと寝返りをして、内をうそうそを見廻せば、座敷のすみに六枚屏風がたてゝある。色紙がたの小倉百首、見るとはなしに見てゐるうち、ふと目にかゝつたは、「あひみてののちの心にくらぶればむかしはものをおもはざりけり。」何とおもうた歟、かの息子が此うたを二三返吟じて居るうち、俄にこゝろがかはつて来て、今夜の仕業をやめにする氣に成たら、脇の下から冷汗がひつたりと出たと申事じや。これは何てにはかに善心に成た

歌のこゝろ

のでござりませうぞ。此歌は中納言教忠のうたじや。歌のこゝろは、おもふ人に一度あひましてからに、逢ぬさきの心とくらべて見ますれば、逢ぬ先は物おもひがなかつたのに、逢うてからのちは、物おもひがたえぬと、よんだ歌でござります。今この息子どものも、此歌で心のたて直しが出来たのは、なぜなれば、今此寺に居れば、國からはたよりはなし、和尚の墨つきはわろし、寒そらにはむかふ、小遣錢はなし、仕おぼえた商賣はなし、仕付ぬはき掃除はくるし、是はつまらぬとおもうてゐるが、是をつまらさうとして、今夜庄屋のうちへ忍びこんで、金を取る歟、モシ見咎られたら切殺すか、よく金を盗みおふせたところが、天の網はのがれぬ。たとへ京大阪へ出て、立身出世をした所が、盗人の名はのがれぬ。けふはあらはれる歟、あすは召捕にくる歟と、人のさゝやく聲も肝にこたへて、廣い天地の間に、五尺のからだの置處がない様に成つたときにつまらぬのと、今かうやつてゐて、つまらぬのとをくらべて見たら、盗をせぬさきのつまらぬ方が、遙にましじや。盗てからつまらぬときは、むかしはものをおもはざりけりと、其時後悔やく

天の網はのがれぬ

歌の徳

にたゝぬ。夫より此まゝじつと辛抱してゐたら、其内には國から便もあらう、滅多にうろたへる所でないと氣が付て、立もどりの出来ましたのは、ナントありがたい、歌の徳ではござりませぬか。一日に一字まなべば三百六十字、一字千金にあたると、高いものゝやうなれども、今この場所で見ますると、中々高うござりませぬ。若此男が無筆であつたら、此立かへりは出来ませぬ。三十一字がよめたおかけて、首が胴についてある。一字が千兩なら、三十一字で三萬千兩じや。ナントあなたがた三萬千兩の金を進上するが、首をおくれなされと申たら、たとへ千萬兩の金にても、替るいのちはないとおつしやらう。して見れば、一字千金、たかいものではござりませぬ。どうぞちひさい時から、手習よみものを精を御出しなされませ。此やうな利益がござります。是から彼息子どのが、年月をじつと辛抱してゐらるゝうち、國方から親類が来て、寺へも厚く禮をいひ、始て山寺の苦患をのがれました。しかしながら一旦出奔したもなれば、國元へは歸られず。そのまゝ町人に成て、家業を精出された。ところが運よう商賣も繁昌し、れきゝの商人に成て、能

手習讀書に精を出せ

昔のさんげ
咄

立かへり

我が身が可
愛いよりの
無分別

いかげんな、親仁に成た時分、わかひ人を見ると、昔のさんげ咄に、かならず此はなしが出て、若いときにはどのやうな不了簡が出ようもしれぬ。もしあひみての歌がなかつたくらゐなら、どのやうな事にならうやら、今はなすもおそろしいと、毎度さんげばなしを、懇意の人が承はりましたを、又私へはなされました。あまり有がたい事ゆゑ、今ばん御はなし申ます。此息子どのは、能う立かへりが出来たものでござります。百人に五十人は、この立かへりが出来にくい。我身が可愛くともふより、いつしか心を押ゆがめて、たわいもないものに成ます。目が可愛によつて、面白いものが見たし、耳が可愛によつて、三味せん太鼓の音が聞たし、鼻が可愛によつて、掛香や松金油の匂ひがかぎたし、舌が可愛によつて、うなぎすつぽん茶碗むしがくひたし、からだ中が可愛によつて、商賣が仕ともない。ソコ次第に貧乏して、三疊敷にちんからり、百文が米をかひかねるとき、こんな苦しい所帯をせうより、たとへ死ぬとも、一トおごり奢て死んだら、一生のおもひ出、たれか百年いきるもの歟、あした死ぬるも、來年死ぬるも、おもへば同じ短い命じ

や。疊のうへて往生するも、河原でのたれ死ぬるも、しぬる味にかはりはない。さらば今夜どこてなりと盗にはいりて、金貳參百兩ふところへねぢこみ、おもふ存分おごりちらかし、首とられて仕廻ふ方が埒あきが早うて樂じや。こんな貧乏を長うするは、埒があかいて氣色がわるいと、無分別な石川五右衛門、熊坂の長範が得てあるものでござります。首尾よう盗おほせる事歟、はした金をぬすまうとして、おもひの外に引くられ、獄屋のうちへ打こまれて、握めしに香のものかぢるとき氣がついて、どんな事をした。やはり元の三疊敷、ちんからりに百が米、貧乏でもわが所帯ぢや。斯うやつてゐれば、目の目ををがむ事はならず、近所あるさもする事ならず、我からだを我ながら自由にする事のならぬとは、何の因果ぢや。どう見てもうちの貧乏が有がたう戀しうなる「逢見ての後の心にくらぶればむかしは者をおもはざりけり。」扱御役人の前へ引出され、水責火せめのくるしみを受るときは、はじめの獄屋の中がこひしうなり、早う責苦を助かつて、獄屋へかへりて休みたいと、むかしはものを思はざりけり。やはりあとが戀しうなる。其罪人が罪きはま

あとへんが
こひしうな
る

樂は心の生
れつき

或獨り者の
嘯

隣が火事じ
や

つて、首の座へ直るとき、どこが戀しいぞ。たとへ水責火責はちろか、骨を
ひしがれ肉をさかれても、いのちさへある事なら、ヤハリもとの責苦が戀し
い。昔はものを思はざりけり。せんぐりく跡へんが戀しうなる。ある人の
發句に「手にとるなたゞ野におけよげんげ花」兎角今日の有がたい事をわす
れて、外をねがふ所から、思ひの外に心がゆがむ。さらば人は苦しみに生れ
たもの歟といへば、安樂は人のうまれつき、先師のいろは歌に、「らくがした
くば心をしりやれ、らくは心のうまれつき」此樂な心をもちながら、くるし
んでうろたへるを、たとへのはなしがござります。

ある獨り者が、よう寐てゐるとき、隣が火事じや。近所はやれそれと騒だつ。
朋友が馬提灯さげて見廻に來た所が、門の戸がしまつてある。南無三八兵衛
のみ過て寐てゐると見える。焼ころしてはならぬと、戸を蹴やぶつて内へは
いる。その物音に八兵衛、ふつと目をさまし、うろたへて赤裸裸て寐處からと
んで出る。友だちが持た提灯鼻のさきへつきつけ、隣が火事じや。見廻に來
た。八兵衛よろこび、夫は能う來てくれた。其提灯かしてくれと、友達の提

闇がりの心
もち

灯をかりて手にさげ、赤裸裸で庭へ下りたり、うらへ出たり、又表へかけ出し
たり、しきりにうろたへさわいてゐる。友達が合點がゆかず、八兵衛なにを
捜すのじや。八兵衛ぬからぬ顔で、行燈がさえてあるゆゑ、火打箱さがして
ゐるといはれた。これが銘々共によう似たはなしじや。結構な提灯のあかり
を己が手にもちながら、火打箱をさがしてゐるは、やはり闇がりの心もちじ
や。明らかな本心を御たがひに持つてうまれて、樂はどの様にも出来るもの
を苦しんで一生くらすは、此八兵衛の御連中じや。このくらゐ心から物の大
小輕重がわからぬ様になり、大切の心のゆがみは捨て置いて、指のかゞんだ
を苦にやんで療治する。ソコデ孟子も御しかりなされて、此之謂不_レ知_レ類と
仰せられました。猶明ばん御はなし申ませう。下座。

—終—

鳩翁道話 參の上

孟子桐梓の事

孟子曰、拱把之桐梓、人苟欲生之、皆知所_レ以養之者、至_レ於身_レ而不知_レ所_レ以養之者、豈愛_レ身不_レ若_レ桐梓_レ哉、弗_レ思甚也。扱此章は前晩のつゞきにて、孟子またたとへをもうけて御しめなされたのでござります。拱とは左右の指をもつて圍みましたるを拱といふ。把とは隻手_レ握りを把と申す。桐とはさりの木、梓とはあづさの木でござります。畢竟拱把の桐梓とは、わづか一握りや二握りの、ほそい小さい樹木でも、これをそだてやうとぞんじますれば、かならずこれに培をし養ひをなして、そだつる事をしらぬ人はござりませぬ。故に人苟欲_レ生_レ之、皆知_レ所_レ以養_レ之者_上と仰_レられました。サアこゝが入用の所てござります。樹木をそだつる事は、養ひがなければならぬといふ事を知て居人が、己が身をやしなふことを知りませぬ。是はどうしたものでござりませうぞ。養ふことをしらねばこそ、明けてもくれても思ひつく事は、錢がほしい、金がほしい、よいものが着たい、うまいものがくひたい

我が身を養ふ事を知らず

得手勝手な
事ばかり

世俗調

九八

と、得手勝手な事ばかり思ひ付て、我身の倒るゝことも、我身の害になる事
もかまはず、無分別ばかり、是即うゑ木をそだつる事を知て、我身をやしな
ふ事をしらぬ。故に至_二於身_一不知_レ所_二以養_レ之者_一と仰られました。ナント
人はかしい様でも、また愚かな所があるものでござります。畢竟わが身を
可愛がる様で、實は可愛がらず。却つてうゑ木を可愛がる事をしつてゐるは
ナント無分別ではない歟と、扱こそ豈愛_レ身不_レ若_二桐梓_一哉。弗_レ思甚也と御叱
なされたのでござります。さてこゝに身を養ふと申てあれども、強ち身の事
ばかりではござりませぬ。則心のやしなひじや。身心一_二双_一と申て、心をやし
なふ事をしらねば、身をやしなふことが出来ませぬ。心をすてゝおいて、身
ばかり養はふとするは、所謂身最_レ負_レ身勝手と申す、私心私欲のかたまりに成
まする。その私心私欲で身を養はふといたしますると、かへつて身をそこな
ひまする。愛の境がいたつて六かしい所じや。心を捨ては何もする事はござ
りませぬ。心をすてゝする事が有たら、みな身最_レ負_レ身勝手にござります。古
歌に「つくづくとおもへばかなしいつまでか身につかはるゝ心なるらむ」成

身心一_二双_一

身につかは
るゝ心

婦人花見の
咄

ほど心が主人となつて、身を家來としてつかふ時は、皆道にかなひまする。
身を主人として心をつかひまするは、心をすつると申ものじや。心が身につ
かはれますると、いつでも道にはづれて、みな身最_レ負_レ身勝手になります。
此道理は能_レ辨_レへてゐながら、ヤツパリ身最_レ負_レ身勝手にやめられず、心に心
のつかはれてゐるは、口をしいと詠_レだうたてござります。いかさま身勝手す
る人の、はらわたの開帳に能_レう似_レた咄がござります。
至極尾籠_レなはなしなれども、ねむりさましに聞て貫はにやならぬ。これは都
のはなしでござりまするが、花のころに成ますると、あらし山、御室の櫻がり
とて、京中の貴賤皆花見にまゐります。其中には大家の奥さま、あるひは娘
御、または遊女町の藝子女郎、衣装に花をかざり、こゝを曠と見物にまゐり
まする事じや。嵐山までは京をはなれて一里半ばかり、何んぼ美しうかざり
たてた娘御でも、出ものはれもの所きははずといふ譬の通り、途中で便所へ
行たい事がある。流石に野中で尻もまくられず、通り筋の見ぐるしい百姓家
へかけこんで、御無心ながらうづ場を、ちよつと御かし下されませと、赤

鳩翁道話 巻の上

九九

かし雪隠

い顔して断りいひ、裏口へ出て見た所が、うそぎたない菰だれの雪隠、これには京の女中がたが、毎年大きに困る事でござります。成ほど人間かしこしと申て、ある通り筋の小百姓が、此事を考へ出して、かし雪隠といふ事を始めました。其趣向は、門口に雪隠をたて、側に手水鉢をすゑ、墨ぐろにかし雪隠一度三文と、かき付た看板を懸ました。尤これは甚おもしろい趣向で、至極重寶な事ゆゑ、花のころはけしからず流行ます。勿論これは兩徳の趣向で、女中がたは赤いかほして口たれて、きたないめをせいでも、三文で挨拶なしに、我家の雪隠へはいるやうな顔つきして、用がとゝのひ升。又雪隠のかし元は、三文のかし代をとるばかりじゃやない、あとへ糞がのこりますゆゑ、これも至極勝手がよろしい。全くかしざしきから、おもひ付た趣向とみえまして、此ごろめつきり身代を能ういたしました。或人の道歌に「よい中も近ごろうとく成にけりとなりと成をたてしよりのち」とかく人の銀もうけが羨しうて、又ねたましうて、かちちとしてなりとも、己が田へ水の引たい例の身最員身勝手の強欲ものが、其村方にござりまして、あるとき女房をよんで

強慾者の咄

茶かたの雪隠

相談には、八兵衛が近ごろかし雪隠で、めつきり錢儲をしをる。おれも此春はかし雪隠をこしらえて、八兵衛の銀もうけをたゝきおとしてやらうと思ふが、どうであらうぞ。女房中々合點せず。夫はこなたわるい分別じゃ。たとへこちのかし雪隠をこしらえた所が、八兵衛殿は仕にせも古う、得意もたんとあるであらう。こちはまた新店なり、はやらぬ時は貧乏の上ぬり、それはやめさつしやるが能からうといへば、イヤ、それはわれが何もしらぬによつてじゃ。此たびおれがおもひ付た雪隠は、八兵衛のやうなきたない雪隠ではない。當時京の町は、茶の湯がはやると聞たゆゑ、茶かたの雪隠をたてるつもりじゃ。先四本柱はよしの丸太ではきたない。北山の入節をつかひ、天井は蒲天井にして、蛭釘をうつて、釣釜のくさりをぶらさげて、きばり繩のかはりに用ゐるのじゃ。ナントきめう歟。下地窓、ふみ板はけや木のじよりんもく、きん隠しはさつま杉、穴のぐるりは蠟色ぶち、壁は中ぬりの切かへし、戸は檜木の長へぎ、白竹おさへ、屋根は杉皮青竹おさへのわらび繩、大和葺にこしらえ、沓ぬぎはくらま石、かたはらに青竹まじりの四ツ目垣、

橋杭の手水鉢に、かゝりの松はしよろ／＼とした女松をあしらひ、千家でも遠州でも、有樂でも逸見でも、何でもかても取こめるこしらへ、おそらくはこいつを出したら、八兵衛の雪隠はへたばるにちがひはないと、自慢顔にいひならべると、夫は綺麗でよからうが、かし代はなんぼ取るのじゃ。しれた事一度が八文よ。イヤ／＼それはわるい分別、茶方でも水かたでも、どちらのみちさたない所、三文でも安い方がヤツパリはやりさうな事じゃに、かならずそれはやめにして下されといへば、何をぬかすやら、女さかしうて牛うられぬと、さいくはりう／＼仕上げを見をれと、かの亭主が無理に工面してとう／＼此春間にあふ様に、立派な雪隠をこしらへました。勿論かんばんは醫者どの歟、坊さまをたのんだと見えて、唐様でかし雪隠一度八文と書いて出した。ようした物じゃ、錢がたかいと、なんぼ綺麗でも借人がない。猫の子ものぞいて見をらぬ。ソコデ女房がぼやき出し、これじゃによつて、止さつしやれといふのに、仰山な錢かねいれて、此しまひはどうするのじやと、疊たゝいてわめけば、亭主は落着たかほつきして、何もやかましくいふ事は

一度八文の
かし雪隠

ない。明日はおれが得意まはりをして來ると、借人は澤山出来る。われもはやう起て、こほり飯をつめておけ。一ぺんかけ廻つてくると、門前市をなす事うたがひなしと、太平樂をいひちらして、その夜は寝る。女房はがてんゆかねど、朝はやう起き、めしを焚き、こほりめしをつめると、親父はいつもより朝寝して、四ツ時分に目をさまし、茶づけくふと身ごしらへ、ばつち尻からげ、かのこほりめしを首筋へく／＼り付、小遣せにを懐へいれ、出かけにコリヤか、得意まはりしてくると、夥しい借人があらう。モシ糞がつかへたら、中入札をかけて、隣の次郎兵衛をたのんで、一荷も二荷も取ってもらへと、いひすて、出てゆく。ます／＼女房は不思議がはれず。どうして得意まはりが出来る。京の町を何村の何兵衛が方で、かし雪隠かし雪隠と、菜や大根うるやうにふれあるくの歟しらぬと、しあんしてゐる所へ、錢筒へ八文錢をなげこんで、一人雪隠へはいつた人がある。此人が出ると、入かはり／＼引もさらず借人が出てくる。娼はびつくりし、かし代を取はずまいと、目の玉をさよろつかして、雪隠のわきに張番をしてゐると、後には段々糞がつ

かし代八貫
文

かへる。ソコデ中入札なかいりふだをかけて、一荷こえをくみ上る。また追々おひくにかり人がある。とう／＼日のくれまでには、雪隠のかし代八貫文くわんもんとりあげ、糞を五荷くみ出した。ソコデかゝがひとり歎なげび、何さまこちらの親仁は、文殊菩薩の再来か、さるにても得意まはりは、どうして仕られた事じややら、此やうに流行はやるといふは、ありがたい事ではあると、酒をかうて待ところへ、亭主がのろりと戻つて来て、どうじや、かり人は有あつたかといふ。あつただんか、かし代が八貫、糞が五荷か、こなたはどうして得意廻りをさつしやつた。町の町を一軒一軒、ところ書もつを持って頼たのみにはいらしやつたかと問へば、亭主は何をぬかしをるやら、おれが得意まはりといふは、今朝内を出て、直に三文出して、八兵衛が雪隠へはいり、内から掛かけがねをかけて、一日隣の雪隠をふさげたのじや。人が戸をあけかゝると、内からエヘンと咳せきばらひすると、はづんではあるし、おれが所の雪隠へかけ込こむのじや。アアけふは仰山げいざんなせきばらひして聲がかれた。此永ながい日を一日つくばうてゐたれば、持病せんきの疝氣せんきがあつたと、腰をなてゝいはれた。ナントあもしろいはなしてござりませうが。これ

八兵衛の雪
隠にはひり
きり

はらわたの
開帳

がこれ小人凡夫せうじんぼんぷのはらわたの開帳じや。己が金銀の儲たくけたいも、人の金銀をもうけたいも同じ事なれば、すこしはおもひやりもありさうなものなれども、我と人とは別々のものじやと覺えて、我勝手わがかってさへよければ、人はこけても倒れても、かまはゞこそ、愛を大事とわが身勝手をいたしますは、皆わが身を養やしなふともふのじや。是が大まらがひと申もので、人とわれとはあるか、萬物と我と一體、この道理だうりがしれぬによつて、人我の隔へだてをなし、めぐり／＼て我身の害になる事をしらぬ。ひどいものじや。我身勝手をあもひ付と、むさい事もきたない事もうち忘れて、春の日の永いのに、一日雪隠せつちんの中で、ひきがへるの様に目ばかりばち／＼してゐて、くさいともあもはず。まだある。晝ひるじぶんになると、首筋くびすぢにく／＼りつけたこぼりの飯を取出して、雪隠せつちんの中で辨當をつかひます。これが女房子にようはうしに見せられたすがたか。箇様に申すは、雪隠の事ではござりませぬ。腹の中のむさいきたない店たなあるしを、たとへて御はなし申すのでござります。ある人の道歌に「我心こころが、みにうつるものならばさこそすがたの見にくかるらめ。」しかしながら此様このやうな人は日本の地には

萬物と我と
一體

腹の中のむ
さいきたな
い店あるし

恐ろしい話

ない。得て唐や天竺にはあるやうにうけたまはりました。是じやによつて、至_三於身_一而不知_下所以養_レ之者_上豈愛_レ身不_レ若_三桐梓_一哉。弗_レ思甚と、孟子の仰られましたも、無理ではござりませぬ。わが身を愛するくとももうて、思ひの外に損ひます。是について、恐ろしい話しがござります。序に御聞下さりませ。

これは東國の事てござりまするが、相應にくらしまする百姓がござつて、夫婦の中に娘一人、其外めしつかひの下男下女が五六人、かの娘が十三歳になりました。母親が風のこゝちと打ふしましたが、わづか五七日で相はてますと、跡は父爺とむすめ、親るゐ村内から、後妻をいれよとすめませれど、かの亭主のれうけんには、後妻をむかへて、自然繼子繼母の中がむつまじうゆかぬときは、我も苦勞し、むすめもまた不便なり、何とぞ此まゝて娘の成人を待たんと、餘ほど辛抱はして見られたれども、何分娘のとはゆかず、家内の取締をしてくれるものがないと、奉公人が育ちにくい。據なうあれこれと聞あはせ、幸ひ近村に相應の人がらが有て、やがてこれを迎へとり、家

後妻

内の世話をして貰はれました。時にかの後妻は、はなはだ深切にむすめを養育する。むすめもまたかゝさまくというて慕する。ソコデ爺親も大きに安堵し、月日をおくりまするうちに、彼後妻が懷妊をいたして、ほどなく一人の男子をうみました。ソコデて親はよろこびの中に、また氣にかゝる事も出来て、後妻がうみの子を可愛がつて、先妻のむすめをにくむやうに成たらば、至て雖澁な事じやと、あんじわづらうて居ましたが、案じるよりうむがやすいと、實子が出来てのち、ますます繼子娘を可愛がる。中々わけ隔ては見えませぬ。これて爺親も大によろこび、親子四人がむつまじう明しくらして、娘は十七歳になり、男子は三歳に成ました。ある夜の寐ものがたりに、亭主がいふは、こなたがござつたときは、まだ娘は十三、何のわきまへも無かつたが、早十七になつたれば、今は牛にも馬にもふまれる氣づかひはなく、依て思ふに、どうぞ能い聲をもらうて、此家をゆづり、こちら夫婦は、その小兒をつれて、新宅でもかまへ、心やすう世をおくらうと思ふが、こなたはなんとおもはつしやるぞ。ソコデ女房がそれは何より有がたい事、私もはや

娘へ婿をもらはう

う隠居して、世事の世話が助かりたい。どうぞはやら聲をもらはつしやれと、きげんよう承知しました。亭主は大に安心して、夫より一月ばかり立て、用事につき一夜どまりに他所へ参りました。其夜はいつもの通り、繼母も娘もめしつかひも、夫々のよなべ仕ごと、寝時分から、在中の事なり、下男も下女もどこへやら、こそく〜と出てゆく。あとには母おやは、小兒を添乳してねる。娘も部屋へ入てねる。夜はしん〜と更わたつて、七ツまへとおもふ頃、かの繼母が寢所からそつとぬけ出、そこらにあるたすきを取て、娘の部屋へしのび込み、よう寢入てゐる娘の首へ、かのたすきをまきつけ、力にまかせてべころさうと仕ました。思ひがけなき事ゆゑ、娘はおどろきさま、襷に左右の手をかけてべさせまいとする。母親は乗かゝつてべころさうとする。行燈はきえて真くらがり、母親も聲をたてず、娘も驚いて聲も出ず、狼のくひあふ様に、闇て上になり下になりつかみ合ましたが、とう〜母親が娘のたぶさ髪をつかんで、うらの方へ引ずつて出る。隣は遠き在中の事、折ふし其夜は眞のやみ、半町ばかり引ずつて出たが、側にある野中の井戸へ、かの

繼母娘を殺す

娘を投込うとする。娘は井戸へはまるまじと、母おやに取つくを、踏たふしかいつかんで、井戸の中、難なく打こみ、跡をも見ずして母おやは家にかへり、そこら取かた付、何氣なき體で、小兒の添乳をして寢入たるは、おそろしい母のふるまひ、ある知識のうたに「おく山の杉のむらたちともすればおのが身よりぞ火を出しける。」チトかんがへてごらうじませ。二年このかた中のよかつた繼子繼母、たちまち手のうらを返すやうに、毒惡な繼母の仕かた、此おそろしい心はどこから來たぞ、うろたへると銘々どもの腹の中にも、此やうな鬼が住てゐようもしれませぬ。折々たちかへつて、腹の中を吟味せぬと、思ひの外に鬼の玉子がへり付てあらうもしれぬ。油断は一切なりませぬ。此繼母がよめ入してくる時に、先方へいたら繼子むすめをにくんで、べ殺さうといふ分別をして、嫁入して來るものぢやない。サアどういふ處から此心が出てまゐりましたぞ。四年の辛抱、タツタ一夜の寢ものがたり、娘に聲を取て家をゆづらうというた、亭主の一言で此おそろしい心になりましたのじや。なぜなれば、亭主のある間は、たとへ新宅かまへても、聲や嫁が

亭主の一言にて恐ろしい心になる

我が身より
火を出す

大事にもせう。若亭主が目をふさいだら、嫁は先妻の子なり、聲は近ごろの
入人なり、我身は後妻のことなり、ちいさいものはあるし、決して聲やむす
めにおひまはされて、口をしい日を送るであらう。さればとて聲をとる事は
よしにさつしやれといへば、繼子娘をにくむやうて、亭主への聞えもわるし、
どうぞ我うみの子に跡をとらせ、亭主はなくとも、かまど將軍で威勢ばり、
おのれがまゝにくらしたいと、悪念がきざしてより、どうぞして繼子娘を人
しれず失ひたいと、此三十日よるも晝もねてもさめても、念々こゝに在てわ
すれず、つひに恐しい志になつて、今娘をころしたのじゃ。是全く己が身の
最負より、ひいきの引倒しといふものになつて、飛て火に入るなつの蟲、お
のが身よりぞ火を出しける。是がこれ身を愛するの間違、可愛いのとんぼが
へりの、畢竟亭主の一言をわるう耳に留たゆゑ、此様な大騒動、鬼貫の發句
に、「やとはれて鬼になつたるまつりかな」亭主の一言にやとはれて、四年の
辛抱は水の泡、心にもあらで鬼に成たるまつりかな。ナントこはいものじゃ
ござりませぬか。是みな身最負身勝手からじゃ。御用心なされませ。どうや

一念化生の
鬼女

らする拍子に、一念化生の鬼女と成ます。鬼女じゃというて、口は耳までさ
けてあり、髪を手にからまいてしもとをふり上、うろこ形や紋盡しの衣装を
きて、足拍子をふんでゐるものじゃござりませぬ。可愛らしい口もととして、
繼子や嫁をかみこなす。安達が原の黒塚は、得て京にも田舎にもをりふしあ
るやう聞えまする。甚だこはいなさない事でござります。どうぞ心の鬼の
出ませぬやうに、御吟味をなされて下さりませ。休息。

—終—

鳩翁道話參の下

危きうき世の橋

「としを經てうき世の橋を見かへればさてもあやふくわたりつるかな」何さま人間一生の間には、火事にもあひ、大地震にも出あひ、大雷、大風、洪水、飢饉、其外あもひがけない災難をかうむる人もあるもの、中々つひはとしのよられぬものでござります。幸ひにそんな目にあはぬ御かたは、有がたいと思しめせ。五十年三十年のあとをふりかへつてみれば、うき世のはしを、さてもあやふくわたりつくるかな。能う命があつたものでござります。扱かの娘は罪なくして、繼母の手にかゝり、井戸の中へ投こまれたれば、所詮たすかるべき道はない。爰が有がたいものぢや。わるい事をせぬ御かけて、不思議にこの娘のいのちを助かりました。其ゆゑは、初め井戸へうちこまれたとき、幸ひにさかさまに落いらなんだ。順に井のそこへ落とどまり、そのまゝうくと、忽井戸がはへ手をかけて、水のをまぬ用心し、あがらうともがけども、中々上られず。聲をかぎりに助けてくれよと叫びました。をりふし夜あ

蘇生す

惡の報い

けまへに、隣家の人が早うおき出、田を見まはりに出かけました所が、どこやら女の聲がする。ふしぎにおもつて、こゑをしるべに窺ひますれば、井戸の底じや。さては井戸はまりと心得、さまゝにして引上げてみれば、見しりある隣の娘、何ゆゑぞと問ふ間もなく、かの娘あがると其まゝ氣絶いたしました。夫から大騒ぎになり、近所へしらせ、内へしらす。繼母はびつくりしたが、息がたえてあると聞いて、少しはおちつき、何くはぬ顔で、前夜から見えませず。亭主はるすなり。忍びをとこの方へてもまゐつたの歟と、心づかひに存ました、これはあもひよらぬ事が出来ましたと、人まへ作つてなきなきいへば、近處の人も氣のどくがり、先づうちへ死骸を輿こみ、醫者よ針たてよとたち騒ぎ、親類も追々寄て来る。亭主の方へも飛脚をたてる。氣つけなど色々もちゐ、身をあたゝめますると、彼娘が息を吹出しました。さては人心地が付た歟と、みなくよつて介抱をするうち、やうく氣がたしかになり、親類隣家の人はよろこぶ。臺處でまゝ母は、茶の下をたきながら、蘇生したと聞いて胸を冷し、もう欠出さうか、井戸へ飛こまう歟、どうしたら

どういふ譯

こはい夢

能からうと、胸は早がねを撞ごとく、惡のむくい早いものじや。ある人のうたに、「世の中をめぐり車のわがうへにつみかさねたるはてのくるしさ」天網恢々疎而不洩というて、天の網は至極ゆるやかなやうなれども、中々もらすものではござりませぬ。因果歴然、用心をせにや成ませぬ。さて親類中は、かの娘を中に取まき、どういふ譯で井戸の中へおちいつたのじやと、口々にとへば、娘はため息をついて、夕部はいつもの通り夜なべをして、其うち寢入ましたが、何かはしらずこはい夢を見まして、これはと思つて目がさめたれば、井戸の中へおちてをりました。それから助けて下されというた事は覺えてゐますが、又そのあとはどう成たかおぼえませぬといへば、親類中がそのこはい夢はどの様な夢であつたぞ。其譯をいへといふ。娘はたゞこはい夢でござつたとばかり、繼母ともどうしたとも更にいはず。唯こはい夢じやとのみうてをりまする。ソコデ親類中もわけがわからず。大かた狐狸のしわざであらう。まづ怪我はなうて重疊じやと、家々にかへりまする。母親もむすめがわけをいはぬを幸ひと、ぬつべりと押つよう、どんな夢を見やつたの

押つよい母

孝心な顔

平生の志作
所の上にあ
らはるゝ

黒龍はめい
くの腹の
中

じや。さだめてこはかつたであらうと、是もおもてむきの口上ばかり、其内に爺親も戻りまして、これも譯がしれねば、狐狸のわざにして、何事なう此一件がをさりましたが、たゞ繼母は明ても暮ても底きみわるうおぼえませぬ。されども娘は敢て色にも出しませぬ。ナント孝心な娘ではござりませぬか。古歌に「深山木のそのこずゑとは見えざりしさくらは花にあらはれにけり。」人のこゝろは恥かしいものでござります。事のないときは、善も惡もおしなべて同じやうにみえまするれど、事にあたると其おのれが平生のこゝろざし、所作の上にはあらはれて、芥子ほどまかくされませぬ。此むすめも此一件がなかつたら、只よのつねの在所娘、繼母の毒惡にかゝつた故、日頃の孝行のこゝろざしが、おのづから顯れまして、くるしい中にも親の名を出しませぬは「みやま木の其梢とは見えざりしさくらは花にあらはれにけり。」ナント健氣な志ではござりませぬか。また日頃の志がよからぬ方へ志すものは、是また事のうへにあらはれる。釋迦の遺教經にも、黒龍というてござりまするは、毒蛇のこじや。則銘々の腹の中のとへじや。此毒蛇が常にはねてゐ

隠れたるよ
り顯るゝは
なし

れど、何んぞ事があると、あたまをあげて騒ぎ出します。犬が中ようあそんでゐるとき、肴のあたまを一ツ投てやると、俄に牙をむいていがみ合ふ。この繼母も丁度これと同じ事て、むすめに聲をとるといふ一言に、黒龍があたまをあげて、この騒ぎを引出しました。是がこれ日頃氣質をかくしてをりまするけれども、事にあたつて毒蛇がはねまはるでござります。是じゃによつて、御互に平生腹の中をきれいに掃除して、若黒龍が居つたら、早う退治して御仕舞なさりませ。さうせぬと折々あたまを出します。遊所生洲芝居淨るり、籠甲のくし笄、緋がのこのわけくゝり、茶わん茶抄、花見ゆさん、何てあたまを出さうもしれぬ。こはい毒蛇でござります。さてかのむすめは、是ほどのくるしい目にあうても、さらに色目にも出させぬ。繼母はもとより、是がしれては身の上の一大事、じゃによつておくびにも猶出さず。爺あやは何もしらず。親類はわけが分らず。どうしてもしれます様がござりませぬが、こはいものじゃ。莫見ニ於隱と、誰いふともなく、村中でうすくと評判がある。あの娘の井戸へはまつたは、繼母のしわざじゃと、爰てはい

村中の評判

人しれずこ
そ思ひそめ
しか

九年甫のは
なし

ひかしこてはいふ。是がつひに番人の耳に入り、次第に御役人様の御聞に入て、かの繼母がたちまち召とりに成ました。壬生忠見の歌に「戀すてふ我名はまだきたちにけり人しれずこそ思ひそめしか。」人しれずこそとは、己獨り知る所で、腹の中の事じゃ。いまだ色にも出さず、詞にもなほいはぬなれども、はや世間の人が、我名をついたると、よんだ戀歌でござります。成ほどこはいものじゃ。何んぼ人のしらぬ腹の中の事ても、かくれてあるものじやない。たとへば肝の臓に病があると、目がわるうなる。腎の臓に病があると、耳が遠くなる。腹の中のやまひが顔へハッキリ出ます。是じゃによつてかくされぬ。これについて面白いはなしがござります。ある家に田舎のぼりの丁稚がござりました。九年甫を親類へもつてゆけと云付られて、有馬籠さげて門へ出ましたが、道々の思案に、九ねんぼといふものは、在所ではさかぬ名じゃ。どのやうなものぞと、蓋を取てのぞいて見れば、つひに見た事も無いうまさうな物、數をよんでみれば九ツある。さてはこれ九ねんぼといふのじやなと、早合點して忽ち一ツたもとへかくし、殘

此の八年市

繼母の白狀

娘が誠より
いつはりの
答

りを持って先方へゆき、つかひの口上をいうて、此八ねんぼを御目にかけてと申たれば、取次の女中がびつくりして、何いうてじや。是は九ねんぼじやといふ。丁稚もさてはあらはれたと、たもとから一ツ取出し、實は一ねんぼをかくしましたと、赤い顔をしられた。是がこれ、誰も吟味したのではござりませぬと、あらはれる道理がある。これじゃに仍て、めつたに物はかくされませぬ。扱かの繼母がだん／＼御ぎんみに逢まして、こと／＼く白狀いたしました。全く我うみの子に家をつがせんといふ心から、先妻のむすめを殺さうといいたしたるしまつ、井戸へうち込んだ事、のこらず訊狀にかゝつて、一々申ました。ソコデさつそく彼娘を御めしなされて、其始末を御尋になりました所が、娘は何も申ませず。たゞその夜はこはい夢を見ましたと思つたばかり、井戸へはいつたのも上つたのも、すべておぼえませぬといふ。御役人様がたが、それではすまぬ。まさしく繼母がしめ殺さうといひ、又井戸へ投こんだてはない歟と、御だづねなさる。イ、エ左やうの事は決してござりませぬ。母はつねに私を可愛がつてくれまして、中々さやうなおそろし

ありがたい
孝心
金剛不壞の
心

い事がありさうな事ではござりませぬといふ。ソコデ御役人様の仰には、まゝ母がすてに白狀におよんだれば、今さらかくしても詮なき事、有躰に申せと、すかしたり叱たりなされて、さま／＼と御たづねなさる。されども一向ぞんじませぬと計り、さだめて夫はあなた方が、こはい顔をなさるゝ故、おそれて母が左様に申ましたか。一切私においては覺えませぬといふ。いく度御尋なされても、たゞ夢じやとばかりいうてゐる。これはこれ正しく娘のいふ處いつはりに相違なければ、子は父の爲にかくすといふ、眞實の孝心、親をおもふまことより、いつはりていふ所なれば、御役人様がたも如何ともなされやうがない。たとへ水火の責をもつて御尋なされたりとも、又千萬石をもつてその心を御ひきなされても、確乎として動かざる孝行の心は、實にありがたいものでござります。これを佛法では、金剛不壞の心と申す。思案や分別で、問はれてもいふまいなどゝこしらへたこゝろは、責苦におどろき、金銀にまなこくれて、必らず動くものでござります。親をおもふ誠はしあんでもなく、分別でもなく、天然自然とうまれついた、仁義禮智のこゝろ、

御上の御仁政

こればかりはうごかすことは成ませぬ。さるによつて、つひに御評定決着して、これほどの大騒が、手がうるすみました。先づ繼母は御しかりの上、居村ばらひに成ました。又娘はこれも御しかりにて、平生うかくといたしをるゆゑ、かやうの騒にもなる。已來きつと相心得よと、御しかりにてすみました。こゝを能う御さしなされませ、御上の御仁政のありがたい事を。此ひすめは世にたぐひまれなる孝子でござりますれば、急度御褒美を下されたいおぼしめしなれども、此娘が孝行ものになると、母親のつみが重なる。夫て御ほうびに替られ、むすめを御叱りなされたのじや。實にありがたい思しめし、此とき御立會の御役人様方が、むすめを御しかりのせつは、御らくるゐなされぬはなかつたと、さる御歴々さまの御はなしてござりました。ナント有がたいおそろしい咄ではござりませぬ歟。是てとくと御合點なさりませ。身最眞身勝手といふものは、わが身のためによい事じやと、皆あもうてをりまする故、假初にも身最眞身勝手をして成ませぬ。しかるに此一件をみれば、身最眞身がつ手はとんとやくにたぬものにてござります。なぜなれば、此繼

身最眞身勝手

は役にたぬ

一の了簡ちがひより

母が娘を殺さうとするしわざは、皆わが身の勝手をおもひ、わが身の最眞をして、實子にあとをつがせ、まゝ子を殺してかまど將軍に成て、わがまゝをせうといふ身最眞身勝手なれど、其通りうまうはゆかぬ。却て此身勝手から、我うみの子にそふ事もならず、奪はふと思つた家にも、すまれぬやうになり、村拂に成て忽ち天竺浪人、こんな不了簡な女が、親里へ戻つたとて、親たちが能う戻つたといはれさうなもの歟。世間への外聞、または聲の手まへ、敷居ばたもふまされは致しますまい。又一家親類じやとて、繼子ころさうとした女を、かくまふ事は出来ませぬ。親類親子義絶はしれた事じや。タツターツの了簡ちがひ、我身の最眞勝手から、忽ちひろい世界も狭うなり、天に踏み地にぬき足して、五尺のからだのおき所がないやうに成ました。ある人の道歌に、「世の中を四尺五寸となしにけり五尺のからだ置所なし。」ナントこれが身の最眞したのでござりませう歟。身の勝手でござりませう歟。畢竟ひいきの引倒しといふものじや。皆これ身をほろぼすゆゑんものを樂しむのじや。又娘は身のひいき身の勝手は、ちよつとも致しませぬ。其證據はしめ

ほんの我なし

ころされても、井戸へ打こまれても、少しも繼母をうらみず、とかく繼母の難儀にならぬ様と、としもゆかぬに夢じやといふ一言、取つきやうのないことばじや。是が思案から出たのでもなく、また學問して、勘辨のうへていうたのでもない。只親を大事とおもふばかりで、我身のこととはすこしもかまはぬ。是がほんの我なしと申すものじや。此我なしといふものは、有がたいもので、身の勝手をせぬゆゑ、かへつて身の勝手になりまする。願はずして家の相續が出来、御上より世間にも、孝行なものじやと譽られ、する事なす事、勝手のよい事ばかりになる。眞實の身最眞身勝手がなされたくば、我なしに御なりされませ。我なしというて、體が消て仕廻ふのではない。おれがといふ心がなくなるのでござります。さりながら此我なしにはつひ成にくい事で、皆御幼少から出家をしたり、學文をなされたり、華々として御つとめなされるは、此我なしに成たいばかりでござります。幸に先師石田先生、手島先生相續て、此我なしになられる仕やうを、御傳授下された。尤箇様に申せば、何やら箱傳授のやうにもきこえ、又石田手島の雨先生が、御作爲なさ

我なしにな
る傳授

れた道のやうに聞えますれど、全く左様ではござりませぬ。ひとへに堯舜の道に沂て、少しも私の分別をまじへず、聖賢のをしへをやはらげ、人は無我が生れつきじやといふことをお示し下されたゆゑ、銘々どものやうに、文盲なものでも、いさゝか道のかたはらをわきまへ、その無我がうまれ付じやといふことを會得してみれば、おれがくといふ事は、さすがに恥かしくて、あたまも出されませぬ。されば此我なしになる道に、御すゝみ下されい。此我なしにならぬと、わが身を愛するくと思つてゐて、おもひの外に身を害し、家をほろぼします。さるによつて孟子も豈愛身不若桐梓哉。弗思甚と御しかりなされたのでござります。猶明ばん御はなし申ませう。下座。

— 終 —

跋

士之相須也難矣。非才之難、其知己者則難矣。而士有一見輒爲終身之交者上何哉。有所感也。予が翁におけるもまたしかなり。予庸愚の質、人をしての明あらざれども、久しく莫逆の知己として、義骨肉のごとく、自家一般平素爾汝の交をなすといへども、笑談の間、時として覺えず容をあらたむるにいたるは、翁の令徳睿敏、人をして能感發せしむる處あればなるべし。頃年諸州に遊歴して道を唱ふ。聽衆やもすれば千二千におよび、益を得る人常に多し。嗣子武修侍坐して聞ところを筆記せる、積て若干卷となりぬ。往日或人上梓せんことを乞といへども、翁の許さること久し。此頃友人類に武修に計り、卒に世に弘くす。武修爲人謹厚實踐、學て倦まず、且其記之詳にして遺さる、以て其志を觀るに足れり。冀此篇年々増帙して窮なからむ事を。予此舉あるを悦び、贅言を後へに書するものは、抑又爲有所感也。

天保甲午秋七月

前川常營誌

續鳩翁道話

續鳩翁道話序

柴田翁、中歲喪明、以耳爲眼、以人爲書。以耳讀人。而誦六經之語、通道義之旨、以說性命之理、使_下人知其心、以窒_{よき}惡趨_よ善。其有_レ功_二于世_一也、不_二少_一也。夫聖人之道、廣矣大矣。顏子者、亞_一聖也。猶有_下彌高彌堅、既竭_二我才_一、而未_レ由_レ從之歎_上、則爾來之賢人君子、豈有_下能詣_二其闢_一與_上者乎。乃亦各見_二其所見_一、知_二其所知_一、遂自許_二我得_二聖人之蘊_一、自以爲_レ是、而以_レ彼爲_レ非、互相排擊、而不_レ知_二此亦猶_レ彼也。謂_二之兄弟_一、閱_レ牆_一、村_一夫爭_レ席。何所_レ據之狹而所_レ懷之不_レ寬乎。道之廣大也、譬_レ之猶_レ河乎。一滴水也。百滴水也。千滴萬滴、大溝小渠、同皆水也。同皆河也。而非_レ河也。一滴浸潤、萬滴浸潤。大溝小渠以_レ溉以_レ灌。皆以_レ育_レ物、皆以_レ濟_レ人。以_二其非_二瘴_一雨毒_一露也。其於_二彼此_一、何紛紛爭_レ辨分_レ駁之爲焉。翁之說_レ道也、得_二之於心_一、而發_二之於口_一。堅說橫說、控_レ送在_レ手、或雜以_二諧_一謔_一滑稽_一、令_二人聞而笑_一、笑而拊_レ掌、噱_レ噱然不_レ覺入_二其道_一、終歸_レ正而止焉。最以_二自_一國_一君卿大夫、至_二馬_一官

厮養、婦女童豎、悅而慕之、敬而從之。皆稱云鳩翁鳩翁。何其盛哉。翁有子、曰武修。其侍講之次、從旁以邦語記之、編爲三卷、名曰鳩翁道話。刻以行于世。使荷識四十七字者、讀之直領其意。今又抄其吐屑之餘、爲三卷以續之。可謂勉矣。但吾邦之於漢土、言語不同、而文字亦異。漢人之字、一字兼數義。非如吾邦一字一意。而又有古今之分。有雅俗之別。若六經、最爲甚。若不精密討究、則其於聖經之旨、或不能無差謬之失也。余亦有志乎濟世者也。竊慮其如是、欲於鄉閭設一學館、積貯書、集會講求、以致其義、以揚推斯道圖之三十年、于今落落不_レ合。桑榆景迫、恐將終身齋志無_レ成。視彼浮圖氏之造千仞寶堂、一_レ麾而成。其難易如何也。儒道之不行於吾邦、如此也耶。可慨歎。吾願藉翁之妙舌、以爲金口之木鐸。不知翁能笑而諾乎否耳。是爲_レ序。

天保乙未臘月。胸痛褥臥不能起。口授門生某。令筆錄以贈。事在其廿七日也。

源 寵 天 錫 父

乙未
六年 天保

序

貴きを欲するは、人の同じき心なり。人人己にたふとき物あるを、とのたまへりしは、かけんもさらなる事にしあれど、いともくたふとくうれしき教になんありける。今又思ふに、物知らまく欲し、人にまさらん事を思ふも、むげにいひがひなき痴人をおきては、大かたの人のおなじき情なるべし。實に世に益ありて、しらては得あるまじき筋の、古へ今の萬の事に、深く心を入れてものせんは、いともめてたくおむかしきわざなりかし。そが中には、天つ空のありさま、地のかぎりの事しらぬ國々の、海山のたえずまゐ、人の心さま、時世のならばしなどをさへに、また目に見たらむが如く、さとり明らむる人もあめるよ。さはいとく難きわざなるをや。さも難きわざをだに、底ひの極みあきらむらむ、人の心のさとりといふものは、いともくくすしきものにはありけり。しかはあれど、いかなる事にか、己が心をばしらくほりせんとなに、思ひもかけぬ人の多かるは、いかにぞや。か

ら國の聖人の道は、其もとは、心をしり、心を正しくする外には出ざるを、其道に名高く、世にあふがるゝさまなるものも、よくせざれば、心をむねとする道なる事は、論はんものとも思はず。或は口にはしかいひながら、おのが心をも身をもをさむる筋の事をば、露ばかりも物せざる様に見ゆるもあなるは、いかなることにかと、いともいぶかしくなん。これらを以て思へば、かの外にある物をもとむるは、難きに似てやすく、己にある物をもとむるはやすきやうにてかたきわざにやあるらむ。さるを近昔の世より、心學といふをたて、ものする流ありて、其ときさうち聞くに、はかなき戲言にひとしく、誰も知たらむ事の様に聞ゆれども、實にはみなもと深く、かしこき書籍の道を、俗言にやはらげて、ものするにしあれば、いたく世の人に益ありて、いともおひかしく、めてたきわざになんありける。おのれもはやくより、此道の書籍をもよみ、此道の人々にも、これかれしたしくものして、かの道話といふをも、しばしきゝたるに、己が心をしる事をさきとし、心をしり得ても、學び、よろづに心を用ふれば、眞の道にはかなふものぞといふ事を、

むねといへるにて、實にさる事になん。さてかの人々、おのれにたふとき物あり、とのたまへりし、たふとき物といふは、やがて此心の事にて、くすしとも靈しく、あきらかなりとも明らかにて、行いたらぬくまもなく、くらぶべき物もなきものなり、といふをもとにて、いともくこまやかに、ねんごろにもねんごろにもすれば、此道によく入りたてば、世の人に名をだにしられず、さもあげもなきものゝ中にも、思ひの外に、かの泥の中の蓮、砂の中の白玉、などいはんさまの人も出来めるは、めてたしともめてたく、まことに世に益ある事、たぐひあらじと思ふに合せて、己がいひがひなき心にも、いたく益を得たりと覺ゆる事なきに、はたあらずかし。こゝに柴田翁の此道にさとり深く、近き世にならぶべき人もなく、ものせらるれば、いたく遠からぬ國々よりは、乞ひ聞ゆるまゝに、年毎にこゝかしこ行めぐりてものせられ、其中には、其守の殿の御前にも、彼道話を聞えあげらるゝさまなどの事は、はやくより聞居て、一度だにたいめしてしがなと、思ひわたりぬるを、己れ思ひもかけず、我君に従て、四年ばかりが程、大坂に在て、去年

より此京きやうにうつろひ住むに、さきに大坂にて、此翁の道話だうわの席せきものせられし事を、一二度聞つけたれば、いかてとは思ひつれど、あればかゝりといふやうにて、得ものせず。此所こゝにうつろひても、事しげくなど心にもあらで、いたづらに月日を過し、幸にも近きころ、此翁このおきなさるゆゑありて、我君わがきみの御前ごぜんに、うちくゝにめされて、かの道話だうわをしばく聞えあげられけるは、いともめてたきわざになむありける。かゝれば、己も本意ほんいの如く對面して、何くれの物語も聞えかはしなどする事とはなりて、うれしうこそ覺ゆれ。かくて此ころ、彼常かゝにもせられ、我君わがきみの御前ごぜんにても、聞えあげられたる説とぎごどもを、家つげる子、武修主ぶしゆしゆの露つゆばかりももらさず書記しよきして、はやく世にあまねかる、此流しよせきの書籍しよせきの例にまかせて、鳩翁道話とむおきなだうわと名づけて、三卷板さんくわんいたにえられ、さてつぎて此卷このまきをも物せられんとて、是がはしにいくだりといはるれば、やがて此はやくよりの事どもを、くだくしきまでかくはものしつるになんありける。

天保六年九月

京の二條の堀川の家にて

三河國吉田

中山美石識

明德を明にするしやう

續鳩翁道話 壹の上

男 武修 聞書

太甲たいかあにいはく、諛天このてんの明命めいめいを願ねがるとは、則大學すなはちの傳つたにして、書經しよきやう太甲たいかあの篇かみを引ひて、明德めいとくを明あらかにするの仕様しやうを、おしめしなされたものでござります。まづ諛天このてんの明命めいめいといふは、お互たがひに持合せた本心ほんしんの事ことじや。この本心ほんしんは手てまへ勝手にこしらへたものではなく、則天すなはちより稟得りやうとくしましたもので、仁義禮智信じんぎれいちしんの徳とくを具たもへ、親おやに向むかへば孝かう、主人しゆじんに向むかへば忠ちゆう、兄弟けいだい中ちゆうよう、夫婦ふうふはひつまじう、朋友ほうゆうには眞實まじつのまじはり、何なにひとつ不自由ふじゆうな事ことなく、物ものに應こたじて自在じざいなる故ゆゑ、明德めいとくとも申まをします。則本心すなはちほんしんの尊號そんがうでござります。たとへば、人に仁義じんぎあるは、天てんに日月じつげつのあるやうなものじや。もし天てんに御日おひさまやお月つきさまがなかつたら、世間よこはくらやみ、人も是こゝと同じ事ことで、仁義じんぎの良心りんしんをうしなふたらば、親子おやこ夫婦ふうふの辨わへもなく、主従しゆじゆうの差別さべつもしれず、家内かない一統いつとうやみくもぐらし、ナントつまらぬものではござりませぬ歟か。かるがゆゑに明命めいめいを願ねがると申まをして、常に本

本心に目を付くること

續鳩翁道話 壹の上

霧にぞいた袖ぬらす

寝小便をす
る小者の咄

心に目をつけて、無理はせぬか、無理はいはぬ歟、身欲のために昏みはせぬ歟と、ぎん味するを願ると申します。古歌に「雨ならば、宿もかるべき夕ぐれに、霧にぞいたく袖ぬらしける。」此うたの意は、はじめより雨とすれば、宿をかりて、ぬれぬ用心をするなれど、夕ぎりなれば目にもたえず、これほどの事はと、ゆるす心にゆだんして、衣類をひたとぬらしたと、後悔のうたときこえまする。何さま誰しも、わるいと覺えて、わるい事を仕出す人はなけれども、明德のくらいゆゑ、いつしか身最身がつ手にながれて、果は申し譯もたぬ大事になる。只恐ろしいものは身びいき、身勝手。

ひととせ越前の國へくだりました節、ある人の物がたりに、ちかきわたりに平泉寺村といふ處あり、其村に、相應にくらす百姓があつて、多くの召つかひの中に、十五六になる小者、尾籠な事じやがひえ症にて、毎夜小用を取はづし、夜具も疊も、ぬれくさるゆゑ、主人大きにこまり、いろ／＼療治しても驗なく、せんかた盡たるところで、一つの勘辨を仕出した。其趣向は、家のうちに馬部屋ありて、馬を二疋畜ましたが、その馬部屋の二階は、丸竹を

小者馬部屋
の二階より
落つ

あみて、簀子にしてござります。彼小者をこの簀子のうへにねさせました。是がこれ一舉兩徳の計と申して、その故は、すべて越前にて、農家に畜置馬は、雑役というて、みな牝馬じや。秋になると、稻をつけたり、こやしを着たり、其餘はたゞ馬部屋に繋ぎ置て、肥をふます事とござります。時にかの小用たれを、簀子の上にねさせると、夜中に度々取はず。ソコデすのこの間から、小用は瀧のやうにながれましても、すこしもかまひにはなりません。馬の小便と人の小便と、合せて丁度よい肥になる。氣の毒なものは馬じや。夜中によろ寝いつたところへ、折々の大夕だち、畢竟小言をいはねばこそ、よかつたものじや。然るにかの竹簀子は、いつの時代にこしらへたやら、竹は悉くひしが入つてある。その所へ、夜毎に小用でくさらしたもののゆゑ、次第に腐がまはつて、ある夜かの簀子がぬけました。ナニガ小者は、晝のかせぎにくたびれて、二階から落るもしらず。迷惑なは二疋の馬じや。何心なく雙てねてゐる真中へ、おもひがけなう人がおちたゆゑ、馬はおどろき右左りへたちのくと、小者は何も知らず、只グウ／＼とねてゐる。これ全く馬部屋

の中には、糞を多く敷たる上、馬の小便にてよい程にしめりがあれば、ふとんの上へおちたも同前、さるによつて目がさめぬ。さて奇特なものは馬じや。腹もたてず、又ふみもせず、うしろ足で、馬部屋の板をどん／＼と蹴て、家内の人をおこし、よう寝てゐる小者の、顔のあたりを、鼻あらしふいて、フウ／＼いうて、かの小者を起します。ソコデ小者がふと目をさました。燈火はなし、真くらがり、しきりに馬がわが顔をふくゆゑ、肝をつぶして大聲をあげ、モシ旦那さま馬が二階へ上りましたと、わめきましたと申す事じや。ナント身最眞身勝手は、すさじいものじやない歟、己が二かいからおちたことは棚へ上て、馬が二階へ上つたとは、よううろたへたものでござります。さりながら、簡様な事は得てある事じや。おのれが本心のくもりは、ゆめにもしらず。たゞ人がわるい、これがすまぬと、わが身を顧ず、滅多に大聲をあげてわめく人は、この小用たれの仲間うちじや。ある人の道歌に、「あざみぐさその身のはりをしらずしてはなとおもひしけふの今まで。」お互に立反つて、腹のうちを吟味せぬと、おれがよい、おれがかしていて、一生をうろた

馬が二階へあがりまし

立反つて腹の吟味

何とも仕方のないくさ

談義僧

駕籠の底がぬける

へ仕まひに、しまひます。故に明徳を明らかにするにありと申て、兎角本心をくらまさぬ用心をせねば、私心私欲、身びいき、身勝手がこげついで、此世から火宅のくるしみ、聲をいぢり、嫁をにくみ、又夫をうらみ、姑をそしるやうな、大まちがひが出来て、後にはあひてになる人もないやうに成ゆく。たとへば糞くむ杓の柄の抜たやうなもので、さはればよごれる、其まゝおけばわるくさし、なんとも仕かたのない、すたれものに成ます。よう考て御らうじませ。長い物は長う見える。短いものは短う見える。おたがひに長短を見違へはいたしませぬ。夫ゆゑ人の我をあしくいふのは、必見ちがへのない事じやと心得て、我身を顧るのが近道じや。これでおもひ出した話がございます。或山家より、京の町へ談義僧を招待に参りました。折ふし其日は雨ふりて、みちもあしく、駕籠をもつてむかひに來た。和尚もやがて用意して、かごにうちのり、京をはなれて、三四里ばかりとおもふ所で、どうした事歟、かごの底がぬけました。いたはしや、和尚は、袈裟も衣も、どろまぶれになられた。迎の人足も、氣のどくがり、そこ

らかけまはつて、繩なまぎれ多くひろひきたりて、やう／＼と駕籠がごをからげ、扱あ和尚わしによたゝび御乗ごりなされといふ。和尚わしも氣味きみわるけれど、雨あめはつよし、袈あ裟衣しあはよごれる、晝中ひるなかにあるくも、外聞ぐわいぶん悪く、ふせう／＼に駕籠がごにのるとき、コレかごの衆しゆ、モウ底そこはぬけはすまい歟。イエ／＼氣づかひはござりませぬといふゆゑ、乗移かきうつると、昇上かきあるとの拍子ひょうしで又底またそこがメキ／＼いふ。和尚わし大きに肝きまを潰つぶし、これでは中々安心ちんぢんがならぬ。御苦勞ごくろうながら合羽かっぱの上うへからいま一度丈夫ぢやうぶに繩なまがらみにして下されといはる。人足じんそくも尤なほにもひ、また繩なまぎれを拾ひろひあつめ、合羽かっぱの上うへを豎横たてよこ十文字じゅうもんじにからげ、是ではあやまちはござるまいと、道みちをいそいで、ある村むらを通りかゝつた折まふし、此村このむらに法談はふだんがあつたとみえ、參詣さんげいの老若らうじやく、道場だうぢやうの歸かへりあしに、此駕籠このがごを見付みて、かたぎぬをかけたる親仁おんぢが、かたはらのうばかゝにいふには、ナントみな衆しゆ、今日の御勸化ごくわはありがたい事ではござらぬか。いかさま無常むじやう迅速じゆんそくの世よの中なか、生者しやうじや必滅ひつめつ、會者かいじや定離ぢやうりのことわり、何なにどき如來にょらい様さまのおひかひが、あらうやらしれぬが人の身のうへ、アレあの籠駕かごを見さつしやれ。どうても京きやうへ奉公ほうこうに往いた人が、死しんだ

此の方に妻
があらばこ
そ人はいふ

よしあしは
人に見えず

と見えて、死骸しがいを在所しよへつれていぬると見える。扱あもはかないものじやござらぬ歟と、いふ聲こゑをかごに乗のたる和尚わしがき／＼つけ、さては我われを死人しにんと心得こころた歟。いま／＼しいと、わざとかごの中で咳せきばらひすると、かの老人らうじんは此こせき拂はらひにおどろき、急いそにかたはらへ飛とのき、小聲こゑに成なて、死人しにんじやと思おもうたらどうても科人かじんじやさうな。めつたに側わきへ寄よるまいぞといふ。和尚わしいよ／＼腹はらをたて、今いまはたまりかねて、かごの中でじたんだふみ、大聲おほこゑあげて、科人かじんではおりにないといふ。其聲こゑに又またびつくりして、さては科人かじんではなうて、どうても氣違きちがひじやさうなといはれた。是こゝが面白おもしろいはなしじや。何分なんぶん駕籠がごを外そとから繩なまがらみにしたもののゆゑ、誰たれにみせても死人しにんじや。然しかるに中なかから物ものいへば、科人かじんといふことわり、又また氣きちがひじやさうなといふのも、外そとからこじつけていふのではない。皆みな此方こゝに其そのすがたその模樣もやうがあるによつてじや。これてヨウ御合點ごがてんをなされませ。よいものをわるいと人はいはぬ。何事なにごともかへりみるのが肝心かんじんじや。ある人の道歌みちうたに、「世よの中なかは何なにもいはすにいとすだれ其そのよしあしは人に見えずく」あよそ物は、はじめに覺悟かくごすれば、なりにくい辛抱しんぱうも

はじめの覺悟にあり

娘が覺悟の手紙

あづかりの此身

なるものじや。かるがゆゑに、中庸に、言前にさだまるときは、躓かず。事まへに定まる時は、困しまずと見えて、兎角はじめの覺悟にある事じや。譬へば人の身に火をのせておくといふは、ならぬ事なれど、灸治といへば、小兒も辛抱する。これ畢竟、はじめの覺悟でござります。

わが友何がしのむすめ、年十七歳、天性おとなしき生たちなりしが、ことしの秋さるかたへ貫はれ、婚姻もとのひ、里歸もすみて、夫の家にかへりし跡にて、爺おやの何心なく、わが常に持なれし煙草いれの中を見れば、小さき紙にこま／＼と書たるものあり。ふしぎに思ひ取上て見れば、娘が手跡にて、夫の家にかへる折から、書きたる文なりけり。その文に、

御禮申上たき思しめしもかへりみず、つたなき事を申上り。まことになが／＼の御養いくの御恩は、舟車にもつみがたく、其上いろ／＼と御しんばいをかけ候御事、冥加のほどおもひやられまゐらせ候。さりながらこれはかへらぬ御事に候へば、たゞ此うへはあなたさま方より、御あづかり申候此身にて候へば、何とぞ親の御身に疵つけてはならぬと、大せつにいた

したくぞんじまゐらせ候。まことにいつ／＼までも、御側に居たさは限りなき御事に候へども、女子の道にて候へば、教へをまもりたくぞんじまゐらせ候。もとよりわたくしは、うまれ子になりて、わがうちへ歸り候御事ゆゑ、少しもゆきとむないとはぞんじ申さず、いさんて參じまゐらせ候まゝ、私の事はなにごとも御あんじ下されぬやう、御大事に御いとひ下され候やう、いのり上まゐらせ候。かやうに申上候へば、少しは御心もじやすく思しめしも下され候はんやと、御うれしくぞんじ上まゐらせ候。かやうなことを申し、さぞ／＼御わらひ草と御はづかしく存候へども、何とぞ御あんじ下されぬやうに、いたしたくと思ひつめ候あまりと、何事も御ゆるし下されたく候。猶行すゑながく御禮申上たく、あら／＼申のこしまゐらせ候。めてたくかしく。

菊 月 け ふ

御父母さま御もとへ

かへす／＼御兄様御あねさま方も、いつ／＼までも御かはらせなう、御せ

わさまに相成申たくと、くれぐれ御ねがひ申上まゐらせ候。めてたくかし

一生嫁入口
はるさがしま

竹の堪忍

とあり。ゆく末はしらねども、まづ此文のやうにては、よく女の道を思定めたる體なり。いかさま此覺悟ならば、舅姑にもよくつかへ、生涯夫の家をまもりて、どのやうな辛抱もなりさうに見えます。わるうすると、親の慈悲があまつて、マアこしらへをして嫁入をさすはさす物の、先方の様子を見て、辛ばうが仕にくいなら、何どきても戻つておじやと、あまい口上にかくごをきはめてよめ入する娘御は、ナント覺つかないものぢやない歟。是みな明德がくらいによつてじや。あちらへは嫁入し、こちらへは嫁入し、あれにせう歟、これにせう歟と、舅姑をえりきらひし、又亭主をより取に仕あるき、離縁状をもらふことは、書出しを貰ふ様におぼえ、杖つくまで嫁入口をたづねて、一生を終るは、はづかしい事じやござりませぬ歟。おのれさへ堪忍すれば、どのやうな家にも尻がすわる。ある人の歌に、「雨にふし風になびけるなよ竹はよゝに久しきためしならずや」これ堪忍のすがたをよみし歌と

萬行一心

唐黍も辛抱

きこえます。成ほどヨウ考て見ますれば、わづかに五寸まはり、尺廻りの竹の五間七けんたち延て、しかも末ては枝葉はびこり、其上に雪をもち、あるひは雨にうたれ、または風にふかれて倒れぬといふは、いかさま天理自然の妙用、草木情なしといへども、たほれぬ用心はきつとしてある。先年洛中大地震のとき、多くは竹藪へにげこんだ。これは竹の根がらみがつよいによつて、大地もめつたに、われはせまじとの用意、尤な事じや。この根がらみの強のは、竹のたほれぬ謂でござります。是じやによつて、人も専ら本に力をいれねばならぬ。本とはなんぞ。本心の事じや。専ら力を入るとは、時々刻々に本心を失うておはせぬ歟と、かへりみるのじや。萬行一心、これより大きな本はない。農業をする人のはなしに、瓜をつくるに、風ふく年は、小蔓が多くはるとの事、また唐黍をつくるに、風あるとは、自然と土際より上にて、多くの根がはるよし、これ皆風にあうて倒れぬ用心、驚波といはゞ、大地をつかんで辛抱する、身がまへというても大事な。しかるに人は萬物の靈として、僅の辛抱が出来かねて、身のたほれるをも厭はぬといふは

さりとは面目次第もないことじや。
 此辛抱このしんぱうでもひ出した、をかしい話はなしがある。さる所に十六七の娘をもたれたが、背せたけものびたれば、親おやたちが心がせく、又時分の娘むすめなれば、諸方から貰もらひにくる。或時母御ははごがむすめをよんでいはるゝには、方々から貰もらひにくれども、是ぞと思ふ縁えんもなかつたに、此ごろ二軒にけんからいうて来た。これは随分相談してもよからうとおもふ。一軒は金もちなれど、チト智ちどのが見ぐるしいげな。又一軒は智ちどのは品もよく、よい人ひとがらなれども、身代しんたいはうすいといふ事じや。去さながら二軒とも、智ちどのも、氣象きしやうは、實體じつたいなといふ事、何よりは是は有がたい。このうへはどちらなりとも、そなたの氣きに入いれた方へよめ入いさそう。コレ返事を仕しやれ。ハ、ア恥はづかしいの歎なげ。それならばよい事がある。金持の方へゆきたくば、右の肩かたをぬぎや。よい智ちどの方へ行いたくば、左ひだりの肩かたをぬいて見みせや。其あひだおれはこちら向むかてゐると、母御ははごがうしろ向むかれたれば、娘はこゝろ得、肩かたを脱ぬだやうす、母ははちやがモウよい歎なげ。ドレ〜とふり返つてみれば、娘は兩肩りゅうかたをスツポリとぬいてゐられた。ナント面白おもしろい話はなしではござ

りませぬ歎なげ。この娘むすめの左右の肩かたを一同にぬいだ心こころは、晝は金もちの所へゆき夜はよい智ちの方へゆく積つりで見みえる。さても油断ゆだんのならぬ娘御むすめでござります。このやうな覺悟かくごをきはめて嫁入よめいりしたら、中々辛抱しんぱうは出来るものではない。しかし此やうなむすめ御むすめは日本にほんにはありませぬ。これはみな天竺てんぢくの事じや。さるに依よて五百羅漢ごはうばくも、皆肩かたをぬいてござると、或物あるものしりがいはれた、どなたもヨウおきなされませ。古歌に、「はるの夜のやみはあやなし梅うめのはないろこそ見えね香かやはかくる。」こはいものじや。隠かくしてもかくされぬ、心のくもりが時としては見えまする。かるがゆゑに、認まご天てんの明命めいめいを願ねがふと申して、氣をつけて掃除さうじをせねばならぬ。
 さてこの掃除さうじを、よく仕しおふせたる人がある。序ついでにおはなし申ませう。上京じやうきやう邊へに呉服こふく悉しつ皆かいを渡世わたりよにしてゐる、老人夫婦らうじんふうふがござりました。しかるに家をつぐ男女おとこの子こもなく、その身は次第しだいに年はよる。親類縁者しんれいゑんしやよりあれこ、養子やしをもらうて見みても、どうした事歎なげとかくそだゝず。或は三十日、あるひは五十日、または七十日、長いのが百日ぐらゐ、およそ養子やし二十人ばかり、一人と

して辛抱しんぱうをする者はない。ナント難義なんぎなものじゃない歟。うろたへると、此様な偏屈へんくつおやぢや、鐵槌かねづち婆ばさまが、得て異國いこくにはあるものじゃ。六十七十になるもの、分別ぶんべつの通りに、つゞやはたちのものがせぬというて、小言こごばかりいうて日ひを送らば、一生養子いっせいやうしはそだぬ。めいゝ若わかいときを願ねがて、おもひやりがないと、人の子はやしなはれぬものじゃ。一生金の番かねを仕つめて、末期まうごの水壺みづかばい汲くみてくれるものもないやうな身の上みの上に成行なりゆきは、菰こもかぶりてはなうて、蒲團ふとんかぶりの乞食こじきするやうなものじゃと、町内まちうちでのうはさ、されども蓼たぶくふ蟲むしもすきくくとやられて、ある所の息子いっしんどのが、此噂こゝろざを聞きて、どうぞ其家そのうちへ養子やうしにゆきたいと、おもひ付おもひれた。たとへのふしに、小ぬか三台さんだいもつたら養子やうしにゆくなと世間よかんではいへど、人の家をつぐといふは、格別かくべつの大功たいこうじや。そのゆゑは絶たるをつぎ、廢すたれたるをおこすは、聖人せいじんのをしへにして、則すなはち天地生々てんちせいせいの道理道理じや。この息子いっしんどのも、こゝに目めがついた歟。但しは辛抱しんぱうの仕しにくい家いへと聞きて、おのれやれ、一辛抱いっしんぱうして名なを隣町りんちやうにしられうとおもうた歟。何なににもせよ有ありがたい志こころざしじや。さて縁ゆかりをもとめて申し入れたところが、早

望んで来た
養子

両親の氣質

速すみに事こととのひ、引移ひきうつつて五七日たつてみれば、なるほど今まで辛抱しんぱうの仕して人がない筈はずじや。中々ちんぢんむづかしい両親りやうしんの氣質きしつ、どう歟こうかとおもひわづらふうちに、二三ヶ月もたちましたが、どうも堪忍かんにんが成なにくい。所詮ところ詮爺やおやが偏屈へんくつをやめる歟、婆ばさまがしやべりやむかせぬと、モウ一日も辛抱しんぱうがならぬ。けふは仲人なこうどの所ところへ往ゆかう歟、あすは親おやとへ往ゆて、相談さうだんせん歟と、煙草たばこ盆ひら引ひきよせ、させるあひてにしあんの最中さいちゆう、折節せうせつて、親おやがあたらしい障子しょうしをもとめて、大工だいこうどのを頼たのみ、たて合せをして貰もらはる。ナニカ大工だいこうどのが、こてくとたて合せをしらるゝを見れば、障子しょうしの上うへをけづりては、鴨居からぬにはめて見、下したを削くては敷居しきふへはめて見、つひに障子しょうしの上下うへしたをけづりて、その上障子しょうしに弓ゆみをはりて、柱はしらのゆがみにあはせ、コットリと敷居鴨居しきふからぬにはめ、引ひて見れば自由じゆうになる。かの息子いっしんどのは、この仕業しごを見みると見ぬとも思おもはず、たゞうっかりとながめてゐられたが、おもはず持もつたる煙管きせるを取とり、横手よこてを丁ていとらつて、大おほに驚おどろかれたが、これから分別ぶんべつがかはつて、辛抱しんぱうが仕しようなり、トウ／＼この家を相續さうぞく仕しおふせて、懇こに両親りやうしんを介抱かいぱうし、末期まうごを見みとゞけ、家名いへな相

ありがたい
口のつけ所

續をしられたと申す事でござります。これがあるがたい目のつけ所じや。其ゆゑは敷居鴨居は、はじめより家についてある道具、障子は外からあらたにはひつてくる道具、工合ようはまらぬは始よりしれてある。されども障子にはまらぬといふて、家づきの鴨居をけづり、敷居を削りて障子を其まゝにはめる、大工どのはない。はまらぬときには、あたらしう入こむ障子の上下をけづりて、敷居鴨居にあはせてはめる、人の家を相續するものも、また是と同じ事じや。二親は家づきの敷居鴨居、養子は外から入りこむ障子じや。てて親の偏くつをやめるか、母親のしやべりがやまぬと、相續が出来ぬといふは、敷居鴨居をけづりて、障子をそのまゝたて合さうとする無分別じや。ソナナ大工どのは、天がしたに一人もない。はまらぬときには、何分障子の養子息子が、あれが／＼の無分別を、けづり／＼て家づきの両親の敷居鴨居に合さねば、工合ようはまるものではないと、はじめて此息子どのが気がついたと見える。サアこゝが入用のところじや。全く養子ばかりの事ではない。嫁御でも、聲さまでも、奉公人衆でも、此咄しの義理をよくのみこみ、親に

己れの無分
別を削りて
先方に合せて

むかひ、主人にむかひ、夫に向は、かならず當然の道理を得て、今までのつらい悲しい、いま／＼しいが、立どころにとけ去て、大安樂を得ること。疑ひはござりませぬ。則これが明德の明らかに成りました験でござります。休息。

—終—

續鳩翁道話 壹の下

身をすてこ
そ浮む瀬も
あれ

おれが捨
れば浮み上
る

救荒一助

「山川の末にながるゝとちがらもみをすてゝこそうかむ瀬もあれ」すべて山家にては、米麥に乏しく、あらぬものを食する中に、枳の實を餅團子にして食する所多し。その製法は、枳の殻をとりて、實ばかり袋にいれて、谷川にひたしおき、よく苦みをさりて、餅團子にするなり。今歌のこゝろは、とちの實、谷川におつればしづむ。實をとりて、殻ばかりすつれば、浮んで流れます。人もおれがといふ身最肩身勝手を捨れば、うかみあがるといふにかけ、よみしうたときこえまする。甚面白い事じゃ。これについて序に御披露申す。去ぬる天保癸巳の年、米穀のあたひ貴く、遠國には飢渴におよぶ人も多くあるよし聞えました。さる御歴々様、不便の事に思しめされ、救荒一助と題して、松の皮、藁、土を食するの法を、御ためしあそばされ、板に炙りてひろく諸人にほどこさせたまふ。御仁恵のありがたき事、申すもおそれあり。しかれども百年のゝち、自然その製法をうしなひますることあら

土粥の製法

う歎とぞんじまして、恐れをもちかへりみず、今その一法を御披露申します。松の皮、藁などは不自由なる地もござりませう。土を食する事は、いかなる飢饉にも、盡る期なく、實に未曾有の良法でござります。どなたもヨウお覚えなされませ。救荒一助の文に、

土粥の製法 或官醫の家法なり

一土はいづかたの土にても、砂、石のすくなく、土めよきを選び、土壹升に水四升入れ、桶の中にてよくかきませ、上水をさる事數へん、また水四升入れ、よくかきませ、別の桶に入れ、底にのこる砂石をさり、又水四升入れ、前のごとくかきませ、水にひたしおく事三日のあひだ、一日に三べんづゝかきませ、すまし、上水をかへるなり。葛の粉わらびの粉を、水飛する法のごとし。右のごとく製法せし土へ、水貳升入れ、煮てうすき粥のごとくして食ふ。其うちへ、菜大根など切こみ、おなじく煮て食ふもよし。一日に三合より五合までくらふべし。誠に此法をもちひば、五穀を食せざれども飢ず、身體つよく、すこやかなりとぞ。

右の通、製法の仕やうを御しるしあそばされました。ありがたい申し召ゆゑお取次をいたします。しかし是が滅多に間に合うてはならぬども、耕や飯その中にありと申せば、ゆだんがならぬ。しかし米をつんで飢饉をまたうより、人の道を勤めて、飢饉をまぬかるゝが肝要でござりませう。畢竟榮耀榮花があまつて、天地神明のおにくしみを蒙るより、困窮にもあち入ますれば、とかく身最肩身がつ手をすて、家業大切に勤ますると、いづれ分限相應のさかえにあはぬといふ事はござりませぬ。たとへば、草木の花さき實るは、人の榮と同じ事じや。同じやうに花さきみのる草木にも、大小のござりまするは、人に貧富窮達の分ちがあると、同じ事でござります。さりながら庭におふる千草までも、花のさかぬといふ事はござりませぬ。花のさかぬは、此方の身最肩身勝手がやまぬのじや。身を捨てこそうかむせもあれとよんだ歌は面白い事ではござりませぬ歎。是について有がたいはなしがある。ようあききなされて下さりませ。

江戸屋某の

勢州龜山領、鈴鹿郡川崎村といふ所に、江戸屋何がしと申しまして、相應の

非常の困窮

女房の病死

主人の逃亡

乳母の義信

百姓がござりました。主は養子にて、妻は家づきの娘、其母と三人にて、此外は召つかひの人、しかるに女房、壹人の男子をうみまして、名を橋彌と申します。此子三ツのとし、次の女子出生に付、橋彌に乳母をとりて、養育を致させました。これ則、今より十八年まへ、寅年の事でござります。さてかの出生の女子は、其後近村へつかはしましたが、また引つゝいて女子出生、これも他へやりました所、先かたにて病死いたしました。されば打つゝき出生も多く、猶また主の心得かたも能からず、次第に借金も出来、午どしの頃には、必死と困窮になりましたゆゑ、家内の諸道具は申すに及はず、田畑までうりはらひましても、猶借金もすまず、女房は困窮を苦にやみまして、申年の六月病死いたしました。跡はさんくになりゆき、村かたへも申し譯なく主も養母もつひに他國へかけをかくしました。残りしものは、乳母と橋彌とばかりでござります。此乳母名をおとせと申て、心さまのかひくしい人てござりましたが、此江戸屋へ奉公に出まして、三年ばかりは給金も貰ましたれど、そののちは不如意につき、給金も出ませず、乳母の親ざとよりは、い

とまをとり歸れと申すれども、さらに歸らず。その故は、此家次第に困窮に成り、ことに主といひ、養母といひ、心得かたも宜しからねば、いづれ遠からず家名斷絶と見極ましたゆゑ、一しほ橋彌を不便にぞんじまして、親里へ歸へりがたく、つひに自分の衣類を、ことごとく賣はらひ、金子にいたして、おや里へ遣はし、自分は生涯身をかため、やしなひ子をもりたて、江戸屋の家をふたゝび引起さんとの志をたて、親里より送り一札をもらひ、則これより川さき村の人別に入りました。かばかりの大願なれば、所詮人のちからのよばぬ所、かゝる折にこそ、神ほとけの力をからんと、うみ山かけて百里の道をたゞ壹人、讚州象頭山金びら大権現へ、はだしまゐりをいたされました。さて神前にて、主の家をとりたてるこゝろさしをつけ、三ツの願だてをいたされました。そのわけは、在中にて若い女子のひとり住居をする事なれば、心よわくてはならず。又人にうたがはれぬため、先第一に鐵醬をふくまず。第二に髪に油をつかはず。第三に元結尺長にて髪をたばねる事をせまじと、かたく心に誓ひて、つひに國元へ無事に歸られました。ナントあり難

百里の道をはだし参りて三ツの願だ

志ある者はなる

人の志

い忠義ではござりませぬ歟。此人出生は同國桑名領、員辨郡五反田村の百姓長七といふ人の娘じや。年は三十、みめかたちも見ぐるしからず、又盛り過た年というてもなし、忠義の爲に身をかまはず、主の家を引起さうとの志し、ヨウ考へて御らうじませ。まねのなりさうな事ではない。古人の語に、志ある者は成というて、いか程の大事でも、志さへ立ますると、成就せぬといふ事はござりませぬ。譬は川の中につくつく立て、雇はれた太公望のやうに、魚を釣てござる人がある。アレガ中々主命や親のいひ付て、出来さうなことではない。腰ぎり水につかつて、冷の入ことも、疝氣の發ることも、罪も報もわすれ果て、日がな一日竿を持って立通しにたち、何程魚の取る事歟と思へば、一貳寸の雜魚十ばかり、これが假令や名聞て出来るものではない。たゞ魚を釣たいといふ志ばかりで、此所作が出来たものじや。是が此日、俄に思ひついた志ではない。平生しごとするにも、商ひするにも、たゞ魚つる事ばかりおもうてゐる。此ねてもさめても忘ぬのが、志じや。古人も念々こゝに在て、忘れざるを志といふと、おぼせられた。いづれよしあしにつけて、人

志は氣の帥なり
 志がたてば氣はひきたつ
 鏡を知らぬ國の人のには

は志の起らぬといふ事はない。同じ志を起すならば、このお乳母どのゝやうに、忠孝に志をたてますと、わが志にはづかしい事はない。畢竟あれは出来ぬ、これは出来ぬといふは、志がたらぬのじや。孟子のいはく、志は氣の帥なりと。こはいものじや。こゝろざしが碎けると、氣はつれてくさつてしまふ。人は氣によつて動く。その氣がくさると、箸一本持もものうく、返事するのもしやになり、かりそめにも頬ふくらし、間がな透がな、居睡てばかりゐる様な、こし抜になるのは、みな志がくだけたのじや。御用心なさませ。志がたてば、氣は引たち、女の身もて、百里のみちを跳まゐりが出来まする。ましていはんや、疊のうへて、親兄に事へ、主人につかへ、家業出精が出来ぬといふは、六尺の積鼻禪の手まへも、面目ない。しかしこれは男の事ばかりじやござりませぬ。夫につかへ姑につかへ、家内のとりしまりの出来ぬ女中は、鏡に顔はあはされぬ筈じや。チトお考へなされませ。

これについてをかしい話がある。むかし鏡をしらぬ國の人、都へ上り、フト鏡屋の見世さきを見れば、何やらひかる物がある。ふしぎさうに差のぞいて

わが顔を親父と思ふ

格闘喧嘩の花が咲く

俄に大聲をあげ、ヤレ親父さま、おなつかしいと、かの鏡をとらうとする。亭主さきを潰し、これはどうさつしやるのじや。イヤどうもしませぬ。是は此方の親父さまじや。めつさうな、それはこちらのうりものじや。ナニうりもの歟。賣物ならば買ませうと、代物をはらひ、かの鏡を宿屋へ持かへり、さて物いうて見ても返事せぬ。これは娑婆と冥途の隔があれば、お聲がきこえぬさうな。何にもせよ、死わかれて三年目に、御目にかゝるといふは、有がたい事じやと、わが影ともしらず、悦んで國もとへ持て歸り、ひそかに二階の長持へかくして置、出はひりに二階へあがる。あるとき女房が、用事あつて二階の長持のふたを明て見れば、ひかるものがある。とり出して見れば廿五六な女がある。是も又びつくりし、二階から飛んで下り、亭主の胸ぐらをつかまへて、なくやらわめくやら、格闘喧嘩がはじまつた。ソコデ隣の妙琳が聞つけて、あいさつすると、いよくけんくわに花が咲く。妙琳も詮かたなく、ソナラわしが二階へ往て、男歟女か見届てきませうと、二階へかけ上つて鏡を一目見、こいつも又びつくりして、二かいから大聲をあげて、あま

二階の女中
が尼になら
れました

我が身を
かへりみる
が學問

乳母が推量
に違はぬ

家名相續の
願

りおまへがたが悋氣喧嘩をさつしやるに依て、氣毒や二かいの女中が、尼に成られましたといはれた。この話は狂言にもしてみせる。ナント面白い趣向じやないか。トツクリとかみしめて、御らうじませ。嫁姑の角づきあひ、親類の中たがひ、兄弟いさかひ、女夫げんくわ、村かた町内の不附合、親子主従のあひだも、うろたへると、此はなしの仲間うちが多い。ある人の道歌に「よしあしのうつるかぐみの影法師よくく見れば我すがたなり」とかくわが身をかへりみるが、學問の所詮でござりまする。身に立かへりさへすれば忠孝はつとめよい。さてかの乳母は、無事に村かたへかへり、たのしからぬ月日をおくりまするうち、果して乳母が推量のごとく、主も老母もちりくに成ましたれば、いよく志立まして、橋彌を守そだてます。尤村かたへ厄介をかけおきましたる江戸屋の事なれば、その家名を起す事は、一應にては村方へ對し出來ぬ事でござりますれば、かねて村方の頼母子へかけこみ置ましたる銀子、幸にくじにあたりましたる故、則金五兩と銀拾匁、冥加のため村方へ詫代としてさし出し、家名相續の義を願ました。村役人中を始、そ

乳母の艱難
辛苦

乳母の實子
すなも取り寄

の志をよろごび、ともどもに世話をいたしつかはしました。勿論家屋敷はうり拂ましたれば、身をおく所はござりませねども、主人はいまだ他國へかけをかくさぬ以前、屋敷の隅に形ばかりの小屋をこしらへおきましたれば、これに引うつり、人の田地四反をあづかりまして、兒を護ながら田をすき草ととり、こえを荷ひ蟲をほらひ、人の手をからずしての艱難辛苦、いふ様もござりませぬ。夜は夜なべに時のうつるものしらず、朝はくらきより起て、しのめしらむ頃まで、草履草鞋をつくり、其隙には織つむぎ縫針のわざをなして、只此兒の手足ののびるをたのしみに、年月をおくりますうち、早くも橋彌十歳に成ました。しかもおとなしう生たち、常に乳母の側で、手仕事をたすけます。ようした物じや。誰をしへねども、乳母とはいはずして、たゞかゝさまとよびまするは、ひとへに乳母の眞實、橋彌に徹する所が有て、おのづから斯うなります。扱うばのちや里には、産おとし置ました實子文五郎と申す小兒、これも十歳あまりに成ましたるゆゑ、此兒をも川崎むらへ取よせ、橋彌とも一年あまり、手ならひをさせまして、其のち人をたのんで

百里の外へ
追ひやる

松坂へ遣り、それより江戸へ奉公につかはしました。これ全く實の子を手もとて育てますと、おのづから主の子を疎略にする心がおこらう歟と、百里の外へうみの子を追やり、主の子を育ますは、ありがたい志、まことによい手本でござりまする。十八年のあひだ、朝夕の食物も、わが身は黍稗のやうなものに、糠をまぜてたべ、橋彌には常躰の食をたべさせ、兒は母とよべども、わが身は主従の心得を失ひませぬは、丈夫も及ばぬ志でござります。此誠がとゞきまして、橋彌十八歳のとき、元の屋敷地を買もどし、四間ばかりに七間の家をあらたに建、其うへ馬をもかひ、猶小者一人をめしつかひ、田地一町四反をつくり、夫のみならず、さきに家出いたされました、老母をも養ふ様に成しました。此はなしを丁稚衆も、手代衆も、女子衆も、居寝らずとヨウ聞ておかれませ。むかし木曾殿といふ大將が有て、北國に於て平家と戦はれしとき、味方の兵へ申付て、若敵がたに齋藤別當實盛と名乗ものが有たら、かならず弓をひくな。軍をかへして攻口をゆるめよと、指圖せられたこれは義仲、いまだ襦袢のうちにありし頃、故あつて實盛に七ケ日やしなは

木曾殿と齋藤別當實盛

養はれた恩
は重し

れました事がござります。此恩をおもうて、勝ほこつた軍をかへして、實もりへ敵對せぬ志、ナント養はれた恩は、重い者でござりませぬか。七ケ日はさておき、三日くはずにゐても、命がない。ましてや五年十年、あるひは半季一年、主人の養をうけて、その恩を思はず、うかくと身勝手をはたらくは勿躰ない事じやござりませぬ歟。在所にゐた時の事をヨウ思ひ出して見たがよい。着物は黒もめん紋付、裾は若松に鶴のもやう、ねんごろに彩色したのを、此上もない曠着じやと思ひ、棒のやうな鼻汁たれて、ゆりご雑炊で腹をふくらし、馬屋ごゑを負ふてあるいた事を忘れて、こんな米はくはれぬの鍋やきてなけりやめしは喰ぬの、廣さんとめは、仕きせのやうて見ともないのと、ヨウ口がはれぬ事じや。これみなおれがくの妄念のかたまりじや。ソコデさつぱり主人の恩を忘れ果て、こはいものじや。おれが此家にゐてやらずば、足のすりこ木になる程、使ひあるきしてやるものはあるまい。おれが商をしてやらずば、旦那があの樂は出來はせまい。わしがおめしたいてやらずば、家内中がみなひだる腹かへて、かつゑをるであらうと、我もく

妄念のかたまり